

桑原地区の遺跡 V

桑原 6 次・桑原東稲葉 1 次

桑原東稲葉 2 次・樽味高木 16 次

樽味高木 17 次・三町

2016

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

くわばらちく いせき
桑原地区の遺跡 V

くわばら くわばらひがしいなば
桑原6次・桑原東稲葉1次

くわばらひがしいなば たるみ たかぎ
桑原東稲葉2次・樽味高木16次

たるみ たかぎ さんちょう
樽味高木17次・三町



2016

松山市教育委員会

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

序 言

本書は、平成 20 年度から 25 年度までに、松山平野北東部の桑原地区で実施した 6 件の発掘調査の成果をまとめた調査報告書です。

桑原地区は松山平野を西流する石手川の南岸に位置し、縄文時代から中世に至る複合遺跡であることが近年の調査により明らかになっています。

今回報告します遺跡からは、弥生時代や古墳時代の竪穴建物をはじめ、古代の掘立柱建物や溝などが確認されています。とりわけ、桑原東稲葉遺跡 1・2 次調査や樽味高木遺跡 17 次調査で見つかった古墳時代の竪穴建物からは、勾玉や白玉のほか石製の紡錘車が出土し、建物廃絶に伴う祭祀儀礼の様子を詳しく知ることができました。また、桑原東稲葉遺跡 2 次調査では桑原地区では検出例の少ない飛鳥時代や奈良時代の建物址が発見され、当時の集落様相を解明する重要な手がかりを得ることができました。

このような成果をあげることができたのは、地権者並びに関係各位の埋蔵文化財に対するご理解と、ご協力のたまものであり、厚く感謝申し上げます。

本書が埋蔵文化財研究の一助となり、文化財保護、生涯教育の向上に寄与できますことを願っております。

平成 28 年 3 月

松山市教育長
山本 昭弘

例 言

- 1 本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団（平成 22 年度に財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に名称変更し、平成 24 年度には現在の公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団となる。）が平成 20 年度から 25 年度までの間に、松山市桑原一丁目・二丁目、樽味四丁目、三町一丁目において民間の開発に伴い実施した 6 件の発掘調査成果をまとめた調査報告書である。
- 2 本書では、遺構名を略号化して掲載している。
竪穴建物：S B、掘立柱建物：掘立、溝：S D、土坑：S K、柱穴：S P
- 3 本書で使用した標高数値は海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
- 4 基本土層や遺構埋土の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1998）に準拠した。
- 5 遺構・遺物の実測、製図は宮内慎一の指示のもと、平岡直美、山下満佐子、本多智絵、丹生谷道代、木下奈緒美、木西嘉子、池内芳美、築山知子、重松真依が行った。
- 6 屋外調査における写真撮影は調査担当者で大西朋子が行い、本書掲載の遺物写真や図版作成は大西が担当した。
- 7 挿図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。遺物の実測図は原則として、弥生土器は 1/4、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石器、金属器は 1/3 とした。
- 8 本書の執筆は、第 1・3・5・6・8 章を宮内、第 2・4 章を水本 完児、第 7 章を相原 浩二が担当した。編集は宮内が行い、浄書は平岡直美が担当した。
- 9 本書にかかわる遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターにて保管・収蔵している。
- 10 報告書抄録は、巻末に掲載している。

目 次

第1章	はじめに	〔宮内〕	1
第1節	調査の経緯		1
第2節	調査・整理刊行組織		1
第3節	立地と歴史的環境		3
第2章	桑原遺跡6次調査	〔水本〕	7
第1節	調査の経緯		7
第2節	層位		9
第3節	遺構と遺物		12
第4節	小結		16
第3章	桑原東稲葉遺跡1次調査	〔宮内〕	19
第1節	調査の経緯		19
第2節	層位		21
第3節	遺構と遺物		25
第4節	小結		35
第4章	桑原東稲葉遺跡2次調査	〔水本〕	41
第1節	調査の経緯		41
第2節	層位		42
第3節	遺構と遺物		47
第4節	小結		60
第5章	樽味高木遺跡16次調査	〔宮内〕	65
第1節	調査の経緯		65
第2節	層位		66
第3節	遺構と遺物		68
第4節	小結		70
第6章	樽味高木遺跡17次調査	〔宮内〕	73
第1節	調査の経緯		73
第2節	層位		74
第3節	遺構と遺物		77
第4節	小結		83
第7章	三町遺跡	〔相原〕	89
第1節	調査の経緯		89
第2節	層位		90
第3節	遺構と遺物		92
第4節	小結		95
第8章	調査の成果と課題	〔宮内〕	98

挿 図 目 次

第1章 はじめに

第 1 図	松山平野の地形概要図 (縮尺 1 : 250,000) ……	3
-------	-----------------------------------	---

第 2 図	石手川中流域の主要遺跡分布図 (縮尺 1 : 20,000) ……	5
-------	--------------------------------------	---

第2章 桑原遺跡 6 次調査

第 3 図	調査地測量図 (縮尺 1 : 600) ……	7
第 4 図	調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺 1 : 3,000) ……	8
第 5 図	1 区・2 区北壁土層図 (縮尺 1 : 50) ……	10
第 6 図	遺構配置図 (縮尺 1 : 250) ……	11
第 7 図	SB1 測量図 (縮尺 1 : 40) ……	12

第 8 図	SB1 内炉址測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 20、1 : 4) ……	13
第 9 図	SD1 測量図 (縮尺 1 : 60) ……	14
第 10 図	SD2 測量図 (縮尺 1 : 40)	
第 11 図	包含層出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4) ……	15

第3章 桑原東稲葉遺跡 1 次調査

第 12 図	調査地測量図 (縮尺 1 : 500) ……	19
第 13 図	調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺 1 : 2,000) ……	20
第 14 図	南壁土層図 (1) (縮尺 1 : 40) ……	22
第 15 図	南壁土層図 (2) (縮尺 1 : 40) ……	23
第 16 図	遺構配置図 (縮尺 1 : 250) ……	24
第 17 図	SB1 測量図 (縮尺 1 : 80) ……	25
第 18 図	SB1 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4) ……	26
第 19 図	SK1 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4、1 : 2、1 : 1) ……	27
第 20 図	SB2・3 測量図 (縮尺 1 : 80) ……	28

第 21 図	SB2 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4、1 : 2) ……	29
第 22 図	SD3 測量図 (縮尺 1 : 40) ……	31
第 23 図	SD5 測量図 (縮尺 1 : 40)	
第 24 図	SD7 測量図 (縮尺 1 : 40)	
第 25 図	SD4 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4) ……	32
第 26 図	SD1 測量図 (縮尺 1 : 40) ……	33
第 27 図	SD2 測量図 (縮尺 1 : 40)	
第 28 図	柱穴出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4) ……	34
第 29 図	包含層・地点不明出土遺物実測図 (縮尺 1 : 4、1 : 2) ……	35

第4章 桑原東稲葉遺跡 2 次調査

第 30 図	調査地周辺の遺跡分布図 (縮尺 1 : 2,000) ……	41
第 31 図	調査地測量図 (縮尺 1 : 800) ……	42
第 32 図	1 区北壁土層図 (縮尺 1 : 40) ……	43
第 33 図	1 区東壁土層図 (縮尺 1 : 40) ……	44
第 34 図	2 区北壁土層図 (縮尺 1 : 40) ……	45
第 35 図	遺構配置図 (縮尺 1 : 300) ……	46
第 36 図	SB2 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60、1 : 4) ……	47

第 37 図	SB1・3・4 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 60、1 : 3) ……	49
第 38 図	SD3 測量図 (縮尺 1 : 60) ……	50
第 39 図	SD3 出土遺物実測図 (縮尺 1 : 3) ……	51
第 40 図	SD4 ~ 10 断面図 (縮尺 1 : 40) ……	52
第 41 図	掘立 3 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1 : 80、1 : 3) ……	53
第 42 図	掘立 1 測量図 (縮尺 1 : 80) ……	54
第 43 図	掘立 4 測量図 (縮尺 1 : 80) ……	55

第44図	掘立2測量図（縮尺1：80）……………55	第47図	SD1・2断面図（縮尺1：40）……………57
第45図	掘立6測量図・出土遺物実測図 （縮尺1：80、1：3）……………56	第48図	柱穴出土遺物実測図（縮尺1：3）…59
第46図	掘立5測量図（縮尺1：80）……………57	第49図	第V層出土遺物実測図（縮尺1：3）
第5章 樽味高木遺跡16次調査			
第50図	調査地周辺の遺跡分布図 （縮尺1：2,000）……………65	第54図	SK1測量図・出土遺物実測図 （縮尺1：20、1：3）……………68
第51図	遺構配置図（縮尺1：40）……………66	第55図	柱穴測量図（縮尺1：20）……………69
第52図	南壁・西壁土層図（縮尺1：30）…67	第56図	柱穴出土遺物実測図（縮尺1：3）…70
第53図	SD1断面図（縮尺1：20）……………68	第57図	第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1：3）
第6章 樽味高木遺跡17次調査			
第58図	調査地測量図（縮尺1：800）……………73	第64図	SB3測量図・出土遺物実測図 （縮尺1：60、1：3、1：1）……………81
第59図	北壁・東壁土層図（縮尺1：30）…75	第65図	柱穴出土遺物実測図（縮尺1：3）…82
第60図	遺構配置図（縮尺1：100）……………76	第66図	第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1：3）…83
第61図	SB1測量図（縮尺1：60）……………77	第67図	地点不明出土遺物実測図（縮尺1：3）
第62図	SB1出土遺物実測図（縮尺1：4）…78		
第63図	SB2測量図・出土遺物実測図 （縮尺1：60、1：3）……………79		
第7章 三町遺跡			
第68図	調査地位置図（縮尺1：5,000）……………89	第73図	第Ⅳ層出土遺物実測図 （縮尺1：3、1：2）……………94
第69図	調査区位置図（縮尺1：1,000）……………90	第74図	第Ⅴ層出土遺物実測図(1)（縮尺1：4）
第70図	土層図（縮尺1：200、1：40）……………91	第75図	第Ⅴ層出土遺物実測図(2) （縮尺1：3）……………95
第71図	SP1～6・SD1測量図（縮尺1：40）…92		
第72図	SP4・SD1出土遺物実測図（縮尺1：3）…93		

表 目 次

第1章 はじめに	
表1	調査地一覧……………1
第2章 桑原遺跡6次調査	
表2	竪穴建物一覧……………17
表3	溝一覧
表4	柱穴一覧
表5	SB1出土遺物観察表（土製品）……………18
表6	包含層出土遺物観察表（土製品）

第3章 桑原東稻葉遺跡1次調査

表 7	竪穴建物一覽	37	表 14	SB2 出土遺物觀察表 (土製品)	39
表 8	溝一覽		表 15	SB2 出土遺物觀察表 (石製品)	
表 9	土坑一覽		表 16	SD4 出土遺物觀察表 (土製品)	
表 10	柱穴一覽		表 17	SD4 出土遺物觀察表 (石製品)	40
表 11	SB1 出土遺物觀察表 (土製品)	38	表 18	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	
表 12	SK1 出土遺物觀察表 (土製品)	39	表 19	包含層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 13	SK1 出土遺物觀察表 (装身具)		表 20	地点不明出土遺物觀察表 (石製品)	

第4章 桑原東稻葉遺跡2次調査

表 21	竪穴建物一覽	61	表 27	SD3 出土遺物觀察表 (土製品)	62
表 22	掘立柱建物一覽		表 28	掘立出土遺物觀察表 (土製品)	63
表 23	溝一覽		表 29	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	
表 24	SB2 出土遺物觀察表 (土製品)	62	表 30	第V層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 25	SB1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 31	第V層出土遺物觀察表 (金属製品)	
表 26	SB3 出土遺物觀察表 (土製品)				

第5章 樽味高木遺跡16次調査

表 32	溝一覽	71	表 35	SK1 出土遺物觀察表 (土製品)	72
表 33	土坑一覽		表 36	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	
表 34	柱穴一覽		表 37	第Ⅲ層出土遺物觀察表 (土製品)	

第6章 樽味高木遺跡17次調査

表 38	竪穴建物一覽	84	表 44	柱穴出土遺物觀察表 (土製品)	87
表 39	柱穴一覽	85	表 45	柱穴出土遺物觀察表 (石製品)	
表 40	SB1 出土遺物觀察表 (土製品)	86	表 46	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 41	SB2 出土遺物觀察表 (土製品)		表 47	地点不明出土遺物觀察表 (土製品)	88
表 42	SB3 出土遺物觀察表 (土製品)	87	表 48	地点不明出土遺物觀察表 (石製品)	
表 43	SB3 出土遺物觀察表 (装身具)				

第7章 三町遺跡

表 49	柱穴一覽	96	表 53	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (土製品)	97
表 50	溝一覽		表 54	第Ⅳ層出土遺物觀察表 (石製品)	
表 51	SP4 出土遺物觀察表 (土製品)		表 55	第Ⅴ層出土遺物觀察表 (土製品)	
表 52	SD1 出土遺物觀察表 (土製品)		表 56	第Ⅴ層出土遺物觀察表 (石製品)	

写真図版目次

第2章 桑原遺跡6次調査

- 図版 1 1. 調査前全景（西より）
2. 1区遺構検出状況（北東より）
3. 2区遺構検出状況（東より）
- 図版 2 1. 1区遺構完掘状況（南東より）
2. 2区遺構完掘状況（東より）
3. SB1 検出状況（南東より）
- 図版 3 1. SB1 炉遺物出土状況（南東より）
2. SB1 炉完掘状況（北西より）
3. SD1 検出状況（南より）
- 図版 4 1. 出土遺物（SB1：1、第V層：5・6・9・10・13・15）

第3章 桑原東稲葉遺跡1次調査

- 図版 5 1. 調査地全景（西より）
- 図版 6 1. 東半部遺構検出状況（東より）
2. 西半部遺構検出状況（北西より）
3. SB1・2・3完掘状況（北西より）
- 図版 7 1. SB1 完掘状況（東より）
2. SB1 遺物出土状況（南より）
3. SK1 遺物出土状況（南より）
- 図版 8 1. SB2 紡錘車出土状況（東より）
2. SD3 完掘状況（北東より）
3. SD4 完掘状況（北西より）
- 図版 9 1. 出土遺物（SB1：17・18・22～25、SK1：26・27）
- 図版 10 1. 出土遺物（SK1：28～31、SB2：33・35、SD4：36・40・43・46・47）

第4章 桑原東稲葉遺跡2次調査

- 図版 11 1. 調査地全景（西より）
2. 東半部完掘状況（西より）
- 図版 12 1. 西半部完掘状況（西より）
2. SB2 完掘状況（西より）
3. SB1・3・4完掘状況（南東より）
- 図版 13 1. SD3 遺物出土状況（南西より）
2. SD3 完掘状況（南西より）
3. 掘立1・2検出状況（南西より）

- 図版 14 1. 掘立 4 検出状況（北東より）
2. 掘立 5 検出状況（東より）
3. 掘立 3（SP125）検出状況（南より）
- 図版 15 1. 掘立 1（SP40）検出状況（東より）
2. 掘立 5（SP28）検出状況（南東より）
3. 現地説明会風景（東より）
- 図版 16 1. 出土遺物（SB2：67～69、SB1：71・72、SD3：75～77、SP8：81・83、第V層：95～97）

第5章 樽味高木遺跡 16 次調査

- 図版 17 1. 調査前全景（南西より）
2. 遺構検出状況（西より）
3. 東壁土層（西より）
- 図版 18 1. 遺構完掘状況（東より）
2. SK1 完掘状況（北より）
3. SP7 遺物出土状況（北より）
- 図版 19 1. SP7 完掘状況（北より）
2. 出土遺物（SK1：98、SP5：99・102、SP7：100、SP1：101、第Ⅲ層：103・104）

第6章 樽味高木遺跡 17 次調査

- 図版 20 1. 調査地全景（南より）
- 図版 21 1. 遺構検出状況（南より）
2. SB1 検出状況（西より）
3. SB2 検出状況（南東より）
- 図版 22 1. SB3 遺物出土状況（西より）
2. 遺構完掘状況（南西より）
3. 現地説明会風景（南より）
- 図版 23 1. 出土遺物（SB1：105～107・111・112、SB2：115・116・119・122、SB3：125～133、
SP6：136、第Ⅳ層：137・138・140・141、地点不明：145・146）

第7章 三町遺跡

- 図版 24 1. 調査地全景（南より）
2. 1 区掘削状況（南より）
3. SP1・2・3 検出状況（東より）
- 図版 25 1. 調査作業状況（南より）
2. SP1・2・3 検出状況（東より）
3. 1 区完掘状況（南より）
- 図版 26 1. 出土遺物（SP4：147、SD1：148、第Ⅳ層：149～153、第Ⅴ層：154～161）

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

本書は、松山市桑原地区において民間の開発行為に伴い実施した6件の埋蔵文化財調査報告書である。本書の刊行組織である公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団は、平成24年度に公益財団となったが、平成22年度以前は財団法人松山市生涯学習振興財団として発掘調査及び報告書作成を行っている。平成20年度には桑原東稲葉遺跡1次調査と樽味高木遺跡16次調査、三町遺跡の調査を行い、平成21年度には樽味高木遺跡17次調査、平成23年度は桑原東稲葉遺跡2次調査、さらに平成25年度には桑原遺跡6次調査を行った。各調査の場所や期間、面積等は表1に記す。

表1 調査地一覧

調査名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)
桑原遺跡 (6次)	桑原一丁目 796番1、813番1の一部	H25.5.7 ~ H25.6.7	116.15
桑原東稲葉遺跡 (1次)	桑原二丁目 967番1の一部	H20.12.1 ~ H21.1.30	188.00
桑原東稲葉遺跡 (2次)	桑原二丁目 969番、970番1の各一部	H23.4.22 ~ H23.7.4	約 619.00
樽味高木遺跡 (16次)	樽味四丁目 265番1の一部	H21.1.21 ~ H21.1.27	11.60
樽味高木遺跡 (17次)	樽味四丁目 233番1の一部	H22.2.8 ~ H22.3.31	約 45.00
三町遺跡	三町一丁目 412番1の一部	H20.11.25 ~ H20.12.5	約 55.00

第2節 調査・整理刊行組織

(1) 調査組織

[平成20年度]

松山市教育委員会

教育長 土居 貴美
事務局 局長 石丸 修
企画官 仙波 和典
企画官 古鎌 靖
企画官 岸 紀明
文化財課 課長 家久 則雄
主幹 森 正経
主幹 森川 恵克

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村 時広
事務局 局長 吉岡 一雄
埋蔵文化財センター 所長 丹生谷博一
次長 折手 均
次長 重松 佳久
調査担当リーダー 栗田 茂敏
主任 武正 良浩
(調査担当) 調査員 相原 浩二
(写真担当) 調査員 大西 朋子

はじめに

〔平成 21 年度〕

松山市教育委員会

教育長 山内 泰
事務局 局長 藤田 仁
企画官 青木 茂
企画官 古鎌 靖
文化財課 課長 家久 則雄
主幹 森 正経
副主幹 三好 博文

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村 時広
事務局長兼松山市考古館館長 松澤 史夫
埋蔵文化財センター所長兼総務課長 白石 修一
次長 折手 均
次長 重松 佳久
調査担当リーダー 栗田 茂敏
(調査担当) 調査員 宮内 慎一
(写真担当) 調査員 大西 朋子

〔平成 23 年度〕

松山市教育委員会

教育長 山内 泰
事務局 局長 嶋 啓吾
企画官 渡部 満重
企画官 青木 茂
文化財課 課長 駒澤 正経
主幹 森 正経
主査 竹内 明男

財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色 哲昭
事務局 局長 松澤 史夫
次長 近藤 正
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
主査 栗田 茂敏
(調査担当) 主任 水本 完児
(写真担当) 調査員 大西 朋子

〔平成 25 年度〕

松山市教育委員会

教育長 山本 昭弘
事務局 局長 榊田 二郎
企画官 梶川 明彦
企画官 津田 慎吾
文化財課 課長 若江 俊二
主幹 篠原 昭二

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団

理事長 一色 哲昭
(前任、～6/4)
理事長 中山紘治郎
(6/5～)
事務局 局長 中西 真也
次長兼総務部長 中野 忠
施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
埋蔵文化財センター
所長兼考古館館長 田城 武志
調査研究リーダー 山之内志郎
調査研究リーダー 橋本 雄一
(調査担当) 主任 水本 完児
(写真担当) 調査員 大西 朋子

(2) 整理・刊行組織

【刊行組織】

松山市教育委員会
 教育長 山本 昭弘
 事務局 局長 榊田 二郎
 企画官 隅田 完二
 企画官 津田 慎吾
 文化財課 課長 若江 俊二
 主査 楠 寛輝

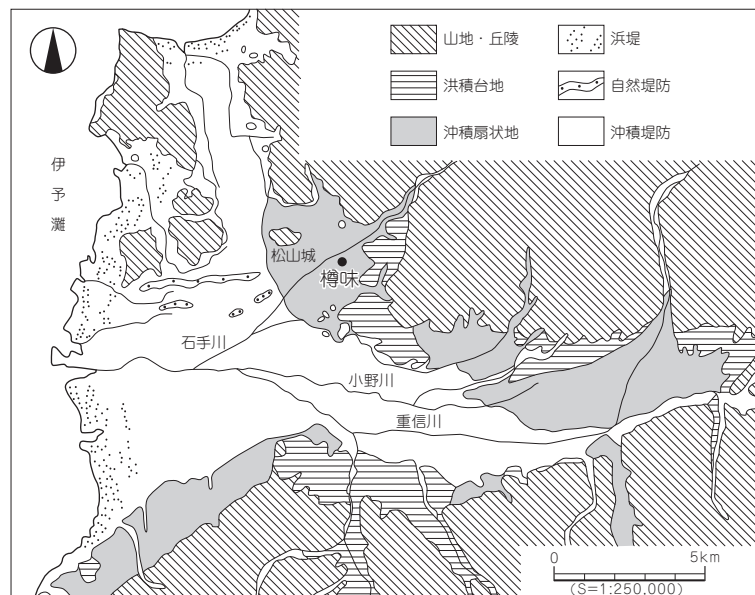
【編集組織】

公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
 理事長 中村紘治郎
 事務局 局長 中西 真也
 次長兼総務部長 紺田 正彦
 施設利用推進部 部長 渡部 広明
 埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
 (編集担当) 主任 宮内 慎一
 (写真担当) 調査員 大西 朋子

第3節 立地と歴史的環境

(1) 遺跡の立地

松山平野は四国山地北西部に位置し、石手川や重信川などの大小河川で形成された複合扇状地堆積物と沖積低地や浜堤などで形成されている。このうち、石手川は高縄山地を水源とし、平野北東部を西進しながら、途中に重信川と合流する。石手川が形成した扇状地は、半径4kmに及ぶ。石手川扇状地は、古期扇状地面と新时期扇状地面、さらには洪積世の段丘化した低位段丘面とに区分される。なお、新时期扇状地面は、今から約23,000年前、始良 Tn 火山灰の降下、堆積時には既に段丘化していたものと推測されている。なお、発掘調査において樽味遺跡や樽味四反地遺跡からも2次的な堆積状況の火山灰が検出されている(第1図)。



第1図 松山平野の地形概要図

(2) 歴史的環境

本書掲載の遺跡が所在する松山市桑原地区では、数多くの遺跡が存在している。古代、桑原地区は「和名抄」による温泉郡五郷のうちの桑原郷で、中世後期には河野氏の一門である桑原氏や松末氏、垂水市などが城館を構えていた地域として知られている。ここでは、主な遺跡について、概要を説明する(第2図)。

旧石器時代

松山平野においては、明確な遺構は確認されていない。遺物は、樽味四反地遺跡6次調査からはナイフ形石器、桑原西稲葉遺跡2次調査からは角錐状石器が出土している。なお、樽味遺跡1次調査や樽味四反地遺跡1次調査からは始良 Tn 火山灰の2次堆積が確認されている。

縄文時代

樽味立添遺跡3次調査や東野森ノ木遺跡2・4次調査では、晩期の貯蔵穴が検出され、樽味四反地遺跡6次調査からは晩期の土器片が出土している。

弥生時代

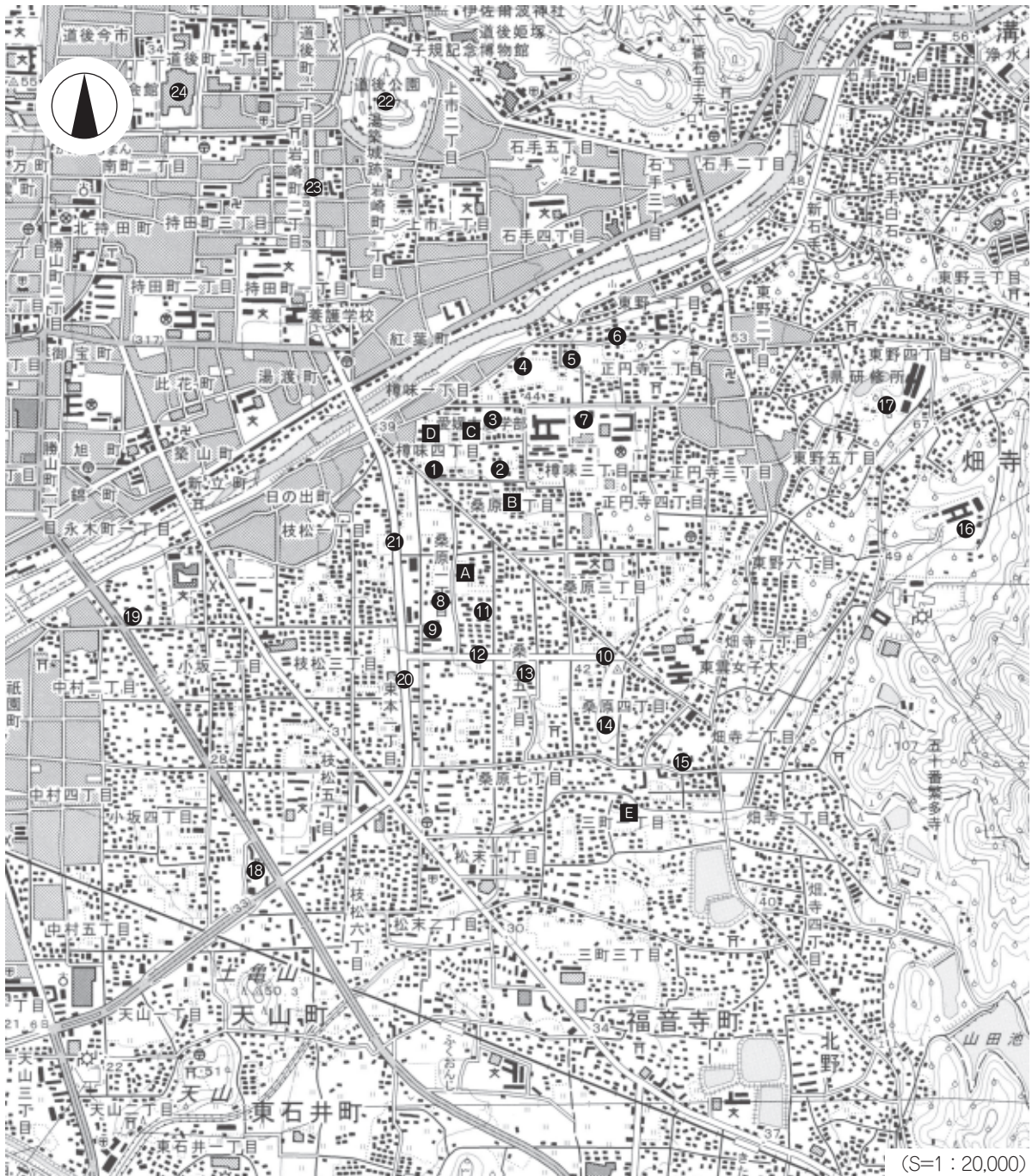
前期では、樽味遺跡5次調査において竪穴建物が検出されている。また、樽味立添遺跡3次調査や樽味四反地遺跡7次調査からは、集落構造解明に重要な役割をもつと考えられる大溝が発見されている。中期では東野森ノ木遺跡4次調査において、前半期の土器棺墓が検出されている。中期後半から後期初頭では、樽味高木遺跡2次調査や樽味四反地遺跡5次調査にて小形の竪穴建物が検出されている。また、樽味高木遺跡12次調査では円形竪穴建物が検出され、建物内からは磨製石鏃が出土しており、北部九州からの製作技術の伝播を考えるうえで貴重な資料である。後期になると遺構・遺物共に検出例が増加する。樽味立添遺跡や樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡などのほか、桑原稲葉遺跡や桑原高井遺跡からは多数の竪穴建物が検出されている。なお、樽味立添遺跡からは中国銭の『貨泉』が出土しているほか、樽味高木遺跡3次調査からは船を描いた絵画土器が出土しており、これらは他地域との交流が知れる貴重な考古資料である。

古墳時代

古墳時代初頭では、樽味四反地遺跡6・8・13次調査より計3棟の超大型建物が検出されており、首長階層にかかわる特殊建造物と考えられている。このほか、樽味四反地遺跡18次調査では方形竪穴建物と掘立柱建物が検出されている。

中期になると、遺構・遺物の検出事例が飛躍的に増大する。樽味高木遺跡や樽味四反地遺跡では数多くの竪穴建物が検出されている。特に、樽味高木遺跡13次調査検出の竪穴建物からはガラス玉をはじめ、白玉や有孔円板などが出土し、これらは建物廃絶に伴う祭祀行為の一様相と考えられている。また、樽味四反地遺跡7次調査検出の竪穴建物からは朝鮮系軟質土器や算盤玉型紡錘車などが出土しており、渡来人との関わりを示す建物として注目されている。後期では樽味四反地遺跡16次調査にて大型の竪穴建物や掘立柱建物が検出されているほか、数多くの遺構や遺物が確認されている。このほか、桑原遺跡5次調査では6世紀代の溝から、斎串や木錘が出土している。なお、桑原遺跡4次調査検出の溝からは弥生時代中期から古墳時代中期までの遺物が大量に出土している。

また、古墳では中期末から後期と推定される経石山古墳と、後期初頭の三島神社古墳など、松山市内では十数基しか確認されていない前方後円墳が築かれている。



- | | | |
|---|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> A 桑原遺跡 (6次) D 樽味高木遺跡 (17次) ① 樽味四反地遺跡 (6・8・13次) ④ 樽味立添遺跡 (1次) ⑦ 樽味遺跡 (1・5次) ⑩ 桑原遺跡 (2次) ⑬ 桑原遺跡 (5次) ⑯ 畑寺竹ヶ谷古墳 ⑲ 中村松田遺跡 ⑳ 湯築城跡 | <ul style="list-style-type: none"> B 桑原東稲葉遺跡 (1・2次) E 三町遺跡 ② 樽味四反地遺跡 (1次) ⑤ 樽味立添遺跡 (3次) ⑧ 桑原高井遺跡 ⑪ 桑原遺跡 (3次) ⑭ 経石山古墳 ⑰ 東野お茶屋台遺跡 ㉑ 末本遺跡 ㉒ 岩崎遺跡 | <ul style="list-style-type: none"> C 樽味高木遺跡 (16次) ③ 樽味高木遺跡 (3次) ⑥ 東野森ノ木遺跡 (1～4次) ⑨ 桑原稲葉遺跡 ⑫ 桑原遺跡 (4次) ⑮ 三島神社古墳 ⑱ 釜ノ口遺跡 (8次) ㉒ 枝松遺跡 (4次) ㉔ 道後今市遺跡 |
|---|---|--|

第2図 石手川中流域の主要遺跡分布図

古 代

古代の遺構・遺物は、検出事例が少ない。樽味四反地遺跡1・5次調査からは平安時代の自然流路が検出されており、5次調査では複数の円面硯や奈良三彩が出土している。また、樽味四反地遺跡17次調査からは、飛鳥時代中頃の掘立柱建物が発見されている。

中 世

樽味高木遺跡12次調査では、13世紀代の土坑墓が検出されている。また、桑原遺跡2次調査からは13世紀前半頃の区画性の高い溝が検出されている。樽味遺跡2次調査では14～16世紀代の集落関連遺構が多数発見されている。このほか、東野森ノ木遺跡1次調査からは、土坑内から白磁四耳壺が埋納状態で検出されている。

近 世

樽味高木遺跡2次調査では、礫混じりの土をマウンド状に積み上げた塚2基が検出されており、五輪塔の一部と共に、埋葬に伴って実施されたと考えられる土師器皿や銭貨を用いた祭祀の痕跡を確認している。

【参考文献】

- 小玉亜紀子 2003 『樽味四反地遺跡－6次調査－』松山市文化財調査報告書 第94集
- 梅木 謙一 1992 「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」「桑原西稲葉遺跡2次調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書 第26集
- 宮本 一夫 1989 「樽味遺跡」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室 I
- 高尾 和長 2007 「樽味立添遺跡3次調査」「樽味四反地遺跡7・8・9・11次調査」「樽味高木遺跡7・8・9・11次調査」「東野森ノ木遺跡1・2・3・4次調査」『市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市文化財調査報告書 第117集
- 田崎 博之 2003 「樽味遺跡5次調査」『樽味遺跡Ⅳ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
- 梅木 謙一 1994 「樽味高木遺跡2・3次調査」「樽味四反地遺跡2・3・4次調査」『桑原地区の遺跡Ⅱ』松山市文化財調査報告書 第46集
- 田崎 博之 1993 「樽味遺跡2次調査」『樽味遺跡Ⅱ』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ
- 高尾 和長 1998 『樽味四反地遺跡－5次調査－』松山市文化財調査報告書 第87集
- 宮内 慎一 2009 『樽味高木遺跡－12次・13次調査－』松山市文化財調査報告書 第131集
- 岡田 敏彦 1990 「桑原稲葉遺跡」『桑原住宅埋蔵文化財調査報告書』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 橋本 雄一 2005 『樽味四反地遺跡Ⅱ－6次調査－』松山市文化財調査報告書 第106集
- 宮内 慎一 2009 『樽味四反地遺跡－12次・13次調査－』松山市文化財調査報告書 第130集
- 橋本 雄一 2010 『樽味四反地遺跡－17次・18次調査－』松山市文化財調査報告書 第139集
- 宮内 慎一 2009 『樽味四反地遺跡－14次・16次調査－』松山市文化財調査報告書 第133集
- 吉岡 和哉 2004 『桑原遺跡5次調査地』松山市文化財調査報告書 第99集
- 相原 浩二 2005 「桑原遺跡2次調査」「桑原遺跡4次調査」『松山市道中村桑原線関連遺跡』松山市文化財調査報告書 第105集
- 森 光晴 1980 「経石山古墳」「三島神社古墳」『愛媛県史 資料編考古』松山市教育委員会

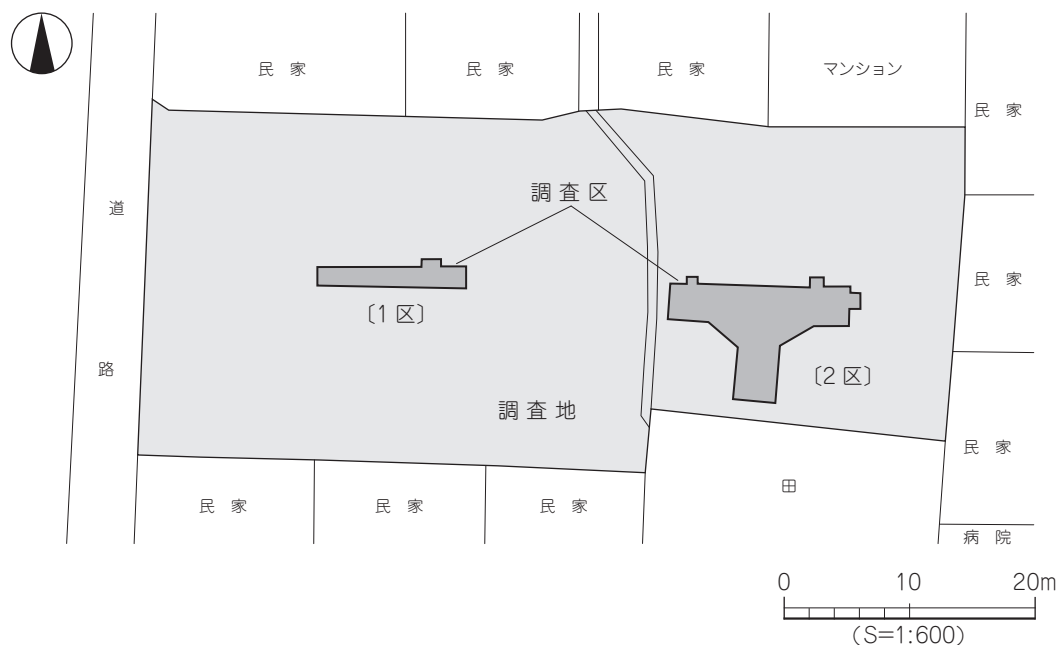
第2章 桑原遺跡6次調査

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2012（平成24）年7月5日、三好信子氏（以下、申請者という。）より松山市桑原一丁目796番1、813番1地内における住宅建築に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地は、埋蔵文化財包蔵地の『No.82 桑原・束本遺跡群』内に位置する。周辺では申請地南方に桑原遺跡3・4次調査地、南西部には桑原高井遺跡1・3次調査地や桑原稲葉遺跡、束本遺跡6次調査地があり、弥生時代から中世までの遺構・遺物が確認されている（第4図）。これらのことから、2012（平成24）年7月23日と24日の2日間、公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果、竪穴建物や溝、柱穴のほか弥生土器や土師器、須恵器等を検出した。この結果を受け、申請者と文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発により遺跡が破壊される箇所のみを対象とする発掘調査を実施することになった。その後、2013（平成25）年4月1日、センコーホーム松山株式会社（代表取締役 新野 頼正）より同申請地内における宅地造成に伴う埋蔵文化財確認申込書が文化財課に提出された。そこで、同社と埋文センターとの間で委託契約が結ばれ、発掘調査を行うことになった。

発掘調査は申請地内における弥生時代以降の集落様相解明を主目的とし、文化財課の協力のもと、埋文センターが主体となり2013（平成25）年5月7日より開始した。



第3図 調査地測量図



- | | | |
|----------------|----------------|-------------|
| ① 桑原西稲葉遺跡 (1次) | ② 桑原西稲葉遺跡 (2次) | ③ 桑原遺跡 (3次) |
| ④ 桑原遺跡 (4次) | ⑤ 桑原遺跡 (5次) | ⑥ 束本遺跡 (6次) |
| ⑦ 桑原稲葉遺跡 | ⑧ 桑原高井遺跡 | |

第4図 調査地周辺の遺跡分布図

2. 調査組織

所在地：松山市桑原一丁目796番1、813番1の各一部

調査期間：2013（平成25）年5月7日～同年6月7日

調査面積：116.15㎡

契約者：センコーホーム松山株式会社 代表取締役 新野 頼正

調査主体：公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター主任 水本 完児

第2節 層 位

調査地は松山平野南東部、石手川左岸の微高地上の標高39.0～39.6mに立地する。調査地は、調査以前には雑種地であった。調査地の基本層位は、以下の9層である（第5図）。なお、調査の都合上、調査地西側を1区、東側を2区として調査を進めた（第3図）。

第Ⅰ層：造成土で1区全域と2区南西部を除く地域にみられ、層厚10～46cmである。

第Ⅱ層：農耕に伴う耕作土。灰白色土（10Y 8/1）で1区全域と2区東半部にみられ、層厚は3～30cmである。

第Ⅲ層：農耕に伴う床土。黄色土（2.5Y 8/6）で1区全域と2区東半部にみられ、層厚は2～16cmである。

第Ⅳ層：明褐色土（7.5YR 7/1）に黄色土（2.5Y 8/6）がブロック状に混入するもので、1区北西部と2区東半部にみられ、層厚は2～15cmである。

第Ⅴ層：黒褐色土（7.5YR 3/1）で1区全域と2区西半部にみられ、層厚は2～32cmである。本層中からは、弥生土器や土師器の破片が少量出土した。なお、調査壁の土層観察により、本層中にて1区では竪穴建物、2区からは溝や柱穴を確認した。

第Ⅵ層：にぶい黄橙色土（10YR 4/6）に浅黄色土（5Y 7/4）と黒褐色土（7.5YR 3/1）がブロック状に混入するもので、1区東半部と2区西半部にみられ、層厚は2～17cmである。

第Ⅶ層：微弱な土質の違いにより、3層に分層される。

第Ⅶ①層－浅黄色土（5Y 7/3）で1区東半部と2区全域にみられ、層厚は5～22cmである。本層中にて、2区からは溝や柱穴を検出した。

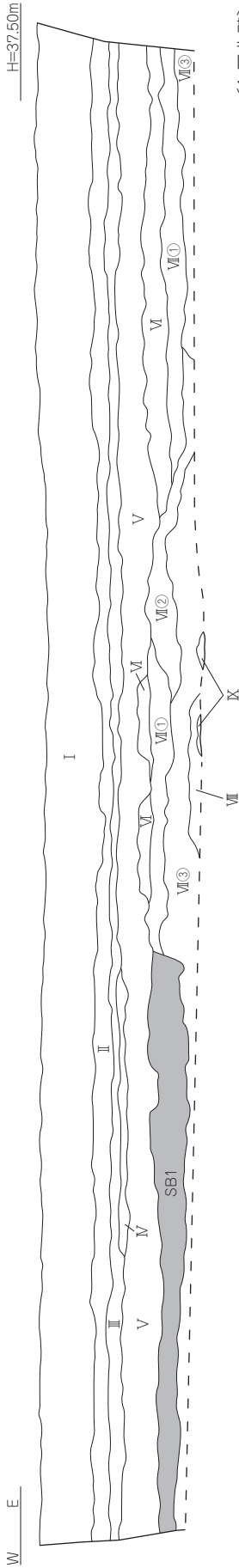
第Ⅶ②層－浅黄色土（5Y 7/3）に少量の砂が混入するもので1区にみられ、層厚5～23cmである。

第Ⅶ③層－浅黄色土（5Y 7/4）で1区東半部にみられ、層厚は3～25cmである。

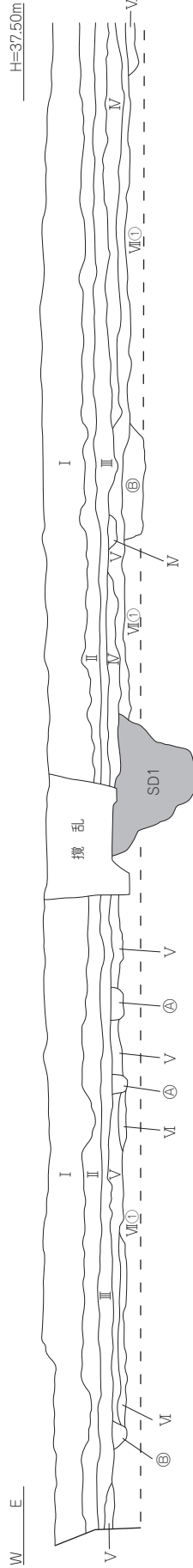
第Ⅷ層：にぶい褐色砂（7.5YR 6/3）で1区中央部にみられ、層厚は10～25cmである。

第Ⅸ層：黄色（5Y 7/8）をなす土壌で、1区中央部にみられる。本層は色調や土質より、調査地周辺で散見されるAT火山灰と考えられるものである。

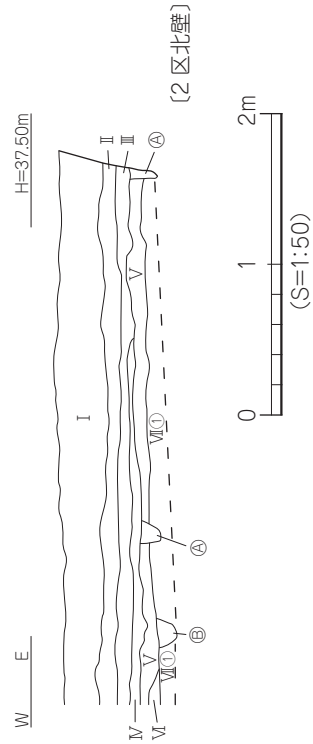
検出遺構や出土遺物より、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代、第Ⅲ層は中世までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C、西から東へ1・2・3・・・9とし、A1・A2・B1・・・C9といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



(1区北壁)

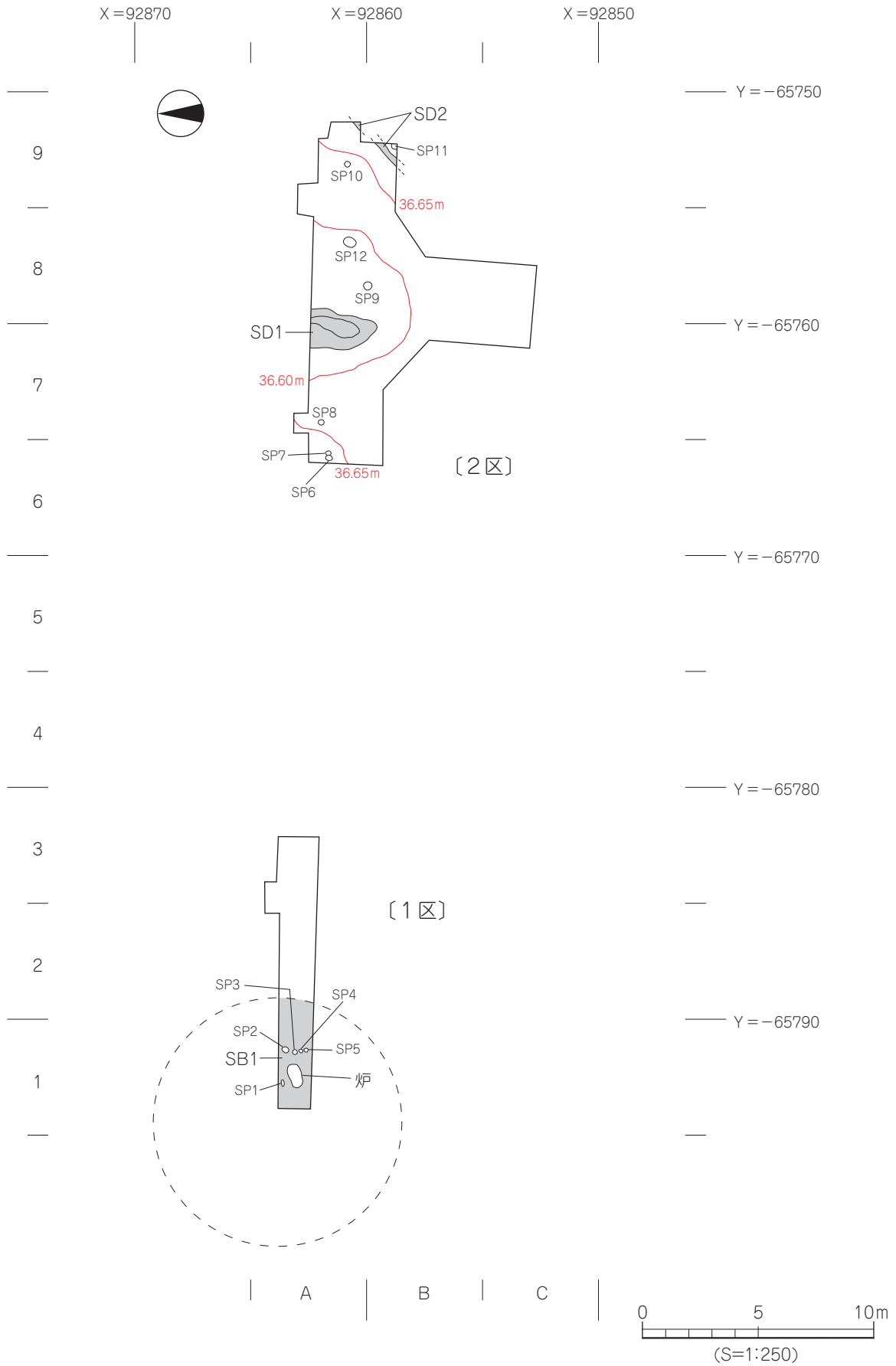


- I 造成土
- II 灰白色土 (10Y 8/1)
- III 黄色土 (2.5Y 8/6)
- IV 明褐色土 (7.5YR 7/1) に黄色土 (2.5Y 8/6) がブロック状に混入
- V 黒褐色土 (7.5YR 3/1)
- VI にふい黄褐色土 (10YR 4/6) に浅黄色土 (5Y 7/4) と黒褐色土 (7.5YR 3/1) がブロック状に混入
- VI① 浅黄色土 (5Y 7/3)
- VI② 浅黄色土 (5Y 7/3) (砂混入)
- VI③ 浅黄色土 (5Y 7/4)
- VII にふい褐色砂 (7.5YR 6/3)
- IX 黄色土 (5Y 7/8) : AT火山灰
- Ⓐ 黒褐色土 (7.5YR 3/1)
- Ⓑ 黒褐色土 (7.5YR 3/2)



第5図 1区・2区北壁土層図

層位



第6図 遺構配置図

第 3 節 遺構と遺物

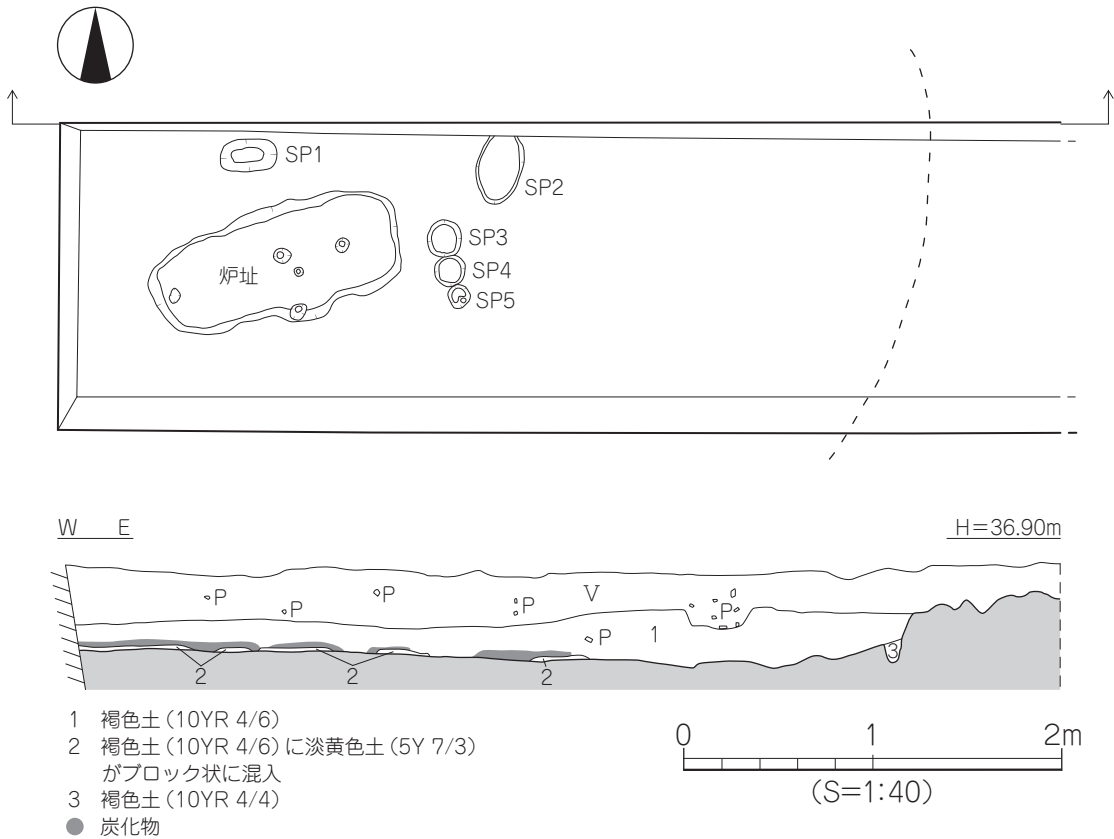
調査では竪穴建物 1 棟、溝 2 条、柱穴 12 基を検出した（第 6 図、図版 1・2）。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。ここでは、時代別に遺構や遺物の説明を行う。

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物 1 棟を検出した。

S B 1（第 7・8 図、図版 2・3）

1 区西側 A1・2 区に位置する建物址で、調査壁の土層観察により第 V 層中より掘削された遺構である。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は東西検出長 4.40 m、南北検出長 1.60 m、壁高は 30cm である。建物の埋土は褐色土 (10YR 4/6) を基調とし、床面付近には厚さ 2～5cm 程度の淡黄色土 (5Y 7/3) が部分的にみられた。検出状況から、床面修復のための貼床が施されたものと推測される。内部施設は、周壁溝や炉址と柱穴 5 基を検出した。周壁溝は調査区北壁と南壁で確認され、規模は幅 10cm、深さ 12cm である。炉址は、建物中央部付近の貼床土上面にて検出された。平面形態は楕円形をなし、規模は長径 1.35 m、短径 0.65 m、深さ 10cm である。埋土は 3 種類あり、1 層明褐色土 (7.5YR 5/6) に少量の炭化物が混入、2 層暗赤褐色土 (2.5YR 3/3) に橙色土 (2.5YR 6/6) がブロック状に混入、3 層黒褐色土 (7.5YR 3/1) である。このほか、建物床面にて 5 基の柱穴 (SP1～5) を検出した。規



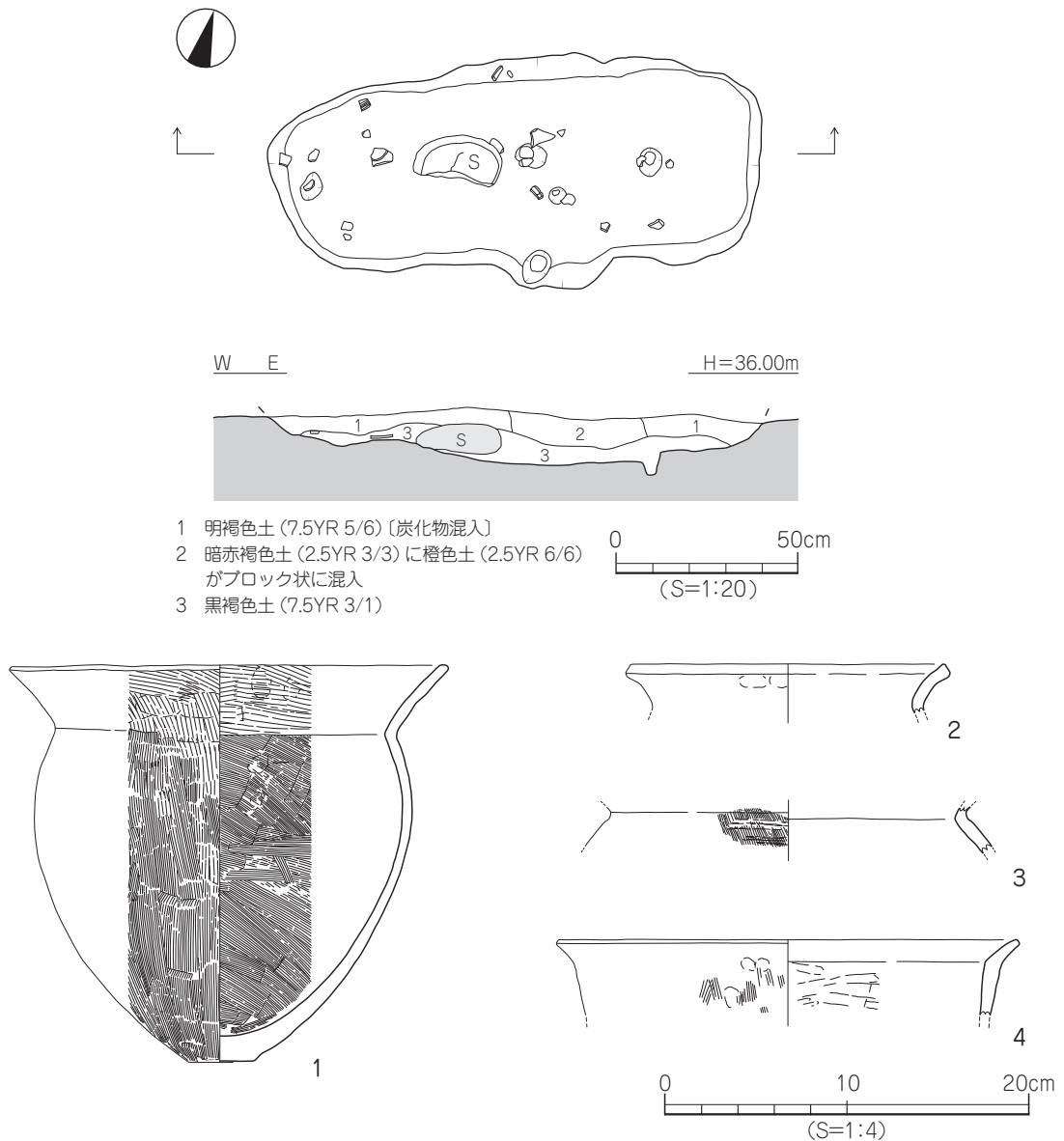
第 7 図 S B 1 測量図

模は径12～30cmで、柱穴掘り方埋土は暗褐色土(7.5YR 3/3)である。遺物は建物埋土中より弥生土器片が少量出土したほか、炉址内からは復元すると完形品となった甕形土器のほか、鉢形土器や径20cm大の川原石が出土した。

出土遺物(第8図、図版4)

1～4は炉址出土品。1～3は甕形土器。1は復元完形品で、口径23.8cm、底径3.7cm、器高21.8cmである。口縁部は「く」の字状をなし、底部はわずかに上げ底をなす。内外面にはハケメ調整を施す。色調は橙褐色で、胎土中には石英・長石のほか金ウンモを含む。2は口縁部の小片で、口縁端部は「コ」字状である。3は頸部片で内外面には明瞭な稜をもち、外面には細かなハケメ調整を施す。4は鉢形土器で、口縁部は短く外反し、頸部内面には明瞭な稜をもつ。体部外面にはハケメ調整、内面にはヨコ方向のヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、SB1の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半と考えられる。



第8図 SB1内炉址測量図・出土遺物実測図

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝 1 条を検出した。

SD 1 (第 9 図、図版 3)

2 区北側中央部 A7 ~ B8 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は調査区外に続く。調査壁の土層観察により、溝上面は第 IV 層が覆う。規模は南北検出長 2.84 m、幅 1.45 m、深さは最深部で 75cm である。断面形態は「U」字状をなし、埋土は黒褐色土 (10YR 2/2) を基調とし、下層には浅黄色土 (5Y 7/4) がブロック状に堆積する。溝基底面は、北から南に向けて傾斜をなす。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第 IV 層が溝を覆うことから、概ね古墳時代以前の溝とする。

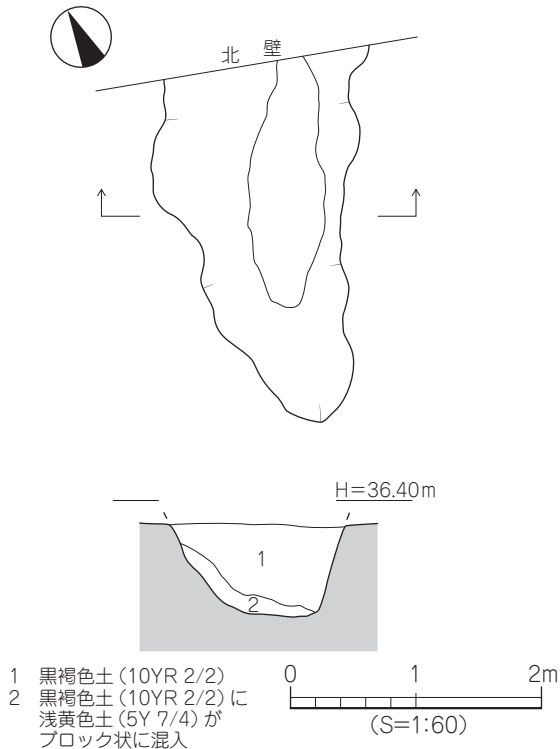
3. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、溝 1 条を検出した。

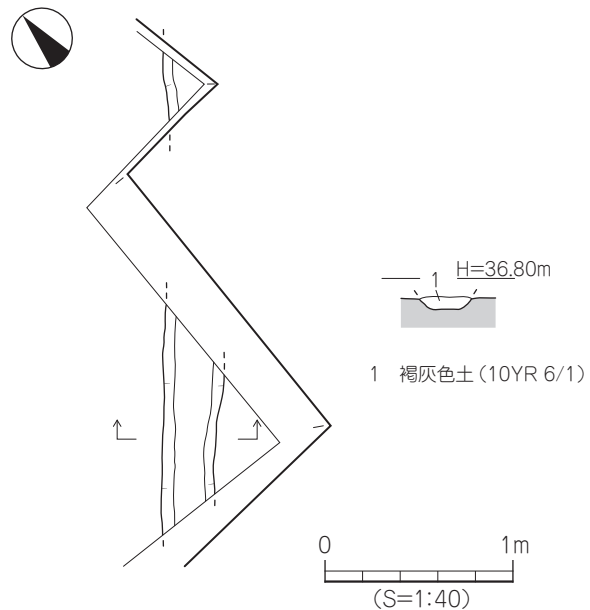
SD 2 (第 10 図)

1 区中央部東寄り A・B9 区で検出した北東 - 南西方向の溝で、溝上面は第 III 層が覆う。規模は検出長 1.22 m、幅 28cm、深さ 7cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は褐灰色土 (10YR 6/1) 単層である。溝基底面は、北東から南西に向けて緩やかな傾斜をなす。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第 III 層が覆うことから、概ね中世以前の溝とする。



第 9 図 SD 1 測量図



第 10 図 SD 2 測量図

4. その他の遺構と遺物

調査では、12基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘削時や重機による表土掘削時に遺物が出土した。このうち、重機による掘削では出土地点や層位が不明のため、ここでは地点不明遺物として掲載している。

(1) 柱 穴

調査で検出した柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の3種類となる。このうち、SP1～5はSB1床面にて検出した柱穴である。

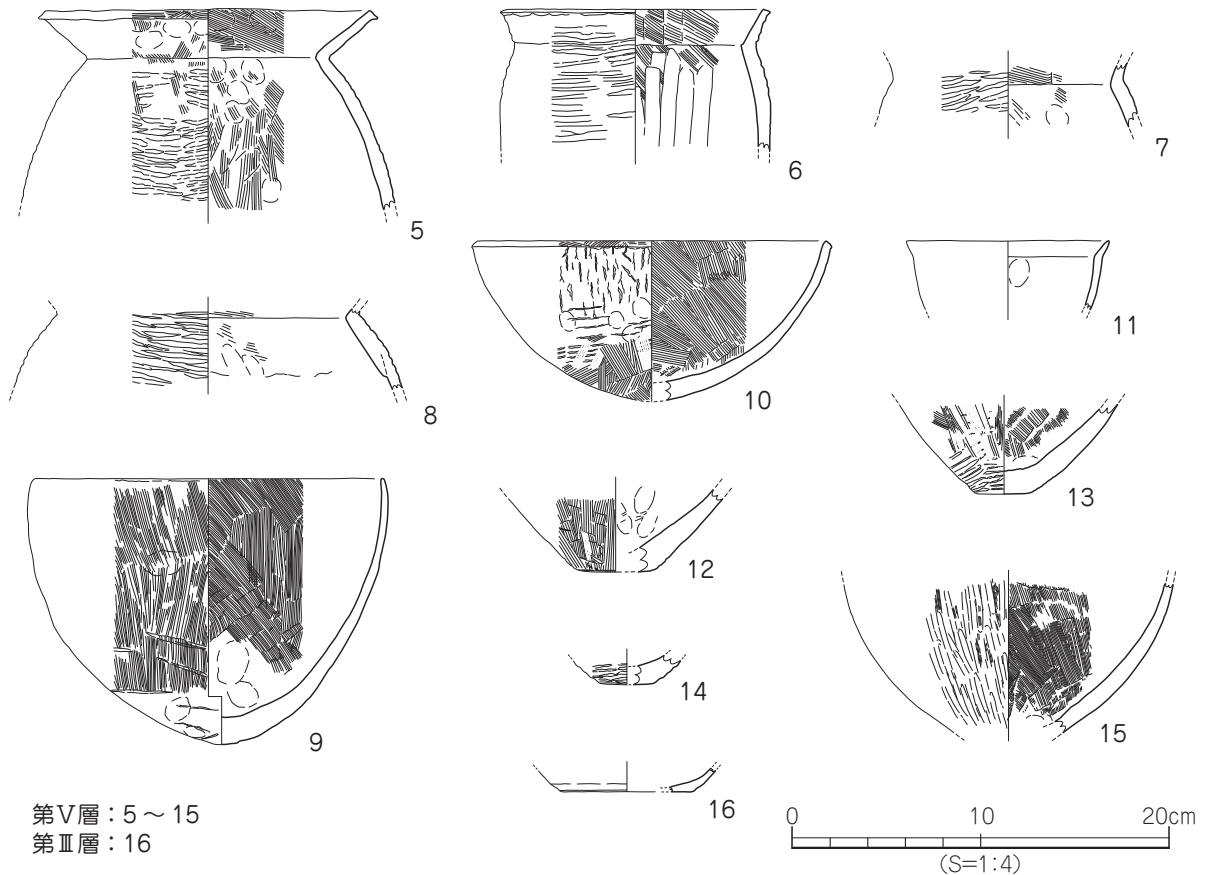
A類-暗褐色土 (7.5YR 3/3) : 6基 [SP1～6]

B類-褐灰色土 (10YR 6/1) : 5基 [SP7・8・10～12]

C類-灰黄褐色土 (10YR 4/2) : 1基 [SP9]

(2) 包含層・地点不明出土遺物 (第11図、図版4)

5～15は第V層、16は第Ⅲ層出土品。5～8は弥生土器の甕形土器。5・6の口縁部は「く」の字状をなし、5の胴部外面にはタタキ調整を施す。5の色調は褐色で、胎土中には赤色酸化土粒を少量含む。6は推定口径13.4cmの小型品で、外面にはタタキ調整、内面はハケメ調整を施す。なお、胴部



第11図 包含層出土遺物実測図

内面にはハケメ調整後、板状工具によるナデを施す。7・8は頸部片で、両者共に外面にはタタキ調整、内面はハケメ調整がみられる。9～11は弥生土器の鉢形土器。9は推定口径18.4cmで、口縁部は内湾し、口縁端部は尖る。底部は、小さな平底である。色調は茶褐色で、外面にはタタキ調整後、ハケメ調整を加える。10は推定口径18.4cmで、口縁端部は外傾する面をもち、体部下半部外面にはタタキ調整、内面はハケメ調整を施す。色調は浅黄色で、胎土中には1～3mm大の長石を少量含む。1/2の残存。11は推定口径8.6cmの小型品で、口縁部は外反し、口縁端部は先細りする。色調は褐色である。12は壺形土器、13・14は甕形土器の底部。12の外面にはハケメ調整がみられ、色調は暗褐色である。13は底径3.0cmの底部で、外面にはタタキ調整後、ハケメ調整を加える。なお、外面には少量の煤が付着する。14は2/3の残存で、外面にはタタキ痕が残る。15は鉢形土器の体部片で、外面にはタテ方向のヘラミガキ調整を施す。色調は灰褐色で、胎土中には少量の金ウンモを含む。16は土師器皿で、推定底径6.8cmである。色調は褐色で、1/6の残存である。5～15は弥生時代末、16は中世段階の土器である。

第4節 小 結

桑原遺跡6次調査は、弥生時代以降の集落範囲や構造解明を主目的として実施した。調査の結果、弥生時代や中世の遺構・遺物を確認した。

弥生時代では、後期後半に時期比定される竪穴建物の一部を検出した。SB1は直径6m以上の円形建物で、炉址や周壁溝を検出した。なお、建物内には床面を修復する為の貼床が施されており、炉址内からは復元すると完形品となる甕形土器が出土した。

このほか、調査では2条の溝を検出した。SD1は断面「U」字状をなす深さ75cmの溝で、溝内からは遺物は出土していないが、古墳時代の堆積層である第IV層が溝上面を覆うことから、古墳時代以前の遺構と考えられる。また、SD2は一部のみの検出であるが、中世段階の堆積層である第III層が覆うことから、概ね中世以前の溝と判断される。

調査地周辺では弥生時代後期の竪穴建物が数多く検出されており、今回検出したSB1は、これらの調査成果を追従するものであり、該期には調査地や周辺地域において継続的な集落経営がなされていたものと推測される。また、古墳時代や中世の溝の検出は、該期における集落の存在を示唆する資料といえよう。今後、桑原地区における弥生時代から中世までの集落様相を解明するうえで、今回の調査成果は貴重なものといえる。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () : 検出値を示す。
 埋土欄 複数の土層がある場合→「褐色土 他」と記載。
 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
 例) 弥生→弥生土器、石→石器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値を示す。
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 口→口縁部、体→体部、胴→胴部、底→底部
 胎土欄 胎土欄には混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 () の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好

表2 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×壁高 (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	1	A 1・2	(円形)	(4.40) × (1.60) × 0.30	褐色土 他	炉・貼床	弥生・石・炭	弥生後期後半	

表3 溝一覧

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	2	A 7~B 8	「U」字状	(2.84) × 1.45 × 0.75	黒褐色土		古墳以前	
2	2	A・B 9	皿状	(1.22) × 0.28 × 0.07	褐灰色土		中世以前	

表4 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	1	A 1	楕円形	0.30 × 0.18 × 0.12	暗褐色土	弥生	SB1 内
2	1	A 1	楕円形	(0.36) × 0.24 × 0.06	暗褐色土	弥生	SB1 内
3	1	A 1	円形	0.20 × 0.18 × 0.05	暗褐色土		SB1 内
4	1	A 1	円形	0.16 × 0.16 × 0.06	暗褐色土		SB1 内
5	1	A 1	円形	0.12 × 0.12 × 0.06	暗褐色土		SB1 内、柱痕
6	2	A 6	円形	0.26 × 0.26 × 0.18	暗褐色土	石	
7	2	A 6	円形	0.20 × (0.16) × 0.16	褐灰色土		
8	2	A 7	円形	0.25 × 0.24 × 0.25	褐灰色土		

桑原遺跡6次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	区	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
9	2	A・B 8	楕円形	0.47 × 0.41 × 0.14	灰黄褐色土		柱痕
10	2	A 9	楕円形	0.36 × 0.30 × 0.08	褐灰色土		
11	2	B 9	円形	0.26 × 0.22 × 0.06	褐灰色土		
12	2	A 8	楕円形	0.52 × 0.43 × 0.07	褐灰色土		

表5 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径 23.8 底径 3.7 器高 21.8	復元完形品。「く」の字状口縁。底部はわずかに上げ底。	ハケ (4本/cm) →ナデ	ハケ (4本/cm)	橙褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	黒斑	4
2	甕	口径 (17.0) 残高 2.6	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	灰褐色 褐色	石・長 (1~5) 赤色酸化土粒 ◎		
3	甕	残高 2.5	頸部片。内外面に、明瞭な稜あり。小片。	ハケ (8本/cm) →タタキ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		
4	鉢	口径 (25.0) 残高 4.7	外反口縁。頸部内面に稜あり。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ・ハケ	㊶ヨコナデ ㊷ミガキ	暗褐色 黄褐色	石・長 (1~2) ◎		

表6 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
5	甕	口径 (17.1) 残高 10.5	「く」の字状口縁。口縁端部は外傾する面をもつ。	㊶ハケ・ナデ ㊷タタキ→ハケ	㊶ハケ9~10本/cm ㊷ハケ(10本/cm) →ナデ	茶褐色 褐色	石・長 (1~2) 赤色酸化土粒 ◎	第V層 黒斑	4
6	甕	口径 (13.4) 残高 7.5	「く」の字状口縁。口縁端部は外傾する面をもつ。頸部内面に明瞭な稜あり。1/4の残存。	㊶タタキ ㊷タタキ→ナデ	㊶ハケ(10本/cm) ㊷ハケ(10本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) ◎	第V層	4
7	甕	残高 3.4	小片。頸部内面に明瞭な稜あり。	タタキ	㊶ハケ (6本/cm) ㊷ハケ	赤褐色 灰褐色	石・長 (1~2) 赤色酸化土粒 ◎	第V層	
8	甕	残高 4.3	小片。頸部内面に明瞭な稜あり。	タタキ	ハケ (6本/cm)	褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 ◎	第V層	
9	鉢	口径 (18.4) 底径 3.6 器高 14.0	直口口縁。口縁端部は尖り、やや波状をなす。小さな平底。	タタキ→ ハケ (10本/cm)	㊶ハケ(16本/cm) ㊷ナデ	茶褐色 褐色	石・長 (1~3) 金 赤色酸化土粒 ◎	第V層 黒斑	4
10	鉢	口径 (18.4) 残高 8.4	直口口縁。口縁端部は外傾する面をもつ。底部欠損。	㊶タタキ ㊷タタキ→ハケ	ハケ(7~8本/cm) →ナデ	にぶい黄橙色 浅黄色	長 (1~3) ◎	第V層 黒斑	4
11	鉢	口径 (8.6) 残高 3.6	小型品。外反口縁。口縁端部は先細り。小片。	マメツ	マメツ	褐色 灰褐色	密 ◎	第V層 黒斑	
12	壺	底径 (4.1) 残高 4.3	平底。1/4の残存。	ハケ (10本/cm)	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長 (1~5) 赤色酸化土粒 ◎	第V層	
13	甕	底径 3.0 残高 4.7	平底。底部完形品。	タタキ→ ハケ (8本/cm)	ハケ (12本/cm)	褐灰色 褐灰色	石・長 (1~4) ◎	第V層 煤附着	4
14	甕	底径 (2.9) 残高 1.6	小さな平底。2/3の残存。	タタキ	マメツ	褐灰色 褐灰色	石・長 (1) 金 ◎	第V層	
15	鉢	残高 7.9	1/6の残存。	ハケ→ミガキ	ハケ (8本/cm)	灰褐色 黒褐色	石・長 (1~2) 金 ◎	第V層 黒斑	4
16	皿	底径 (6.8) 残高 1.2	体部は内湾し、底部は平底。1/6の残存。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎	第III層	

第3章 桑原東稲葉遺跡1次調査

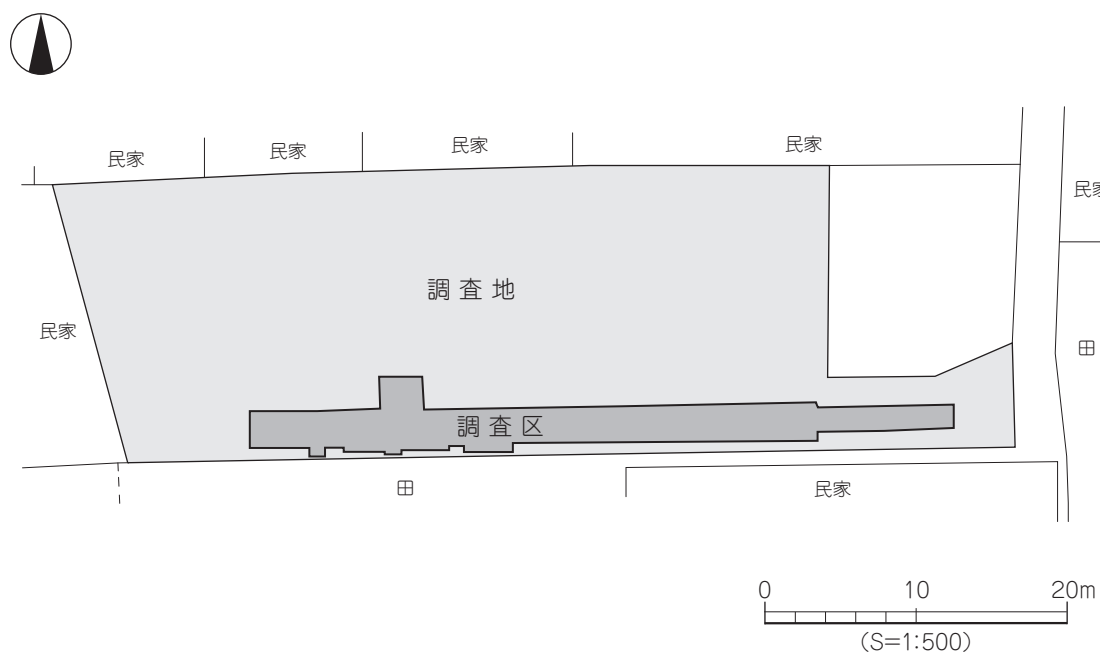
第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2008（平成20）年5月8日、高木健吾氏（以下、申請者という。）より松山市桑原二丁目967番における分譲宅地の造成工事に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地は、埋蔵文化財包蔵地の『No.81 樽味遺物包含地』の南東端に位置する。2008（平成20）年5月21日、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果、竪穴建物や溝、柱穴のほか弥生土器や土師器、須恵器等を検出した。

この結果を受け、申請者と文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、造成工事のうち進入道路部分のみを対象とする発掘調査を実施することになり、それ以外の箇所については、工事立会にて対応することになった。なお、協議の段階で、契約者はセンコーホーム松山株式会社（代表取締役新野 頼正）となり、埋文センターと同社との間で委託契約が結ばれ、発掘調査を行うことになった。

発掘調査は申請地内における弥生時代以降の集落様相解明を主目的とし、文化財課の協力のもと、埋文センターが主体となり2008（平成20）年12月1日より開始した。



第12図 調査地測量図



- | | | |
|-----------------|-----------------|--------------------|
| ① 桑原東稲葉遺跡 (2次) | ② 桑原西稲葉遺跡 (1次) | ③ 桑原西稲葉遺跡 (2次) |
| ④ 樽味遺跡 (3次) | ⑤ 樽味四反地遺跡 (1次) | ⑥ 樽味四反地遺跡 (2・3・4次) |
| ⑦ 樽味四反地遺跡 (5次) | ⑧ 樽味四反地遺跡 (7次) | ⑨ 樽味四反地遺跡 (8次) |
| ⑩ 樽味四反地遺跡 (10次) | ⑪ 樽味四反地遺跡 (14次) | ⑫ 樽味四反地遺跡 (16次) |
| ⑬ 樽味四反地遺跡 (17次) | ⑭ 樽味四反地遺跡 (18次) | ⑮ 樽味四反地遺跡 (19・20次) |
| ⑯ 樽味高木遺跡 (1次) | ⑰ 樽味高木遺跡 (2次) | ⑱ 樽味高木遺跡 (7次) |
| ⑲ 樽味高木遺跡 (13次) | | |

第 13 図 調査地周辺の遺跡分布図

2. 調査組織

所在地：松山市桑原二丁目 967 番 1 の一部

調査期間：2008（平成 20）年 12 月 1 日～2009（平成 21）年 1 月 30 日

調査面積：188㎡

契約者：センコーホーム松山株式会社 代表取締役 新野 頼正

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター 武正 良浩

第 2 節 層 位

調査地は、調査以前には耕作地として利用されていた。試掘調査終了後、契約者は重機の使用による耕作土の剥ぎ取り、その後、発掘調査開始までの間に造成工事が行われた。なお、発掘調査中は安全上の配慮から工事は一時中断した。調査地の基本層位は、以下の 5 層である（第 14・15 図）。

第 I 層：造成工事を行うため便宜的に搬入された真砂土で、調査地東半部にみられ、最大層厚 40 cm である。

第 II 層：近現代の農耕に伴う耕土で、3 層に分層される。

第 II ①層－黒色粘質土（7.5Y 2/1）で調査地東側にみられ、層厚 2～5cm である。

第 II ②層－灰色粘質土（7.5Y 5/1）で調査地ほぼ全域にみられ、層厚 2～12cm である。

第 II ③層－にぶい黄色土（2.5Y 6/3）で、調査地ほぼ全域にみられ、層厚 5～13cm である。

第 III 層：土色・土質の違いにより、2 層に分層される。

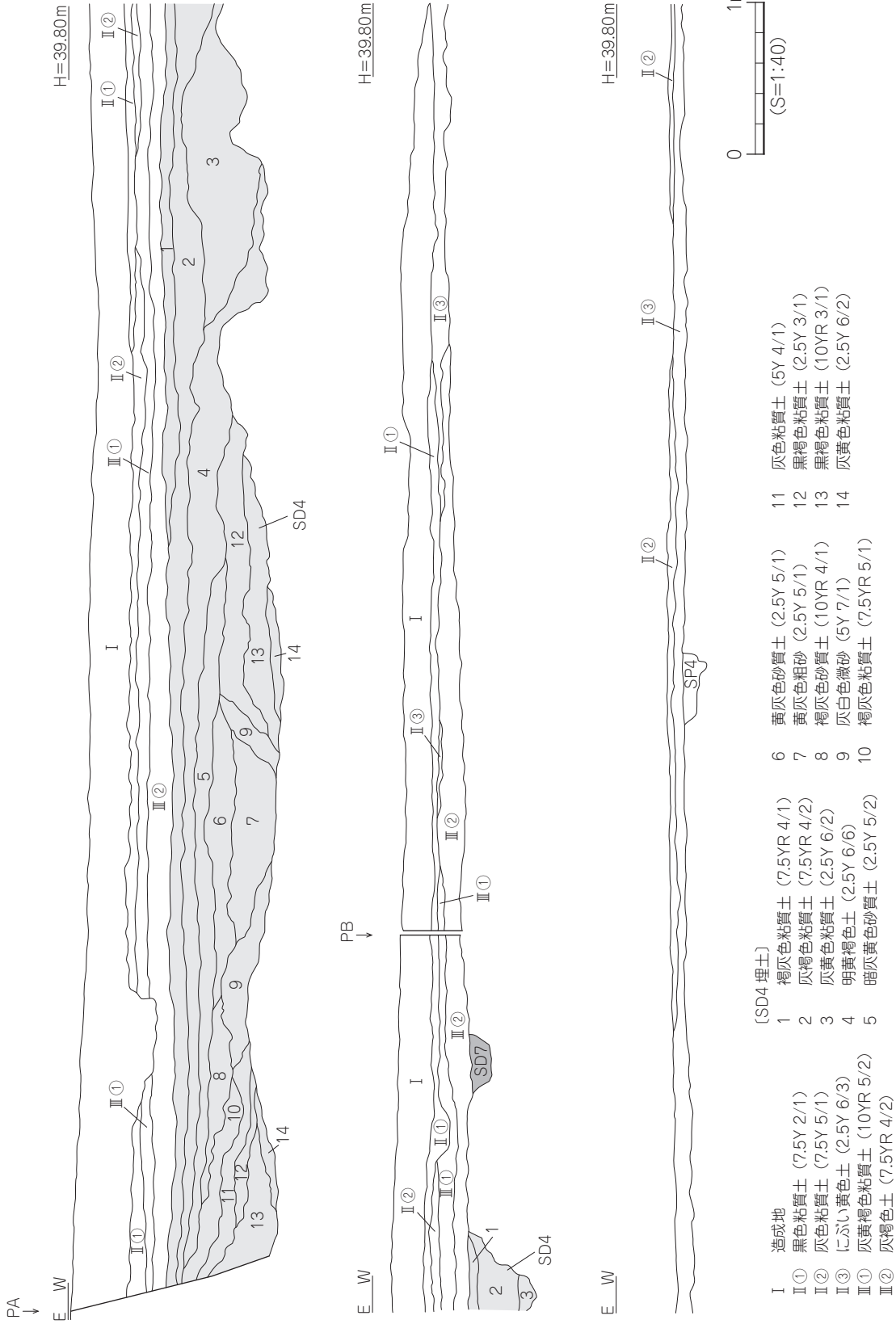
第 III ①層－灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）で調査地東側にみられ、層厚 5～10cm である。

第 III ②層－灰褐色土（7.5YR 4/2）で調査地東側にみられ、層厚 5～20cm である。本層中からは、古代に時期比定される土器が少量出土した。

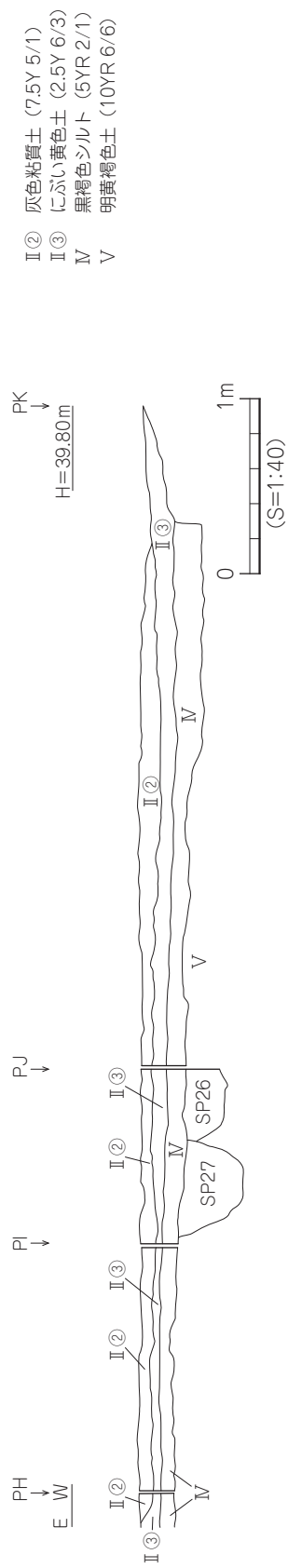
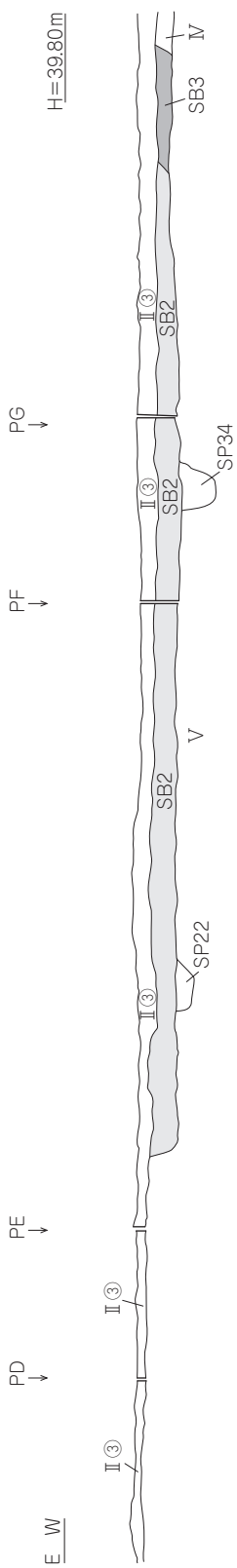
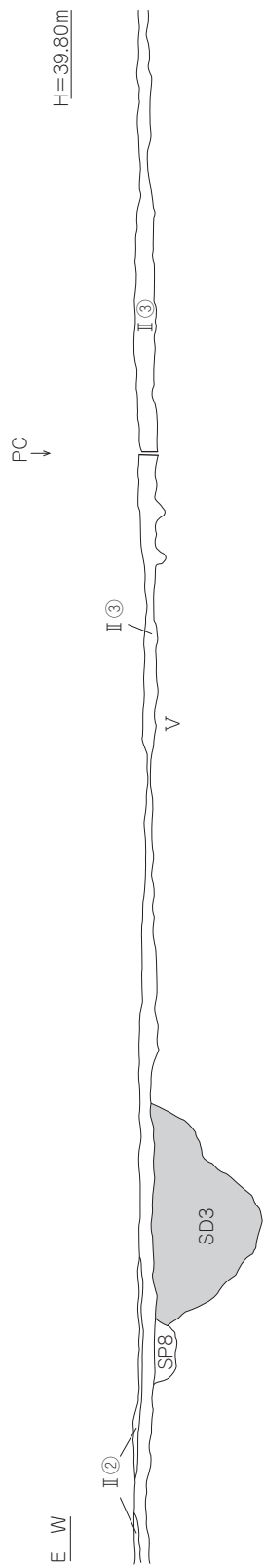
第 IV 層：黒褐色シルト（5YR 2/1）で調査地西半部にみられ、層厚 7～17cm である。本層中からは弥生土器や土師器、須恵器が出土した。

第 V 層：明黄褐色土（10YR 6/6）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。なお、周辺の調査では AT 火山灰が確認されており、色調や土質等より本層は AT 火山灰と推測される。

検出遺構や出土遺物より、第 IV 層は古墳時代、第 III 層は古代までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査地内を 6 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ 1・2、東から西へ A・B・C・・・I とし、A1・A2・B1・・・I2 といったグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。調査では、弥生土器や土師器、須恵器のほか、石器（石庖丁・砥石）、玉類（勾玉・白玉）、石製紡錘車などが出土した。なお、遺物の出土量は収納用箱（22 × 44 × 66cm）15 箱分である。



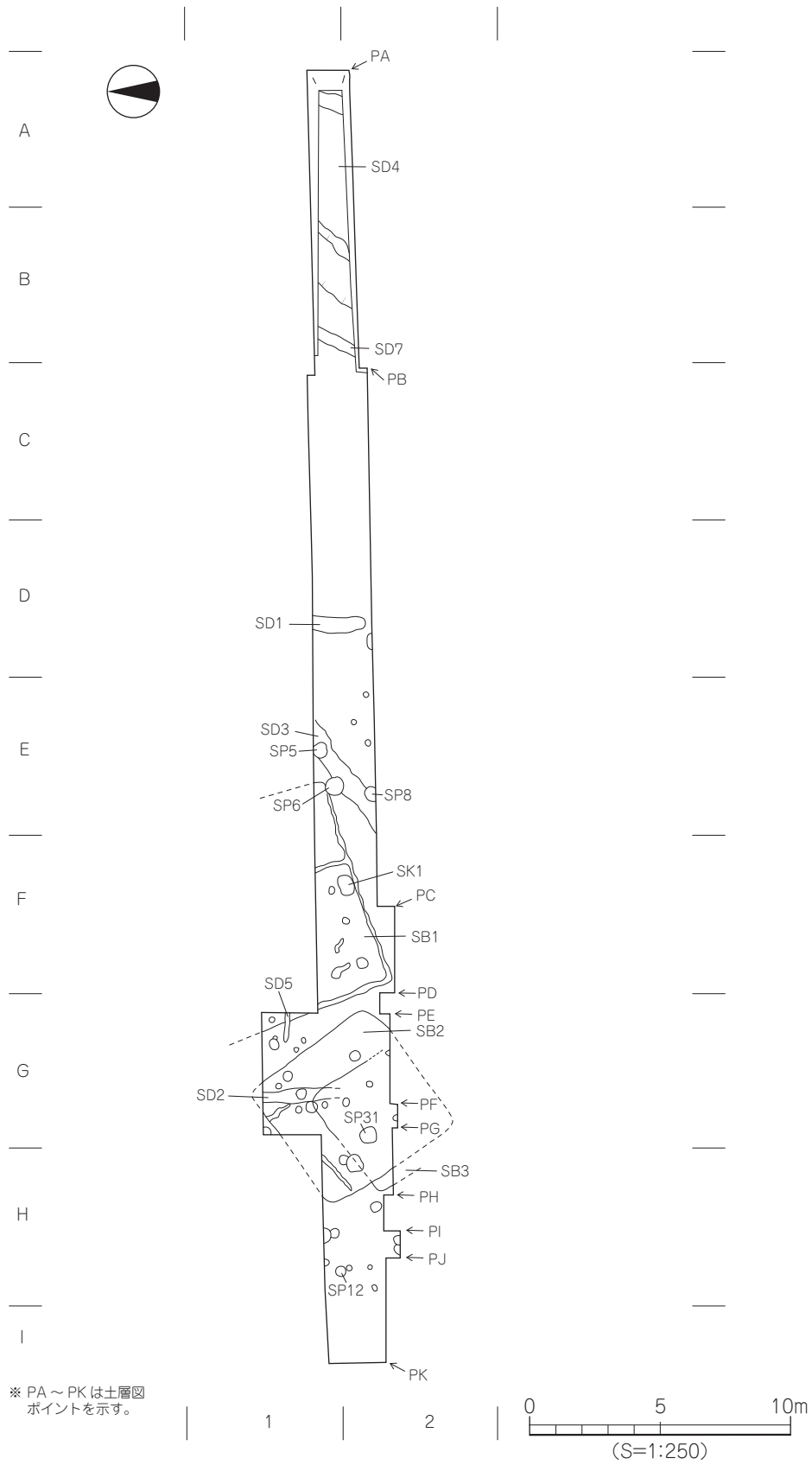
第14図 南壁土層図 (1)



- II(2) 灰色粘質土 (7.5Y 5/1)
- II(3) にふい黄色土 (2.5Y 6/3)
- IV 黒褐色シルト (5YR 2/1)
- V 明黄褐色土 (10YR 6/6)

層位

第 15 図 南壁土層図 (2)



第 16 図 遺構配置図

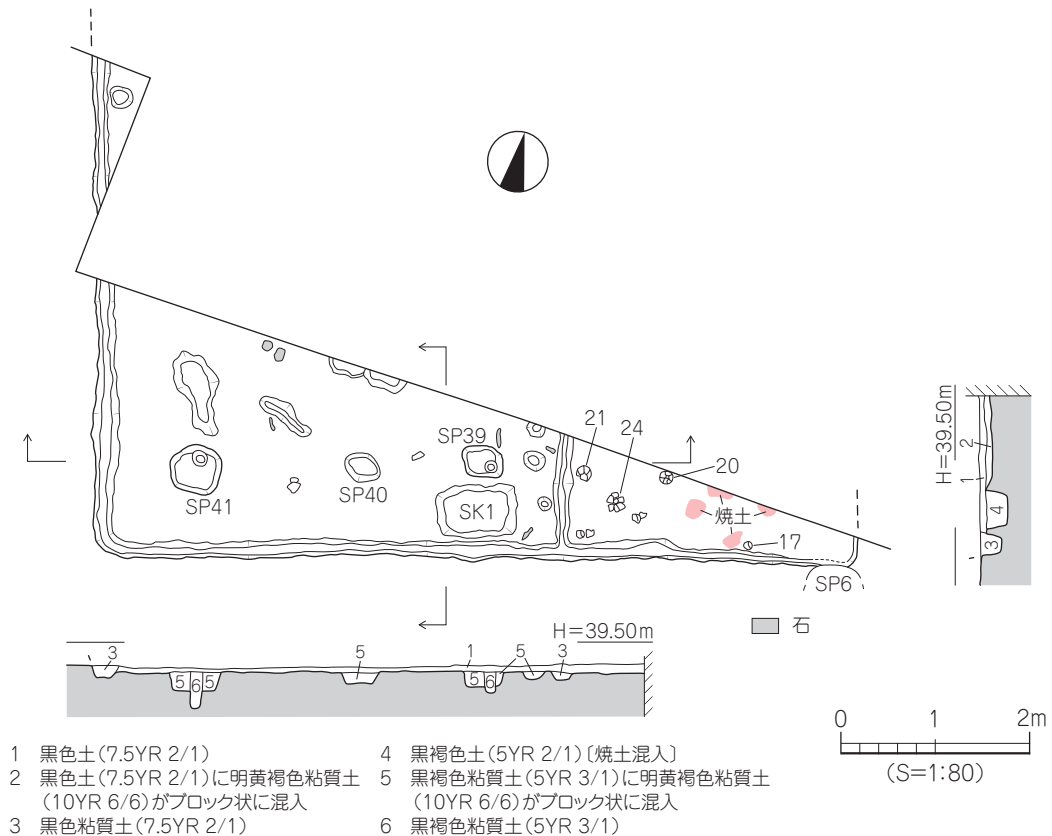
第3節 遺構と遺物

調査では竪穴建物3棟、溝6条、土坑1基、柱穴41基を検出した（第16図、図版6・7）。ここでは、遺構別に説明する。

1. 竪穴建物

SB1（第17図、図版6・7）

調査区中央部西寄り E1～G2 区に位置する竪穴建物で、北半部は調査区外に続く。平面形態は長方形をなすものと思われ、規模は東西長 8.10 m、南北検出長 5.32 m、壁高は 10cm である。建物埋土は黒色土（7.5YR 2/1）を基調とし、床面付近には明黄褐色粘質土（10YR 6/6）が部分的にみられる。検出状況から、この明黄褐色土は建物床面修復のために施された貼床と考えられる。内部施設は、壁体沿いに幅 10～28cm、深さ 6cm 程度の周壁溝が巡る。周壁溝埋土は、黒色粘質土（7.5YR 2/1）である。また、貼床土上面にて数基の柱穴を検出した。このうち、2 基の柱穴（SP39・41）は配置から SB1 の支柱穴と考えられる。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質土（5YR 3/1）に明黄褐色粘質土（10YR 6/6）がブロック状に混入するものである。柱痕は 2 基の柱穴で検出され、柱痕径は約 12cm である。このほか、建物中央部付近にて小溝を検出した。規模は幅 15cm、深さ 6cm で、黒色粘質土で埋没する。周壁溝と



第17図 SB1測量図

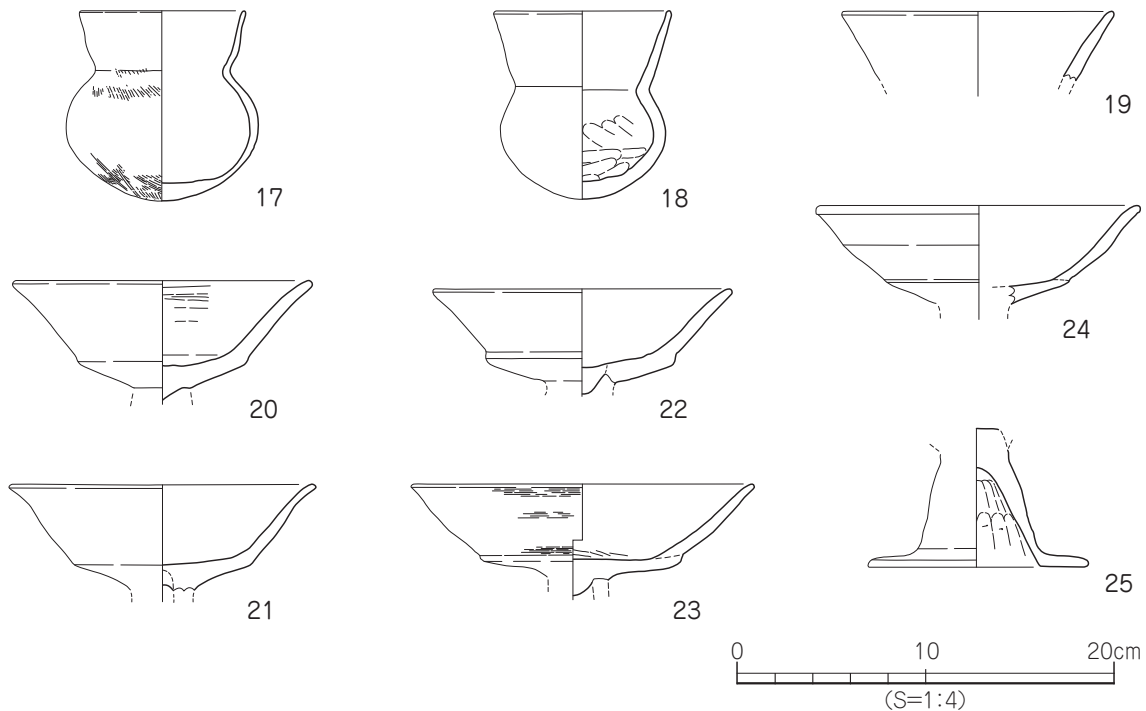
の前後関係は不明であるが、建物内を区切る仕切り溝と推測される。このほか、建物南側中央部にて土坑 SK1 を検出した。平面形態は楕円形をなし、規模は長径 0.86 m、短径 0.58 m、深さ 20cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は黒褐色土 (5YR 2/1) であるが、少量の焼土や炭化物が混入する。検出状況や出土した遺物より、SK1 は SB1 に伴う遺構と考えられる。なお、建物床面からは数基のピットや溝状遺構が検出されたが、埋土が建物埋土や周壁溝埋土と類似することから、SB1 に伴う遺構と思われる。遺物は建物南壁中央部東寄りの地点にて、2 個の壺 (17・18) が連なった状態で出土したほか、別々の場所で出土した高坏の坏部 (24) と脚部 (25) が接合すると同一個体となった。また、SK1 からは完形の壺や土製の丸玉のほか、勾玉や白玉が出土した。

SB1 出土遺物 (第 18 図、図版 9)

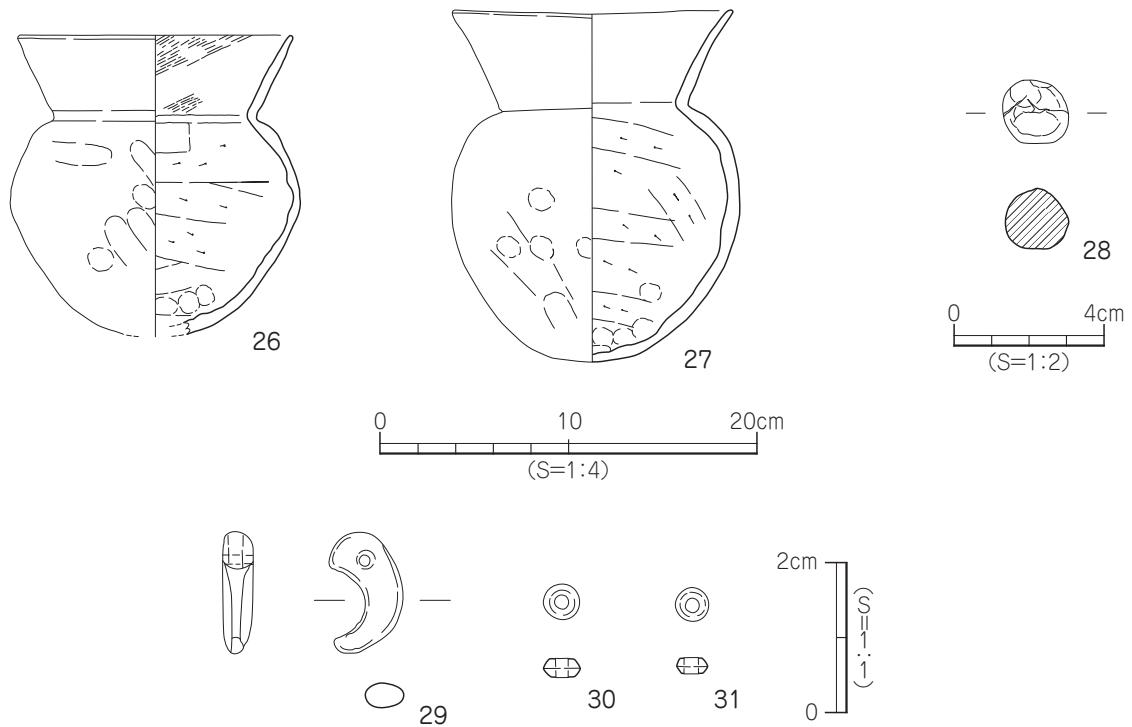
17・18 は小型の壺。17 は完形品で、口径 8.8cm、器高 10.1cm である。口縁部はやや内湾し、頸部外面に凹みをもつ。18 は完形品で、口径 9.4cm、器高 10.0cm である。口縁部は直立し、端部は尖り気味に仕上げる。体部内面には、指頭痕が顕著に残る。19 は直口壺の口縁部片で、1/4 の残存である。20～25 は高坏。20・21 は坏下部に稜をもち、22～24 は段を有する。25 は脚裾部が水平方向に開き、柱裾部内面には明瞭な稜をもつ。なお、24・25 は同一個体と考えられる。坏脚部の接合は、20～23 が充填技法、24 は差し込み技法による。

SK1 出土遺物 (第 19 図、図版 9・10)

26・27 は土師器の壺。26 の口縁部は直立し、頸部外面には凹みをもつ。胴部内面には、ヨコ方向のヘラケズリが施され、胴部中位の壁体は薄い。1/3 の残存。27 は完形品で、口径 14.8cm、器高 18.7cm である。口縁部は外反し、胴部内面にはヨコないしナナメ方向のヘラケズリが施され、底部内面には指頭痕が顕著に残る。28 は土製の丸玉で、直径 1.7cm である。29 は滑石製の勾玉で、長さ 3.0cm、



第 18 図 SB1 出土遺物実測図



第 19 図 SK 1 出土遺物実測図

厚さ 3mm である。色調は、やや暗い緑色である。30・31 は滑石製の白玉で、30 は直径 0.5cm、厚さ 0.26 cm、31 は直径 0.4cm、厚さ 0.2cm である。色調は、濃灰色である。

時期：出土遺物の特徴より SB1 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期、5 世紀前半と考えられる。

SB 2 (第 20 図、図版 6・8)

調査区西側 G1～H2 区に位置する竪穴建物で、建物東半部は壁体を検出したが、西半部は周壁溝と思われる小ピット列のみの検出である。なお、SB2 は SB3 と一部重複しており、SB3 が SB2 に先行する。また、建物北東部は溝 SD2 (近現代) に一部削平されている。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北長 5.75 m、東西検出長 5.60 m、壁高は 15cm である。埋土は、黒褐色粘質土 (5YR 3/1) 単層である。内部施設は、支柱穴と周壁溝を検出した。支柱穴は方形に並ぶ 4 本の柱穴 (SP18・23・25・34) で、柱穴掘り方埋土は黒褐色土 (5Y 3/1) に明黄褐色土 (10YR 6/6) がブロック状に混入するものである。なお、SP18 からは柱痕を検出した。柱痕径は、約 12cm である。建物西側では、径 3～10cm、深さ 3cm 程度の小ピット列を検出した。おそらく、周壁溝に伴うものと判断される。このほか、建物北東部と北西部にて小溝を検出した。幅 15～25cm、深さ 6cm の溝で、SB1 と同様、建物内を区切るための仕切り溝と思われる。このほか、建物東壁中央部にて焼土の塊を検出した。カマドの一部と考えられるが、崩落が著しく、発掘調査時には範囲のみを記録した。なお、SB2 床面にて SB3 の周壁溝を一部検出した。遺物は、土師器や須恵器のほか石製の紡錘車出土した。

出土遺物 (第 21 図、図版 10)

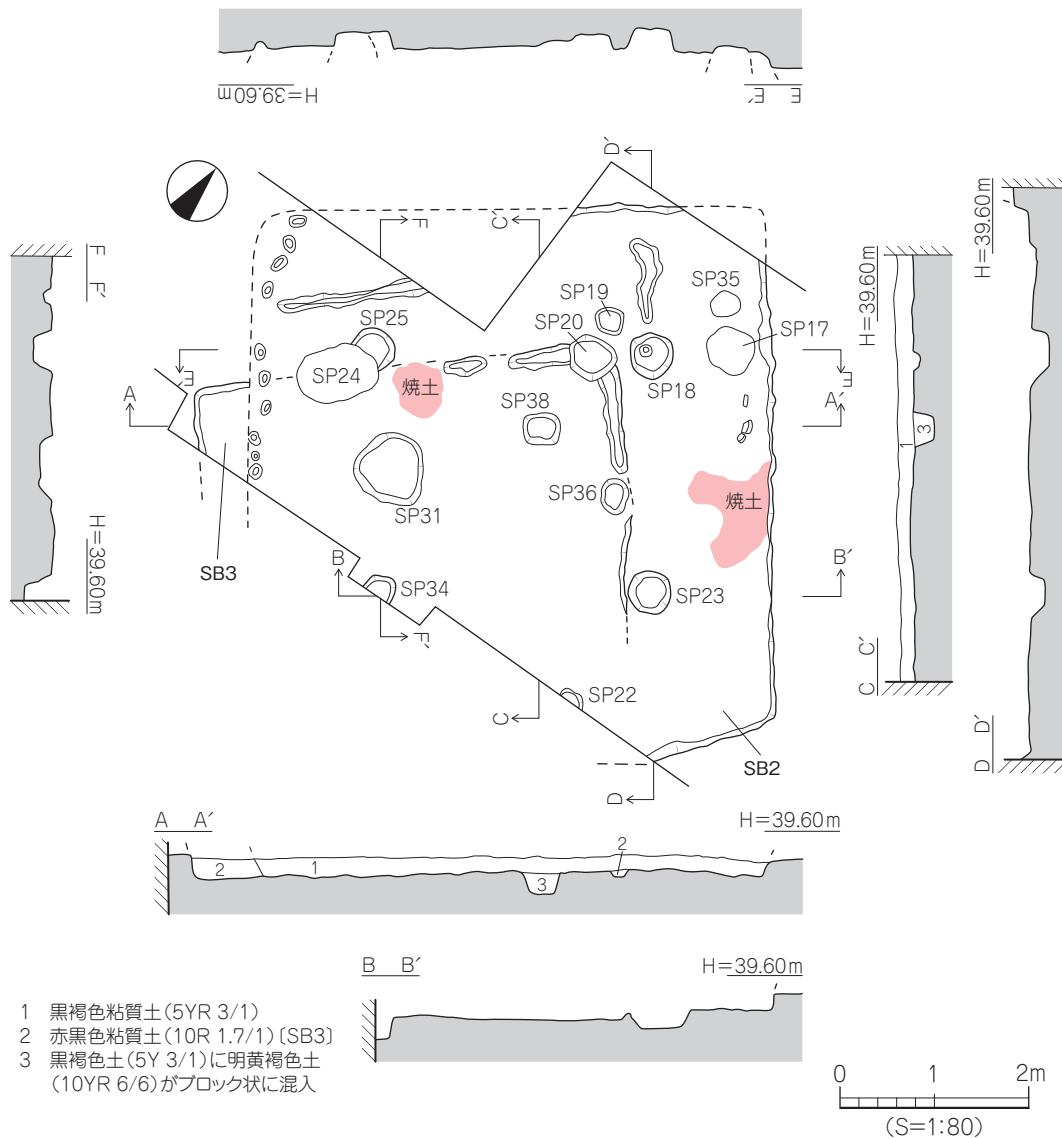
32 は土師器の甕で、口縁部は外反する。1/2 の残存。33 はフィゴの羽口で、先端部には焼け焦げ

痕が残る。34は須恵器坏身片で、受部径14cmである。35は滑石製の紡錘車。完存品で、上部径1.6cm、下部径3.2cm、厚さ1.17cmである。断面形態は台形状をなし、中央部に径0.6～0.7cm大の孔を穿つ。上部面は使用による摩耗が著しく、わずかに鋸歯文の線刻が看取される。一方、下部面には外周より綾杉文や格子鋸歯文が明瞭に残る。色調は、濃い緑色である。

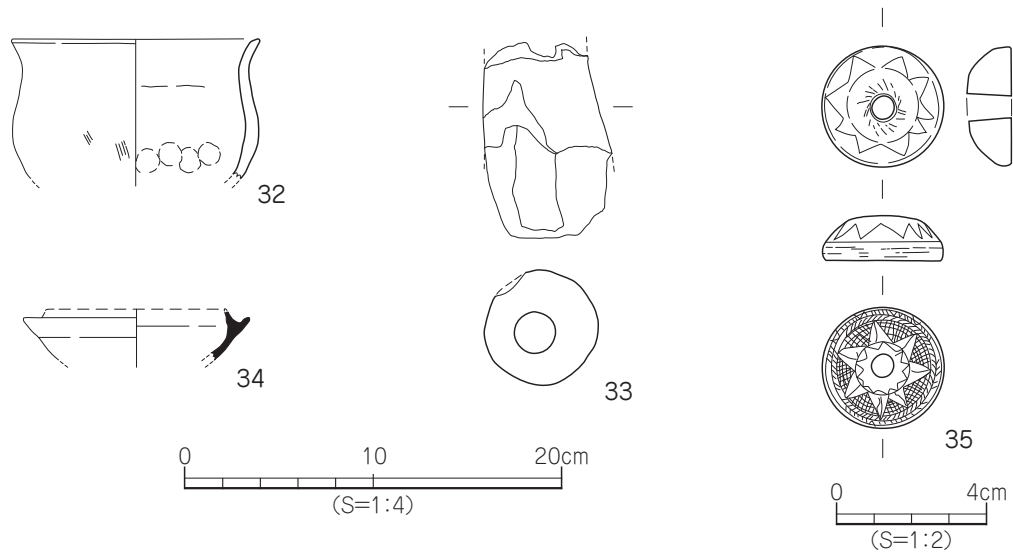
時期：出土遺物の特徴より、SB2の廃棄・埋没時期は古墳時代後期、6世紀後半と考えられる。

S B 3 (第20図、図版6)

SB2と重複する竪穴建物で、SB2床面にて検出した。切り合いより、SB3がSB2に先行する。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は東西長4.50m、南北検出長2.80m、壁高は建物西側では20cmである。建物埋土は、赤黒色粘質土(10R 1.7/1)単層である。内部施設は、建物北東部にて幅10～20cm、深さ3cm程度の周壁溝を検出した。このほか、建物北壁中央部に焼土の広がりを検出



第20図 S B 2・3 測量図



第 21 図 SB2 出土遺物実測図

した。カマドの痕跡と判断したが現況復元が難しく、範囲のみを記録にとどめた。なお、建物内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB2に先行することから、SB3の廃棄・埋没時期は概ね古墳時代後期後半以前とする。

2. 溝

SD3（第22図、図版8）

調査区中央部E1～F2区で検出した北東－南西方向の溝で、3基の柱穴（SP5・6・8）に一部削平されている。なお、SP5からは古墳時代後期後半に時期比定される遺物が出土している。規模は検出長4.75m、幅1.00、深さ56cmである。断面形態は舟底状をなし、埋土は6層に分層される。上位より1層灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）、2層灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）に灰黄褐色微砂（10YR 5/2）が少量混入、3層灰オリーブ色粗砂（5Y 5/2）、4層灰黄色微砂（2.5Y 6/2）、5層暗灰黄色微砂（2.5Y 5/2）、6層灰黄色砂（2.5Y 6/2）である。溝内から少量の弥生土器や土師器の小片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：時期特定しうる遺物がないが、前述の柱穴に先行することから、概ね古墳時代後期後半以前の溝とする。

SD5（第23図）

調査区中央部西寄りG1区で検出下東西方向の溝で、SB2より後出する。溝上面は、第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長1.06m、幅0.24m、深さ5cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は灰黄褐色土（10YR 5/2）単層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、SB1より後出することから、古墳時代中期以降の溝とする。

SD7 (第24図)

調査区東側 B1～C2区で検出した北東－南西方向の溝で、溝上面は第Ⅲ②層が覆う。規模は検出長1.82 m、幅0.46、深さ12cmである。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色粘質土(7.5YR 3/1)単層である。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第Ⅲ②層が溝覆うことや埋土がSB1やSB2と類似することから、概ね古墳時代の溝とする。

SD4 (第14・16図、図版8)

調査区東側 A1～B2区で検出した北東－南西方向の溝で、溝上面は第Ⅲ②層が覆う。検出長9.00 m、幅1.50 m、深さ70cmである。断面形態はレンズ状をなすが、部分的にテラス状の平坦部がみられる。埋土は14層に細分され、1層褐灰色粘質土(7.5YR 4/1)、2層灰褐色粘質土(7.5YR 4/2)、3層灰黄色粘質土(2.5Y 6/2)、4層明黄褐色土(2.5Y 6/6)、5層暗灰黄色砂質土(2.5Y 5/2)、6層黄灰色砂質土(2.5Y 5/1)、7層黄灰色粗砂(2.5Y 5/1)、8層褐灰色砂質土(10YR 4/1)、9層灰白色微砂(5Y 7/1)、10層褐灰色粘質土(7.5YR 5/1)、11層灰色粘質土(5Y 4/1)、12層黒褐色粘質土(2.5Y 3/1)、13層黒褐色粘質土(10YR 3/1)、14層灰黄色粘質土(2.5Y 6/2)となり、埋土中に砂が含まれていることから、水流が存在したことが伺われる(第14図)。遺物は埋土中より土師器や須恵器の破片が出土したほか、大型の砥石が含まれている。

出土遺物 (第25図、図版10)

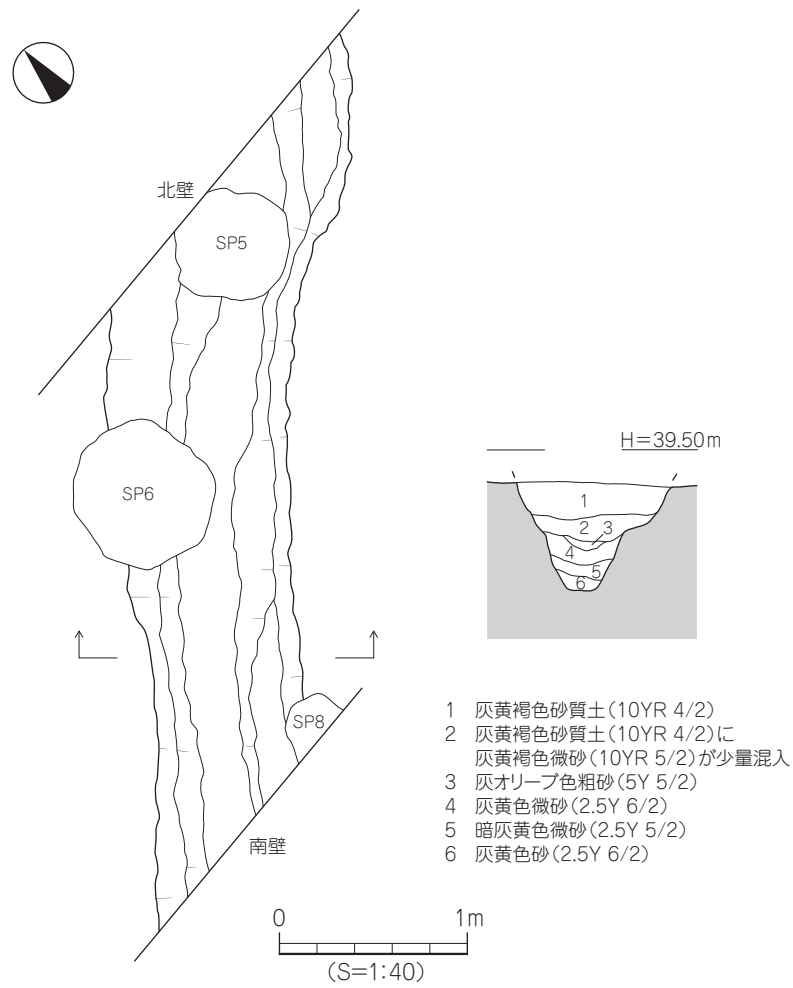
36～44は須恵器、45・46は土師器。36・37は坏蓋。36は推定口径23.1cmで、口縁部は下方に屈曲する。37は推定口径11.8cmで、かえり端部は尖る。38・39は高台の付く坏で、38の口縁部はわずかに外反し、高台は「ハ」の字状に開く。40は短頸壺の蓋で、口縁部は内湾し、端部は尖る。41・42は短頸壺で、41の口縁部は短く直立し、端部は尖り気味に丸い。42の口縁部は外反し、肩部に稜をもつ。43は広口壺で、口縁端部は内方へ肥厚する。44は平瓶の口頸部片で、口縁部はやや外反する。45は甕の口縁部片。外反口縁で、口縁端部は「コ」字状をなす。器壁は厚く、外面には粗いハケメ調整を施す。46は高台の付く坏であるが磨滅が著しく、高台は丸みをもつ三角形状となっている。47は長さ20.5cm、幅14.5cm、厚さ11.2cmの大型砥石で、4面の砥面をもつ。安山岩製。

時期：出土した遺物には時期幅が認められることから、SD4は古墳時代後期には出現し、奈良時代頃まで存在した溝と考えられる。

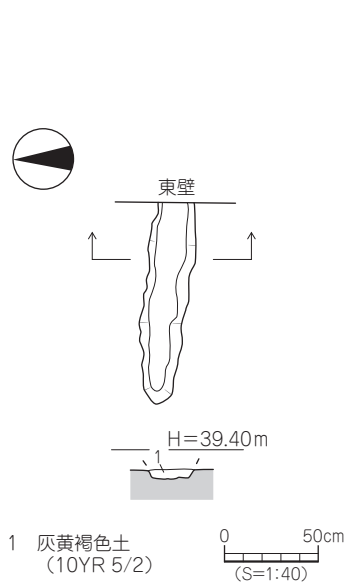
SD1 (第26図)

調査区中央部東寄り D1・2区で検出した南北方向の溝で、溝北側は調査区外へ続く。調査区北壁の土層観察により、第Ⅱ層中から掘削された遺構である。規模は検出長1.96 m、幅0.57 m、深さ11 cmである。断面形態は皿状をなし、埋土はオリーブ灰色砂質土(10Y 5/2)を基調とし、基底面付近には黄色砂質土(5Y 7/6)が堆積する。溝内から、遺物の出土はない。

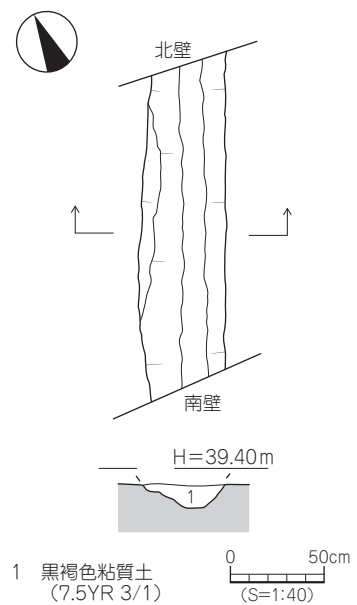
時期：検出層位より、近現代の溝と考えられる。



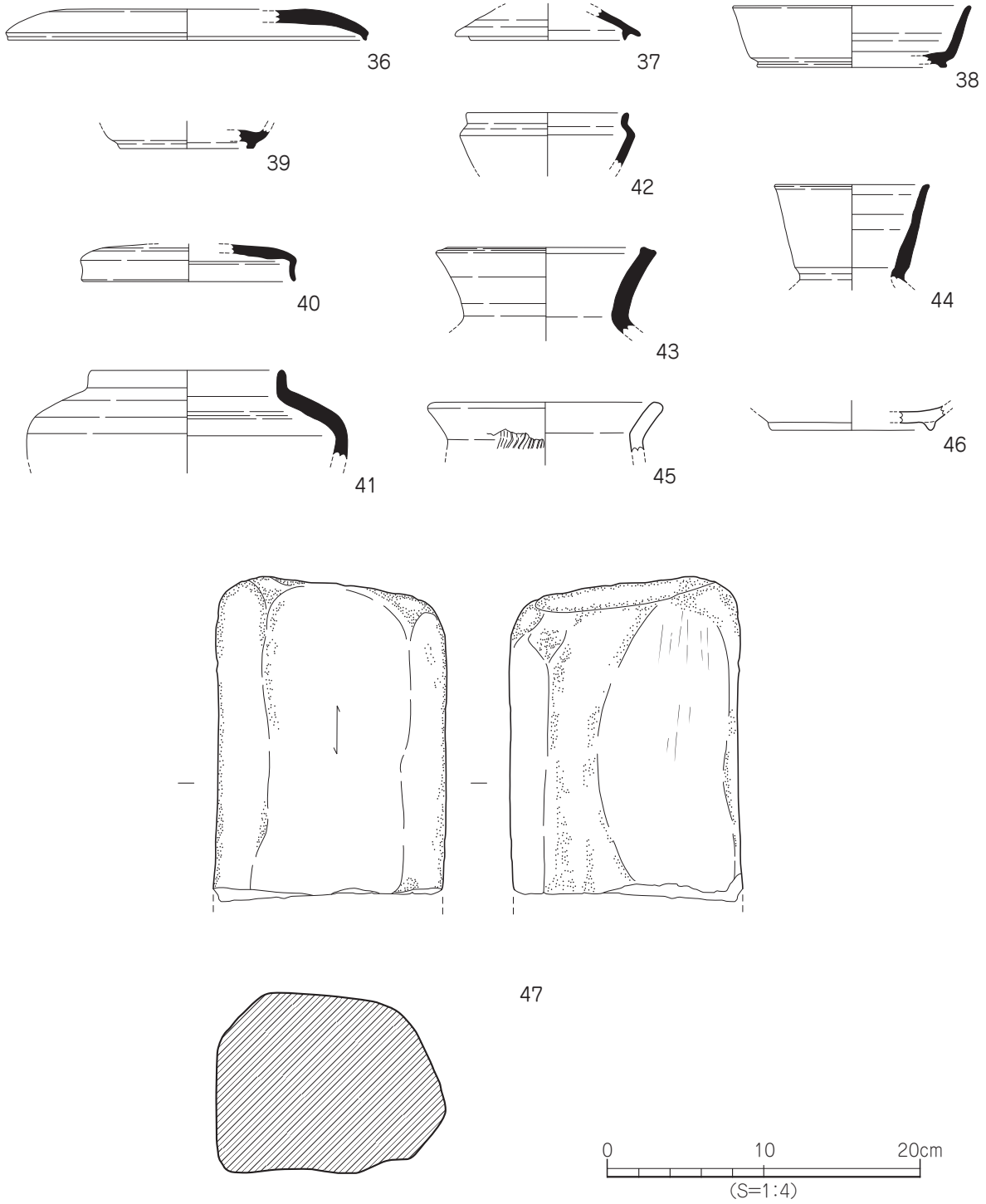
第 22 図 SD 3 測量図



第 23 図 SD 5 測量図



第 24 図 SD 7 測量図



第 25 図 S D 4 出土遺物実測図

SD2 (第27図)

調査区南側 G1・2区で検出した南北方向の溝で、SB2を一部削平している。調査区北壁の土層観察により、第Ⅱ層中から掘削された遺構である。規模は検出長 2.42 m、幅 0.54 m、深さ 11cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6) 単層である。溝内から、遺物の出土はない。

時期：検出層位より、近現代の溝と考えられる。

3. その他の遺構と遺物

調査では、41基の柱穴を検出した。本調査では、建物を構成するには至らなかったが、近隣地域に存在する建物に伴う柱穴である可能性が高いものも数基みられた。また、包含層中からは弥生時代から古代に時期比定される遺物が出土したほか、出土地点は不明であるが、石器(石庖丁)が出土している。

(1) 柱 穴

調査では、41基の柱穴を検出した。この中にはSB1及びSB2の支柱穴6基が含まれている。柱穴掘り方埋土は、以下の5種類に分類される。

A類-黒褐色土 (7.5YR 3/1) : 26基

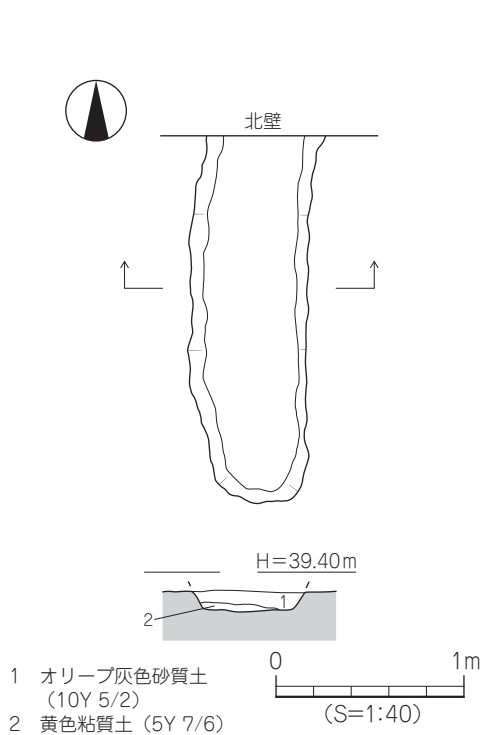
[SP1 ~ 8・10・11・14 ~ 18・20 ~ 23・25・26・31・33 ~ 35・37]

B類-黒褐色土 (5YR 3/1) に明黄褐色土 (10YR 6/6) がブロック状に混入 : 5基

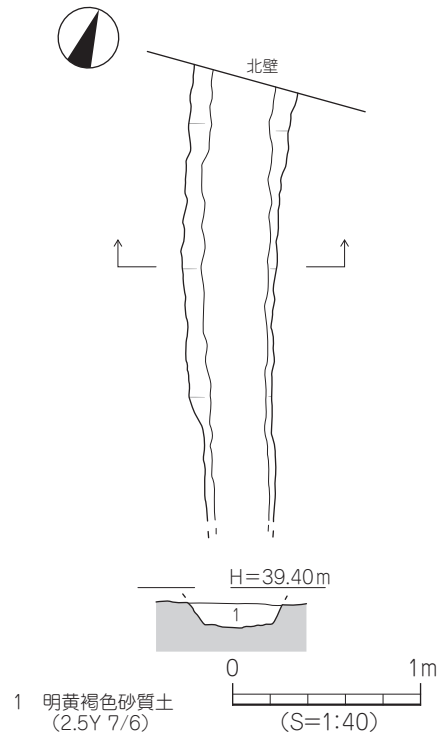
[SP28 ~ 30・39・41]

C類-黒色粘質土 (7.5YR 2/1) : 6基

[SP9・12・13・24・27・32]



第26図 SD1測量図



第27図 SD2測量図

D類 - 暗褐色土 (7.5YR 3/3) : 2基

[SP19・40]

E類 - 極暗褐色粘質土 (7.5YR 2/3) : 2基

[SP36・38]

なお、A類の柱穴からは古墳時代や古代、C類の柱穴からは弥生時代の遺物が出土した。

出土遺物 (第28図)

48はSP5、49はSP6、50～52はSP31、53・54はSP8、55はSP12出土品。48～50は須恵器坏蓋片。48・49の口縁端部は、尖り気味に丸い。50の口縁部は下外方に屈曲する。51は須恵器坏で、体部は内湾し、口縁端部は丸い。52は高台の付く坏で、口縁部は外反する。53は土師器の直口壺で、口縁部は直立気味に開く。54は土師器坏で、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。55は弥生土器の支脚で、脚端部は平坦面をなし、内外面には指頭痕が顕著に残る。

(2) 包含層・地点不明出土遺物 (第29図)

1) 第IV層出土遺物

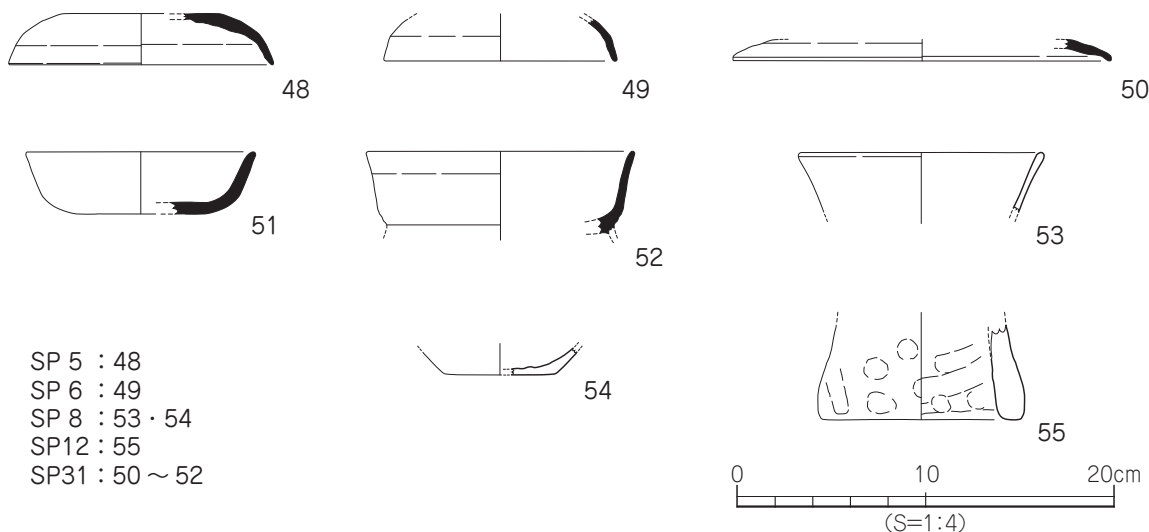
56～61は須恵器。56は坏身片で、たちあがり径10.2cmである。57・58は高台の付く坏で、高台は「ハ」の字状に開く。59は皿で、比較的高さのある高台が付く。60は坏蓋のつまみで、中央部が突出する。61は甕で、口縁端部は内方に肥厚する。62～65は土師器。62・63は高坏で、62の口縁部は外反し、63の柱裾部内面には不明瞭な稜をもつ。

2) 第III層出土遺物

64・65は土師器。64は円盤高台状の底部を持つ坏で、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。65は皿で、口縁部はやや外反する。底部外面には、わずかに回転ヘラ切り痕を残す。

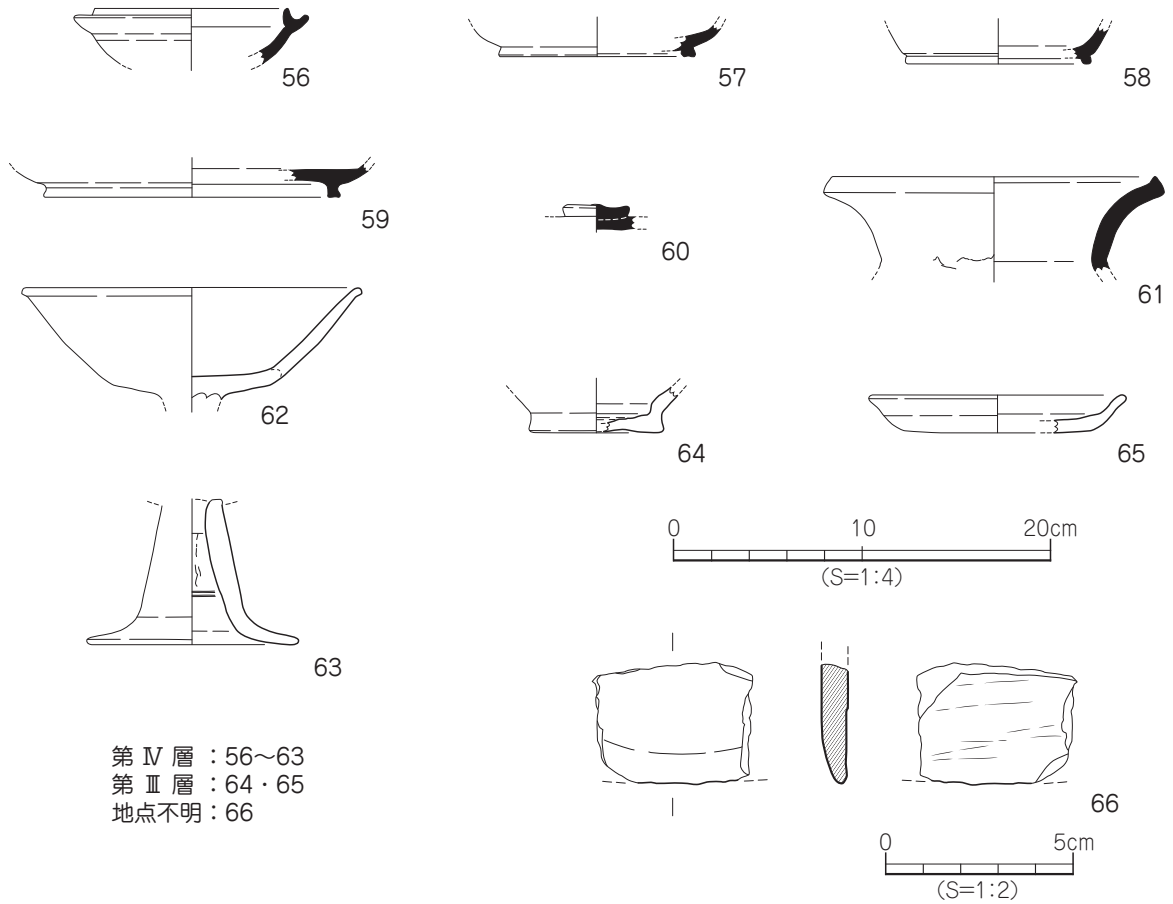
3) 地点不明出土遺物

66は石庖丁で、製作途中の未成品である。結晶片岩製。



SP 5 : 48
 SP 6 : 49
 SP 8 : 53・54
 SP 12 : 55
 SP 31 : 50～52

第28図 柱穴出土遺物実測図



第 29 図 包含層・地点不明出土遺物実測図

第 4 節 小 結

桑原東稲葉遺跡 1 次調査は、調査地内における弥生時代以降の集落構造解明を主目的として実施した。狭小範囲の調査ではあったが、弥生時代から古代の遺構や遺物を確認することができた。

弥生時代の遺構は未検出であるが、柱穴内や包含層中より後期の遺物が出土した。次に、古墳時代では竪穴建物や溝を確認した。SB1 は古墳時代中期前半の竪穴建物で、一辺 8 m 規模の比較的大型の建物である。建物内からは周壁溝や土坑のほか、建物内部を仕切るための溝を検出した。このような大型建物の事例としては、調査地の北西約 170 m の地点にある樽味四反地遺跡 5 次調査検出の SB6 (長さ 7 m、幅 6 m) や、樽味四反地遺跡 13 次調査検出の SB9 (長さ 8.5 m、幅 6.4 m) があげられる。両者は平面形態が長方形をなすことから、本調査検出の SB1 も長方形の建物と考えられる。建物内に付設された土坑 SK1 からは、完形の壺や滑石製の勾玉や白玉と土製の丸玉が出土した。特に、勾玉や白玉は建物廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われた際に使用されたものと考えられており、本建物の廃絶時にも同様のことが行われたものと推測される。一方、SB2 は古墳時代後期後半の竪穴建物で、建物内からは滑石製の紡錘車が出土した。度重なる使用により表面は摩耗が著しく、稜は薄れ丸みを帯びているが、わずかに鋸歯状の線刻が看取される。底面には外周から綾杉文、格子状鋸歯文が明瞭に残る。本来、生産具である紡錘車が滑石で製作され、鋸歯文等が施されることにより祭祀用具とし

での性格を帯びることが指摘されている。今回出土した紡錘車には使用痕が顕著に残ることから、この祭器を使った祭祀が、この地で行われた可能性が高いと考えられる。なお、同様の紡錘車は前述した樽味四反地遺跡5次調査検出のSB4（古墳時代後期）と柱穴内より各1点が出土している。このほか、古墳時代では3条の溝を検出した。このうち、SD3は幅1m、深さ56cmを測る北東-南西方向の溝である。後述する桑原東稲葉遺跡2次調査では古墳時代後期後半の溝SD3が検出されているが、規模や方向等より両者は同一溝と考えられる。

古代では、溝SD4がある。SD4は調査地東半部で検出した溝で、溝内からは古墳時代から奈良時代に時期比定される土器や石器が出土した。溝内には粘質土や砂等が互層堆積しており、長期間存在していたものと推測される。調査地のある桑原・樽味地区では、古代において数多くの溝や自然流路が検出されており、規模は不明であるが調査地近隣にも同様の溝が存在していることが判明した。遺物では柱穴内より緑釉陶器片が1点出土したほか、包含層中からは平安時代の土師器片が数点出土している。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

地区欄	グリッド名を記載。
規模欄	()：検出値を示す。
埋土欄	複数の土層がある場合→「黒色土 他」と記載。
出土遺物欄	遺物名称を略記した。 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

法量欄	()：復元推定値を示す。
調整欄	土器の各部位名称を略記した。 例) 天→天井部、口→口縁部、体→体部、胴→胴部、底→底部
胎土欄	胎土欄には混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ ()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 石・長(1～4) → 「1～4mm大の石英・長石を含む」である。
焼成欄	焼成欄の略記について ◎→良好、○→良

遺構一覧

表7 竪穴建物一覧

竪穴 (S B)	地区	平面形	規模 長さ×幅×壁高 (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	E1～G2	(長方形)	8.10 × (5.32) × 0.10	黒色土 他	主柱穴・溝・土坑 周壁溝・貼床	弥生・土師	古墳中期前半	
2	G1～H2	(方形)	5.75 × (5.60) × 0.15	黒褐色粘質土	主柱穴・周壁溝 カマド	土師・須恵 紡錘車	古墳後期後半	
3	G1～H2	(方形)	4.50 × (2.80) × 0.20	赤黒色粘質土	周壁溝		古墳後期後半以前	

表8 溝一覧

溝 (S D)	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D1・2	皿状	(1.96) × 0.57 × 0.11	オリーブ灰色砂質土 他		近現代	
2	G1・2	皿状	(2.42) × 0.54 × 0.11	明黄褐色砂質土		近現代	
3	E1～F2	舟底状	(4.75) × 1.00 × 0.56	灰黄褐色砂質土 他	弥生・土師	古墳後期後半以前	
4	A1～B2	レンズ状	(9.00) × 1.50 × 0.70	褐灰色粘質土 他	土師・須恵・石	奈良時代	
5	G1	皿状	(1.06) × 0.24 × 0.05	灰黄褐色土		古墳中期以降	
7	B1～C2	レンズ状	(1.82) × 0.46 × 0.12	黒褐色粘質土		古墳	

表9 土坑一覧

土坑 (S K)	地区	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	G2	楕円形	逆台形状	0.86 × 0.58 × 0.20	黒褐色土	土師・玉	古墳中期前半	SB1 床面検出

表10 柱穴一覧

(1)

柱穴 (S P)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	E2	円形	0.25 × 0.25 × 0.15	黒褐色土		柱痕
2	E2	円形	0.26 × 0.26 × 0.12	黒褐色土		
3	E2	円形	0.20 × 0.20 × 0.08	黒褐色土	石	
4	D2	(楕円形)	0.62 × 0.18 × 0.16	黒褐色土		
5	E1	円形	0.72 × 0.72 × 0.30	黒褐色土	須恵・石	
6	E1・2	円形	0.61 × 0.58 × 0.26	黒褐色土	須恵	柱痕
7	G2	楕円形	0.34 × 0.26 × 0.08	黒褐色土		
8	E2	(円形)	0.40 × (0.20) × 0.22	黒褐色土	弥生・土師	柱痕
9	H1	(円形)	(0.70) × (0.36) × 0.28	黒色粘質土		
10	H1	円形	0.40 × 0.40 × 0.15	黒褐色土		
11	H2	円形	0.20 × 0.20 × 0.08	黒褐色土		
12	H1	楕円形	0.72 × 0.62 × 0.20	黒色粘質土	弥生	
13	H2	楕円形	0.70 × 0.44 × 0.20	黒色粘質土		
14	G1	(円形)	(0.31) × (0.30) × 0.18	黒褐色土		
15	G1	円形	0.26 × 0.26 × 0.18	黒褐色土		
16	G1	円形	0.44 × 0.42 × 0.22	黒褐色土		柱痕
17	G1	円形	0.50 × 0.50 × 0.28	黒褐色土		
18	G1	円形	0.48 × 0.46 × 0.18	黒褐色土		SB2 主柱穴・柱痕
19	G1	円形	0.28 × 0.26 × 0.12	暗褐色土		

桑原東稲葉遺跡 1次調査

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
20	G1	円形	0.40 × 0.39 × 0.06	黒褐色土		
21	G1	円形	0.22 × 0.20 × 0.10	黒褐色土		
22	G2	円形	0.36 × 0.20 × 0.12	黒褐色土		
23	G2	円形	0.42 × 0.42 × 0.20	黒褐色土	土師	SB2 主柱穴
24	H2	楕円形	0.52 × 0.34 × 0.10	黒色粘質土		
25	H1・2	(円形)	(0.42) × (0.40) × 0.18	黒褐色土		SB2 主柱穴
26	H2	(円形)	(0.52) × (0.36) × 0.24	黒褐色土	石	
27	H2	(円形)	(0.50) × (0.40) × 0.38	黒色粘質土	石	
28	H1	円形	0.20 × 0.20 × 0.10	黒褐色土(明黄褐色土混)		
29	H2	円形	0.14 × 0.14 × 0.12	黒褐色土(明黄褐色土混)		
30	H2	円形	0.21 × 0.20 × 0.07	黒褐色土(明黄褐色土混)		
31	G2	不整円形	0.75 × 0.70 × 0.14	黒褐色土	土師・須恵	
32	G1	円形	0.22 × 0.20 × 0.08	黒色粘質土		
33	G1	円形	0.21 × 0.20 × 0.06	黒褐色土		
34	G2	(円形)	0.36 × (0.22) × 0.30	黒褐色土	土師	SB2 主柱穴
35	G1	円形	0.30 × 0.30 × 0.18	黒褐色土		
36	G2	楕円形	0.35 × 0.27 × 0.18	極暗褐色粘質土		
37	G2	楕円形	0.76 × 0.55 × 0.22	黒褐色土		
38	G1	楕円形	0.40 × 0.34 × 0.20	極暗褐色粘質土		
39	F1	不整楕円形	0.50 × 0.32 × 0.16	黒褐色土(明黄褐色土混)		SB1 主柱穴
40	F2	楕円形	0.40 × 0.30 × 0.12	暗褐色土		
41	F2	円形	0.52 × 0.49 × 0.20	黒褐色土(明黄褐色土混)	土師	SB1 主柱穴

表 11 SB1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	壺	口径 8.8 底径 1.0 器高 10.1	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に丸い。頸部はやや凹みをもち、底部は丸底である。ほぼ完形品。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ(7本/cm) ㊸ハケ→ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ナデ ㊸ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1~2) 石金 ◎		9
18	壺	口径 9.4 底径 1.0 器高 10.0	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味に丸い。底部は丸底。完形品。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ ㊸ナデ	㊶ヨコナデ ㊷ナデ ㊸ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(1) 石金 ◎	黒斑	9
19	壺	口径 14.4 残高 3.7	直口壺。口縁部は外反し、端部は丸い。1/4の残存。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		
20	高坏	口径 (15.8) 残高 6.3	口縁部は外反し、端部は丸い。坏下部に稜をもつ。1/4の残存。	ナデ (ミガキか?)	ミガキ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~3) ◎		
21	高坏	口径 (16.2) 残高 5.6	口縁部は外反し、端部は丸い。坏下部に不明瞭な稜をもつ。1/4の残存。	ナデ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1~2) ◎		
22	高坏	口径 15.8 残高 5.6	口縁部はやや外反し、端部は丸い。坏下部に段をもつ。坏部完形品。	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ◎	黒斑	9
23	高坏	口径 17.8 残高 5.9	口縁部はやや外反し、端部は丸い。坏下部に段をもつ。坏部完形品。	ハケ(10本/cm) →ナデ	ハケ(10本/cm) →ナデ	灰褐色 にぶい橙色	石・長(1) 石金 ◎		9
24	高坏	口径 17.2 残高 5.2	口縁部は外反し、端部は丸い。坏下部にわずかに段をもつ。坏部完形品。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎	黒斑	9
25	高坏	底径 11.7 残高 7.4	脚裾部は水平に開き、柱裾部内面には不明瞭な稜をもつ。1/2の残存。	ナデ	ハラケズリ →ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ◎		9

遺物観察表

表 12 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	壺	口径 14.6 残高 15.9	広口壺。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸い。頸部に凹みをもち、体部の器壁は薄い。1/3の残存。	㊶ヨコナデ ㊷ナデ ㊸ナデ	㊶ハケ→ナデ ㊷ヘラケズリ ㊸ナデ (指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1) 金◎		9
27	壺	口径 14.8 底径 1.6 器高 18.7	広口壺。口縁部はやや外反し、端部は丸い。底部は丸底。ほぼ完成品。	ナデ	㊶ナデ ㊷ヘラケズリ ㊸ナデ (指頭痕)	橙色 橙色	石・長 (1~5) 金◎		9

表 13 SK1 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
28	丸玉	完形	土製	1.72	1.70	1.60	5.029		10
29	勾玉	完形	滑石	3.00	1.60	0.32	0.582	径 1.5mm 大の孔	10
30	白玉	完形	滑石	0.50	0.50	0.26	0.089		10
31	白玉	完形	滑石	0.40	0.40	0.20	0.063		10

表 14 SB2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
32	甕	口径 (13.1) 残高 7.4	口縁部は外反し、端部は丸い。1/2の残存。	㊶ナデ ㊷ハケ→ナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長 (1) ◎	黒斑	
33	羽口	口径 6.7 残高 10.4	フイゴの羽口。断面円形。先端部に焼け焦げ痕あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1~5) ◎		10
34	坏身	残高 2.2	受部は短く上方外にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表 15 SB2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
35	紡錘車	完存	滑石	3.2	3.2	1.1	18.5		10

表 16 SD4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
36	坏蓋	口径 (23.1) 残高 2.0	口縁部は下方に垂下し、端部は尖る。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊶回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		10
37	坏蓋	口径 (11.8) 残高 2.0	かえりは口縁部より下がり、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
38	坏	口径 (15.2) 底径 (12.0) 器高 3.9	口縁部は外反し、端部は尖る。高台は「ハ」の字状に開き、体底部境界より内側に付く。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
39	坏	底径 (8.6) 残高 1.3	高台は内方に屈曲し、平坦面で接地する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
40	蓋	口径 (13.4) 残高 2.4	短頸壺の蓋。口縁部は内湾し、端部は尖る。1/4の残存。	㊸回転ヘラケズリ ㊶回転ナデ	回転ナデ	灰色 オリーブ灰色	密 ◎		10
41	壺	口径 (12.0) 残高 5.7	短頸壺。口縁部は短く直立し、端部は尖り気味に丸い。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
42	壺	口径 (10.4) 残高 3.5	短頸壺。口縁部は短く外反し、端部は丸い。小片。	㊶回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	自然釉	
43	壺	口径 (14.0) 残高 5.5	口縁部は外反し、端部は内方へわずかに肥厚する。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		10
44	平瓶	口径 (9.8) 残高 6.3	口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は尖り気味。1/4の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
45	甕	口径 (15.0) 残高 3.2	外反口縁。口縁端部は「コ」の字状に丸く仕上げる。小片。	㊶ナデ ㊷ハケ (4本/cm)	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~3) ◎		
46	坏	底径 (10.2) 残高 1.5	高台は磨減が著しく、三角形をなす。小片。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		10

桑原東稲葉遺跡 1 次調査

表 17 SD4 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
47	砥石	一部欠損	安山岩	20.5	14.5	11.2	6350.0	砥面：4 面	10

表 18 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
48	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.7	丸味のある天井部。口縁端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5	
49	坏蓋	口径 (12.3) 残高 2.2	口縁端部は丸く仕上げる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP6	
50	坏蓋	口径 (20.0) 残高 1.1	口縁部は下外方へ短く屈曲し、端部は丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP31	
51	坏	口径 (12.1) 底径 (6.6) 器高 3.3	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎	SP31	
52	坏	口径 (14.0) 残高 3.6	高台は欠損。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP31	
53	壺	口径 (13.0) 残高 3.1	直口壺。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸い。小片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	SP8	
54	坏	底径 (6.0) 残高 1.4	平底。1/4 の残存。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎	SP8	
55	支脚	底径 (11.0) 残高 5.0	脚端部は平坦面をなす。1/2 の残存。	ナデ (指頭痕)	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1) ◎	SP12	

表 19 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	坏身	口径 (10.2) 残高 2.9	受部は上外方へ短くのび、たちあがり端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	IV 層	
57	坏	底径 (10.4) 残高 1.6	高台は低く、接地面は凹みをもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	IV 層	
58	坏	底径 (9.8) 残高 1.9	高台は体底部境界付近に付き、やや「ハ」の字状に開く。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	IV 層	
59	皿	底径 (15.6) 残高 1.7	高台は比較的高く、直立する。1/5 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	IV 層	
60	坏蓋	つまみ径 (3.2) 残高 1.4	坏蓋のつまみ。中央部が突出する。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	IV 層	
61	甕	口径 (18.0) 残高 5.0	口縁部は外反し、口縁端部は内方へ肥厚する。1/5 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	IV 層	
62	高坏	口径 (18.0) 残高 5.9	体部は内湾し、口縁部はやや外反する。1/2 の残存。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	IV 層	
63	高坏	底径 (5.6) 残高 7.7	脚裾部はなだらかに下外方へ開き、裾端部は丸い。脚部完形品。	ナデ	ヘラケズリ →ナデ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎	IV 層	
64	坏	底径 (7.0) 残高 2.4	円盤高台状の底部。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。1/2 の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1~2) ◎	III 層	
65	皿	口径 (13.6) 残高 2.0	口縁部は外反し、端部は丸い。1/5 の残存。回転ヘラ切り痕あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長 (1) ◎	III 層	

表 20 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
66	石庖丁	1/3	結晶片岩	4.2	3.2	0.7	18.0	未成品	

第4章 桑原東稲葉遺跡2次調査

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2009（平成21）年7月14日、渡邊 萬蔵氏（以下、申請者という。）より松山市桑原二丁目969番、970番1地内における賃貸住宅建築に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地は、埋蔵文化財包蔵地の『No.157 桑原遺物包含地』に位置する。周辺では申請地北側に隣接して桑原東稲葉遺跡があり、古墳時代の集落関連遺構や遺物が検出されている。また、申請地南西部には桑原西稲葉遺跡1・2次調査地があり、弥生時代から中世までの遺構・遺物が確認されている（第30図）。

これらのことから、2009（平成21）年7月30日、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）は申請地内における埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果、柱穴のほか弥生土器や土師器、須恵器等を検出した。この結果を受け、申請者と文化財課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発により遺跡が破壊される箇所のみを対象とする発掘調査を実施することになった。なお、協議の段階で、契約者は河窪建設株式会社（代表取締役 河窪 秀明）となり、埋文センターとの間で委託契約を結び、発掘調査を行うことになった。

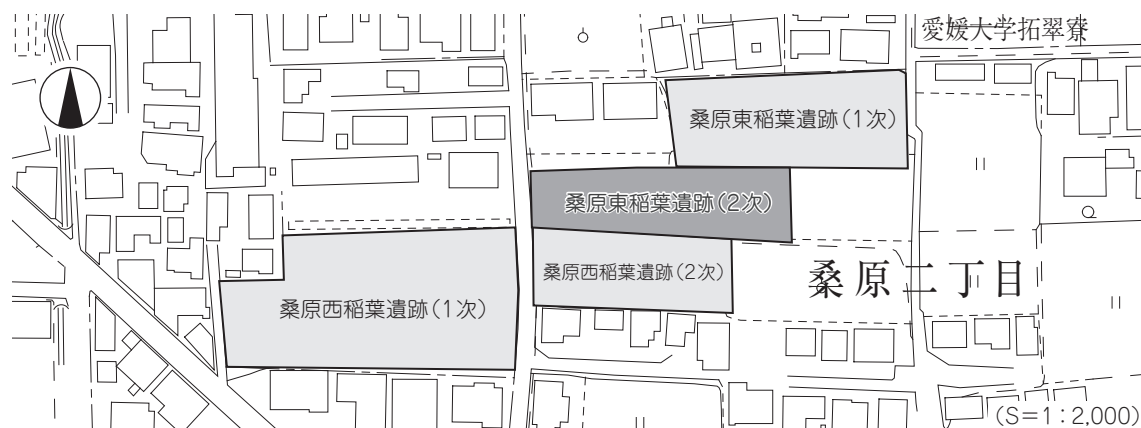
発掘調査は申請地内における古墳時代以降の集落様相解明を主目的とし、文化財課の協力のもと、埋文センターが主体となり2011（平成23）年4月22日より開始した。

2. 調査組織

所在地：松山市桑原二丁目969番、970番1の各一部

調査期間：2011（平成23）年4月22日～同年7月4日

調査面積：約619㎡



第30図 調査地周辺の遺跡分布図

契約者：河窪建設株式会社 代表取締役 河窪 秀明
 調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
 調査担当：埋蔵文化財センター主任 水本 完児

第2節 層位

調査地は松山平野南東部、石手川左岸の沖積扇状地上の標高 39.0～39.6 m に立地する。調査地は、調査以前には水田として利用されていた。調査地の基本層位は、以下の 7 層である（第 32～34 図）。なお、調査の都合上、調査地東側を 1 区、西側を 2 区として調査を進めた（第 31 図）。

第Ⅰ層：造成土で 2 区にみられ、層厚 12～26cm である。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う耕土で、2 層に分層される。

第Ⅱ①層－褐灰色土（10YR 5/1）で 1・2 区にみられ、層厚 2～40cm である。

第Ⅱ②層－褐灰色土（10YR 6/1）で 1・2 区にみられ、層厚 2～12cm である。

第Ⅲ層：橙色土（7.5YR 6/8）で 1・2 区にみられ、層厚 1～7cm である。

第Ⅳ層：土色の違いにより、2 層に分層される。

第Ⅳ①層－ぶい黄橙色土（10YR 7/4）で 1・2 区にみられ、層厚 2～17cm である。調査壁の土層観察により、本層上面にて柱穴を確認した。

第Ⅳ②層－ぶい黄橙色土（10YR 7/4）に暗褐色土（7.5YR 3/3）が混入するもので、1・2 区にみられ、層厚 2～18cm である。

第Ⅴ層：灰黄褐色土（10YR 5/2）で 1・2 区にみられ、層厚 2～30cm である。本層中からは、土師器片や須恵器片が出土した。

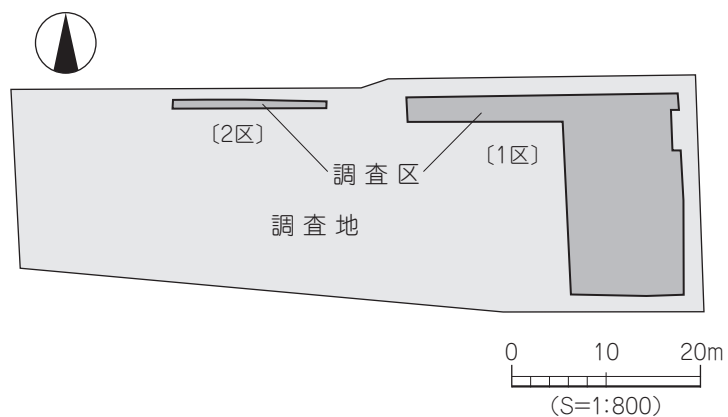
第Ⅵ層：暗褐色土（7.5YR 3/3）で、1・2 区にみられ、層厚 2～18cm である。調査壁の土層観察により、本層上面にて柱穴を確認した。本層中からは、土師器片や須恵器片が少量出土した。

第Ⅶ層：土色・土質の違いにより、2 層に分層される。なお、本層上面は調査における最終遺構検出面である。

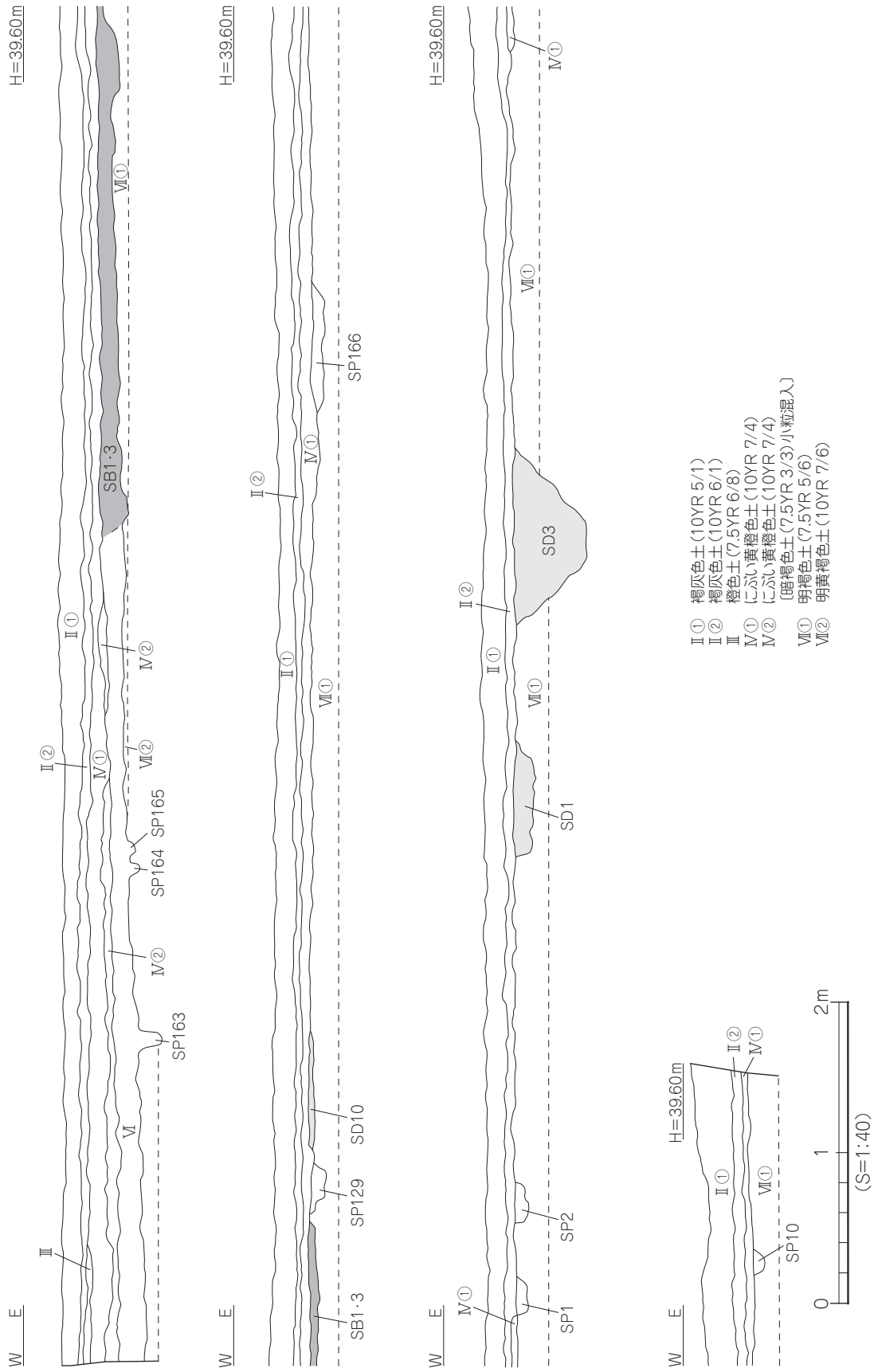
第Ⅶ①層－明褐色土（7.5YR 5/6）で、1 区にみられる。

第Ⅶ②層－明黄褐色土（10YR 7/6）で、1 区北西部と 2 区にみられる。

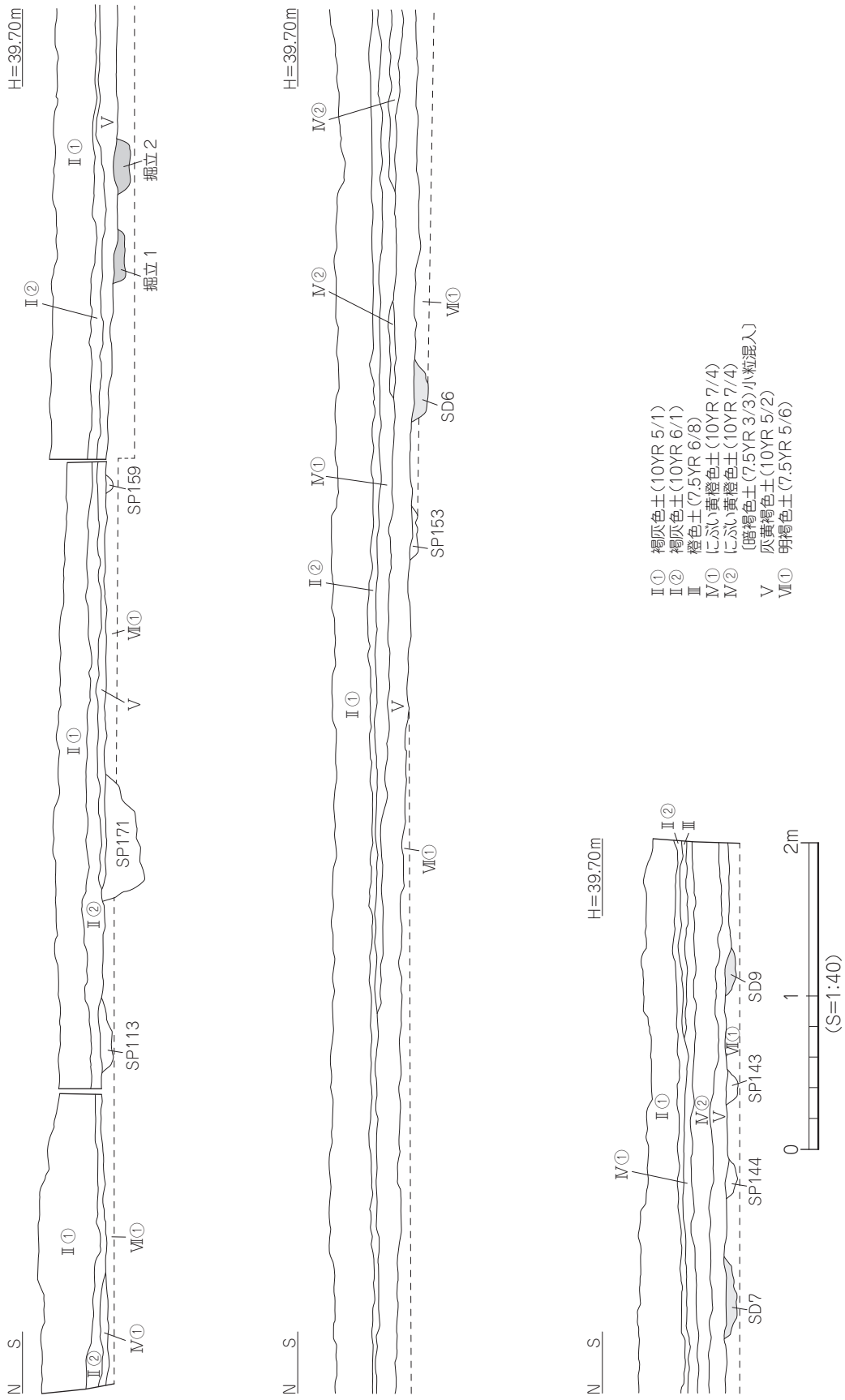
検出遺構や出土遺物より、第Ⅵ層は古墳時代、第Ⅴ層は古代までに堆積したものと考えられる。なお、調査にあたり調査地内を 10 m 四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へ A・B・C、西から東へ 1・2・3…7 とし、A1・A2・B1…C7 といったグリッド名を付した。グリッドは遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



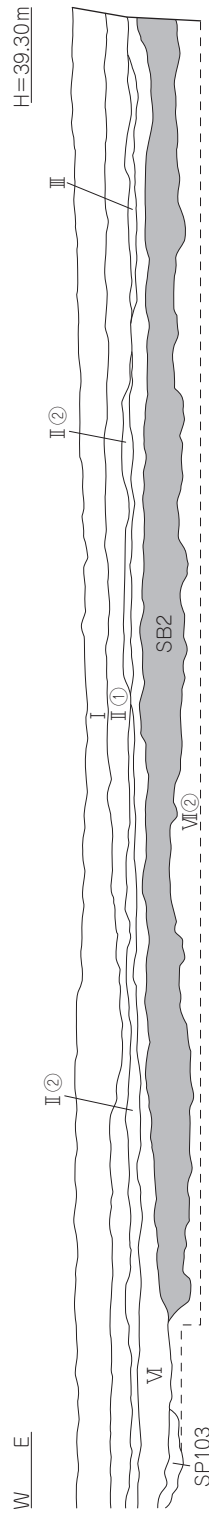
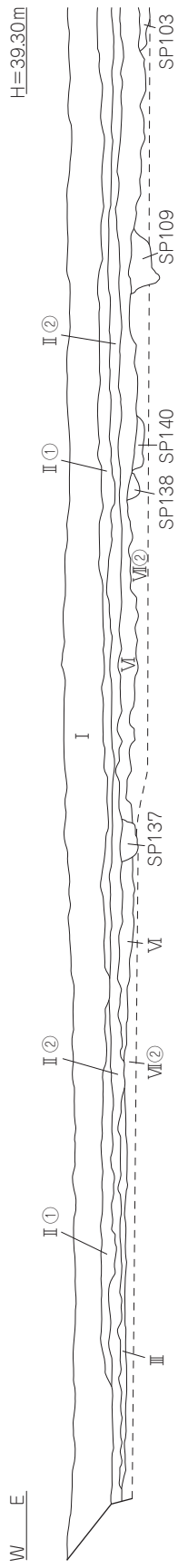
第 31 図 調査地測量図



第32図 1区北壁土層図



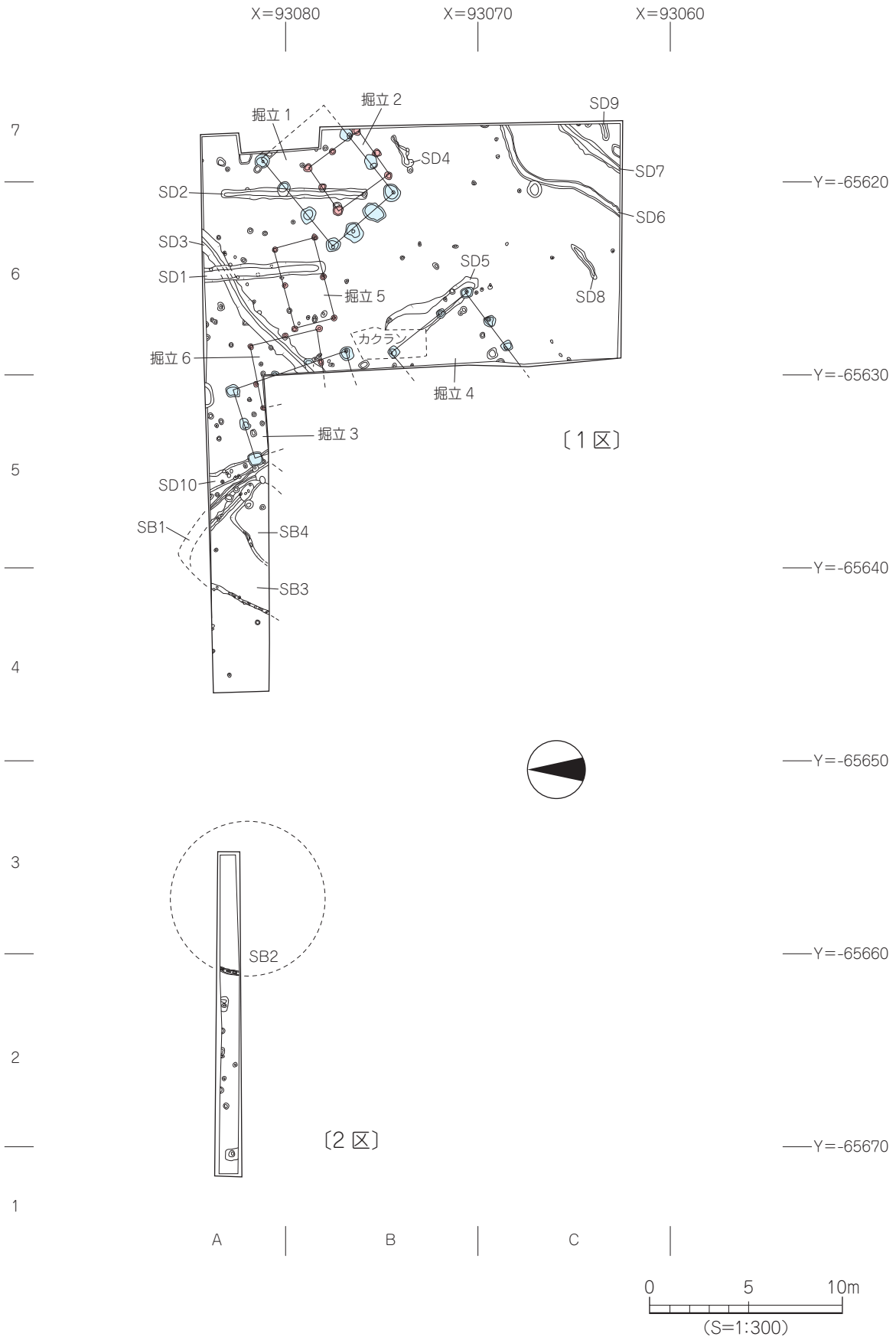
第 33 図 1 区東壁土層図



- I 造成土
- II(1) 褐色土(10YR 5/1)
- II(2) 褐色土(10YR 6/1)
- III 橙色土(7.5YR 6/8)
- V 暗褐色土(7.5YR 3/3)
- VII(2) 明黄褐色土(10YR 7/6)

第 34 图 2区北壁土层图

桑原東稲葉遺跡 2次調査



第 35 図 遺構配置図

第3節 遺構と遺物

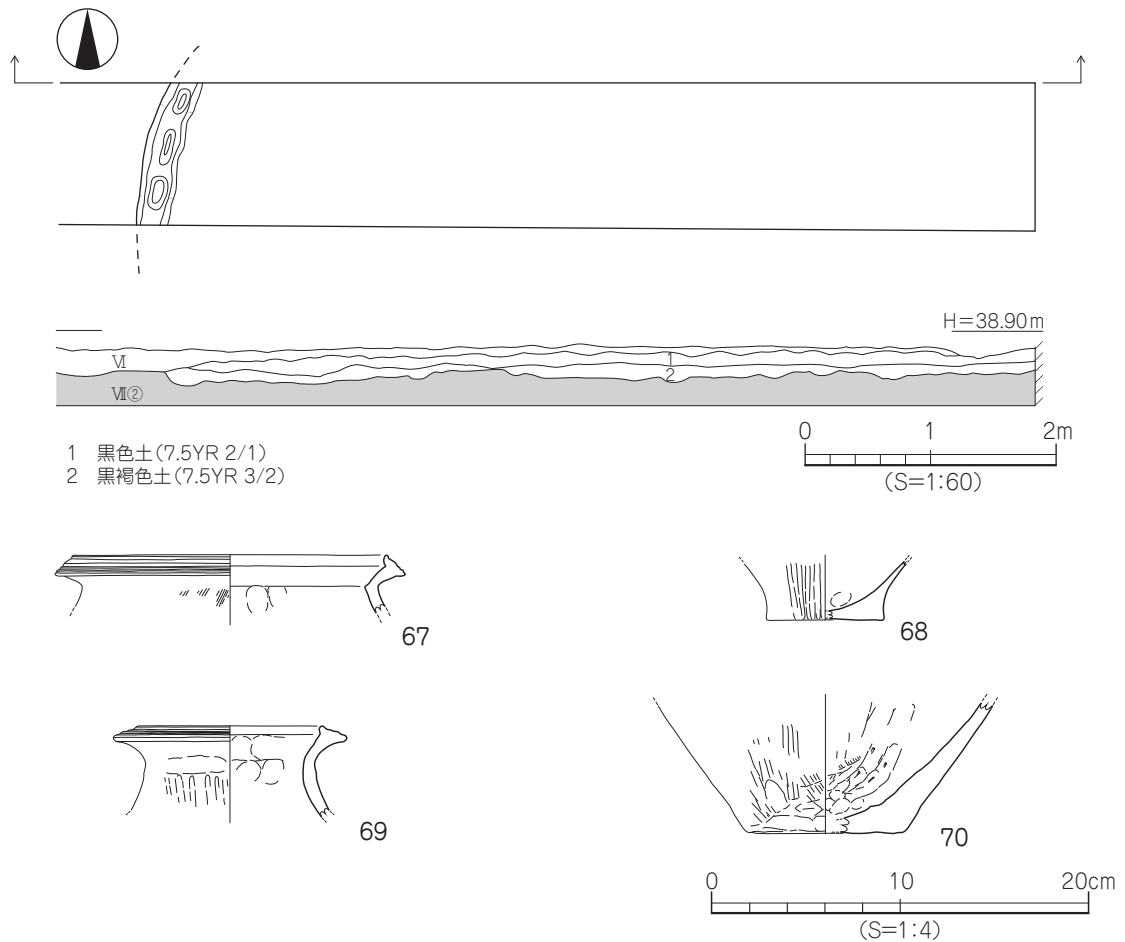
調査では竪穴建物4棟、掘立柱建物6棟、溝10条、柱穴167基（掘立柱建物柱穴40基を含む）を検出した（第35図）。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、石器、鉄器が出土した。遺物の出土量は、収納用箱（22×44×66cm）8箱分である。

1. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴建物1棟を検出した。

S B 2（第36図、図版12）

2区東側A2・3区に位置する建物で、建物上面は第VI層が覆う。平面形態は円形をなすものと思われ、規模は東西検出長5.65m、南北検出長1.0m、壁高は25cmである。建物埋土は2種類あり、上層は黒色土（7.5YR 2/1）、下層は黒褐色土（7.5YR 3/2）である。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝は建物西側で検出され、検出長0.93m、幅15～35cm、深さ18cmである。溝内からは、径5～15cm、深さ3～11cm大の小ピットを検出した。遺物は埋土中より弥生土器片が少量出土したが、図化しうる遺物4点を掲載した。



第36図 S B 2測量図・出土遺物実測図

SB2 出土遺物 (図版 16)

67～70 は弥生土器。67・68 は甕形土器で、67 は口縁端部を上方に拡張させ、口縁端面に凹線文 4 条を施す。68 は中央部が凹む底部で、外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。69・70 は壺形土器。69 は広口壺で、口縁端部を上方に拡張させ、口縁端面に凹線文 3 条を施す。70 は平底の底部片で、内外面には指頭痕が顕著に残る。

時期：出土遺物の特徴より、SB2 の廃棄・埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴建物 3 棟、溝 8 条を検出した。

(1) 竪穴建物

竪穴建物は、1 区にて 3 棟 (SB1・3・4) を検出した。このうち、SB4 は建物北側壁体沿いにカマドと思われる焼土塊を検出したが、焼土西半部は鋭角的に削平されており、検出状況から SB3 の構築に伴いカマドの一部が削平されたものと判断した。よって、建物構築時期は SB4 が SB3 に先行することになる。また、SB1 と SB3 の建物壁体は、建物西側では一箇所ではしか検出されなかったことから、両者は建て替えが施されたものと考えられた。なお、発掘調査時には、これら 3 棟の建物を 1 棟の建物として掘り下げを行ったため、遺物は一括して取り上げた。以上のことから、3 棟の廃棄・埋没時期については出土遺物が僅少であり断定することは難しいが、SB1 として取り上げた遺物の時期が古墳時代後期後半、6 世紀後半の特徴を示すことから、SB1・3 の廃棄・埋没時期は 6 世紀後半、それらに先行する SB4 は概ね 6 世紀後半以前と考えられる。

SB1 (第 37 図、図版 12)

1 区北西部 A4・5 区に位置する竪穴建物で、遺構検出時には建物上面にて 2 基の柱穴 (SP169・170) を検出した。調査壁の土層観察により、建物上面は第 IV ②層が覆う。平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 3.8 m、東西長 6.0 m、壁高は 2～10cm である。建物埋土は、暗褐色土 (10YR 3/3) 単層である。内部施設は、周壁溝を検出した。規模は幅 8～26cm、深さ 10cm である。なお、周壁溝埋土は建物埋土と同様の暗褐色土 (10YR 3/3) である。遺物は埋土中より、土師器や須恵器の小片が少量出土した。なお、SB1 と SB3 は建て替えが施された建物であるが、先後関係は不明である。

出土遺物 (第 37 図、図版 16)

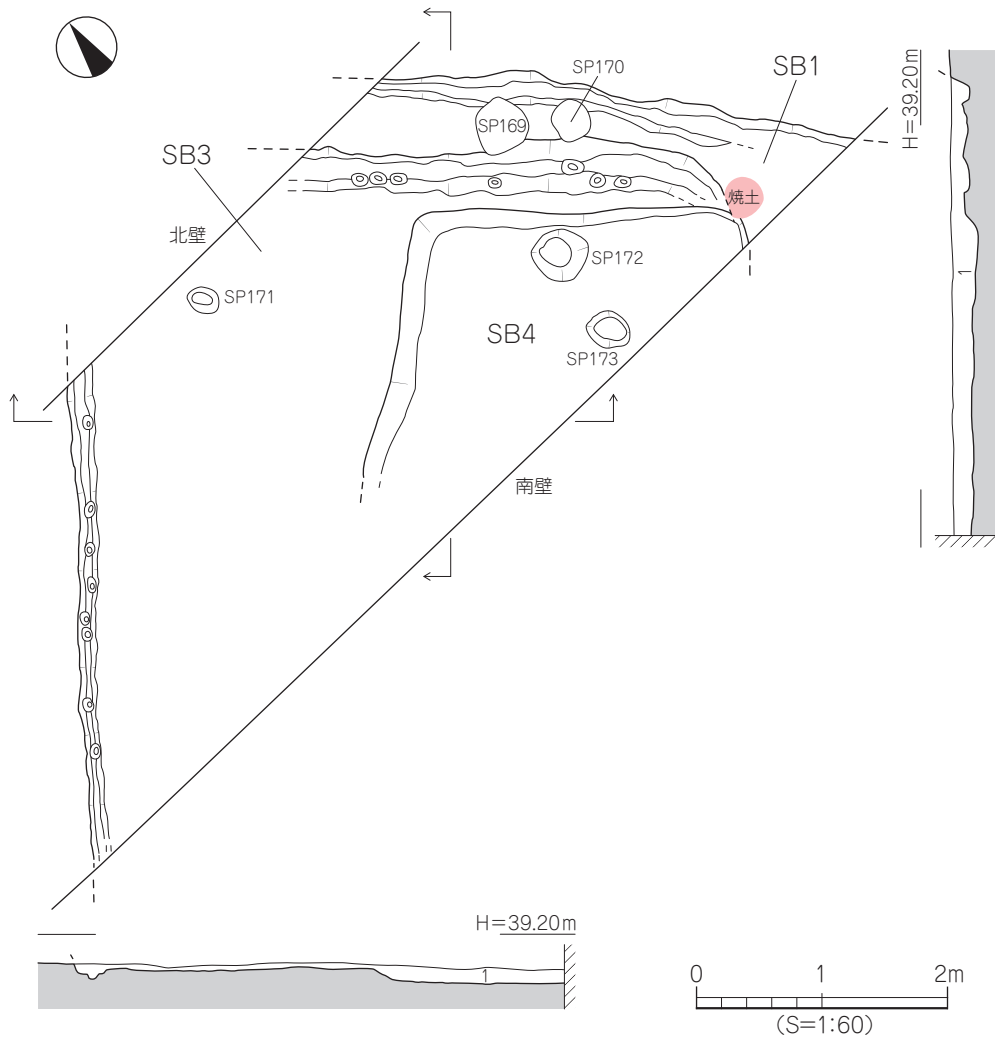
71 は須恵器高坏の脚部片で、中空である。72 は特殊扁壺で、凹線 2 条が二重に巡り、凹線間に刺突文を施す。

時期：出土遺物の特徴より、SB1 の廃棄・埋没時期は 6 世紀後半と考えられる。

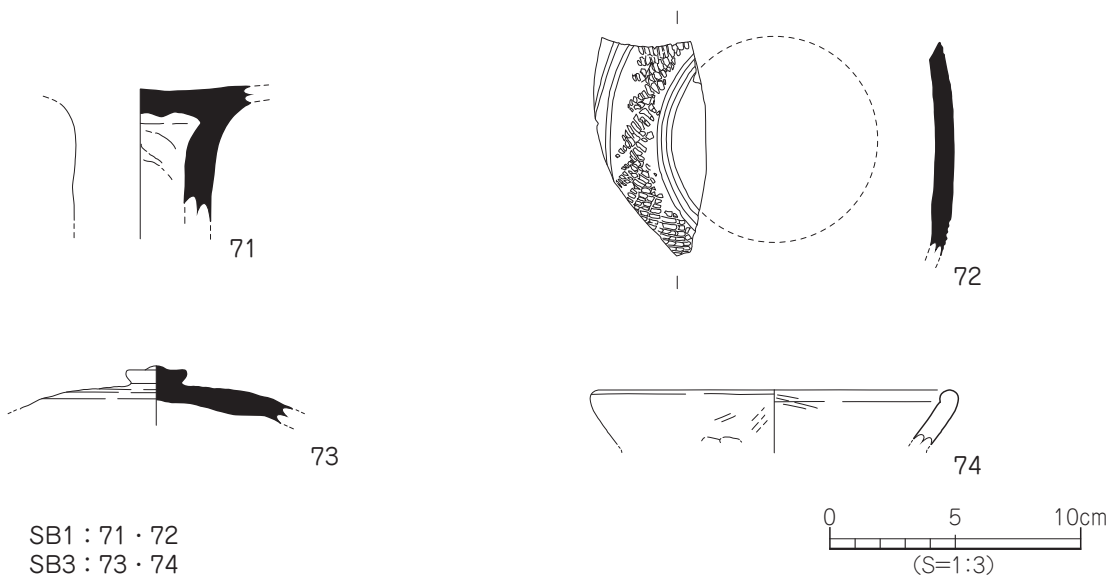
SB3 (第 37 図、図版 12)

1 区北西部 A4・5 区に位置する竪穴建物で、平面形態は方形をなすものと思われ、規模は南北検出長 3.7 m、東西長 5.5 m、壁高は 4cm である。建物埋土は、SB1 と同様の暗褐色土 (10YR 3/3) 単層である。内部施設は、周壁溝を検出した。周壁溝は建物東側で検出され、幅 15～30cm、深さ 5cm で、溝内には径 6～15cm、深さ 3～8cm 大の小ピットが点在している。周壁溝埋土は、建物埋土と同様の

遺構と遺物



1 暗褐色土(10YR 3/3)



SB1 : 71・72
SB3 : 73・74

第37図 SB1・3・4測量図・出土遺物実測図

暗褐色土 (10YR 3/3) である。また、建物床面にて柱穴 1 基 (SP171) を検出した。規模は径 21cm、深さ 9cm であり、埋土は暗褐色土 (10YR 3/3) である。

出土遺物 (第 37 図)

73 は須恵器有蓋高坏の蓋で、つまみ部分は完存しており、天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。74 は土師器の甕。小片で口縁部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。

時期：出土遺物の特徴より、SB3 の廃棄・埋没時期は古墳時代後期後半、6 世紀後半と考えられる。

S B 4 (第 37 図、図版 12)

1 区北西部 A5 区に位置する竪穴建物で、北東コーナー部には焼土塊 (東西長 37cm、南北長 26cm、厚さ 8cm) が認められ、カマドの一部と考えられる。なお、焼土西側は SB3 により削平されており、SB4 が SB3 に先行する。平面形態は長方形をなすものと思われ、規模は東西検出長 4.2 m、南北検出長 1.9 m、壁高は 10cm である。建物埋土は、暗褐色土 (10YR 3/3) 単層である。床面にて、2 基の柱穴 (SP172・173) を検出した。柱穴規模は径 30 ~ 43cm、深さ 21 ~ 25cm である。柱穴掘り方埋土は、暗褐色土 (10YR 3/3) である。

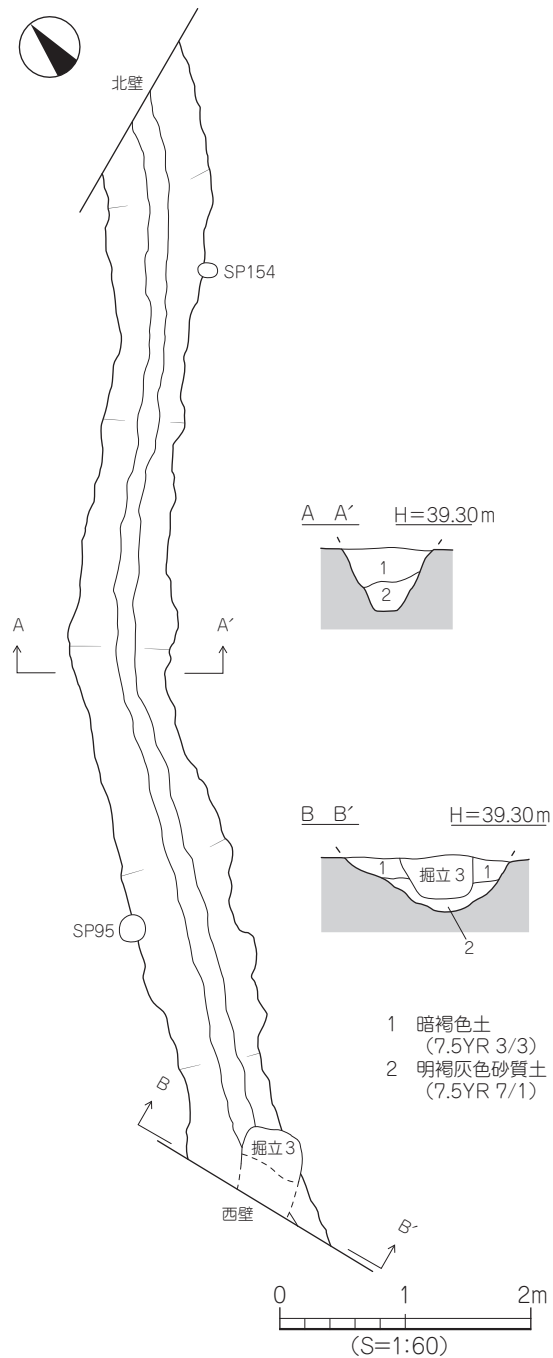
時期：SB3 に先行することから、SB4 の廃棄・埋没時期は 6 世紀後半以前とする。

(2) 溝

1 区にて、8 条の溝を検出した。このうち、SD3 からは完形品を含む古墳時代後期後半、6 世紀後半に時期比定される遺物が比較的多く出土した。SD3 を除く 7 条の溝 (SD4 ~ 10) からは少量の土師器片や須恵器片が出土したが、時期特定しうる遺物はない。ただし、SD3 と他の溝の埋土が酷似することから、7 条の溝は、概ね古墳時代後期、6 世紀代の溝と考えられる。

S D 3 (第 38 図、図版 13)

1 区北側 A6 ~ B6 区で検出した北東 - 南西方向の溝で、溝南側は掘立 3 柱穴、北側は溝 SD1 に一部削平されている。調査壁の土層観察により、溝上面は第 IV ①層が覆う。規模は検出長 8.6 m、幅 0.6 ~ 0.8 m、深さは最深部で 52cm である。断面形態は舟底状をなし、埋土は 2 種類に分層される。上層は



第 38 図 S D 3 測量図

暗褐色土 (7.5YR 3/3)、下層は明褐色灰色砂質土 (7.5YR 7/1) である。溝基底面は北東から南西に向けて傾斜をなし、比高差 10cm である。遺物は埋土中より、完形品を含む須恵器や土師器のほか石器が出土した。

出土遺物 (第 39 図、図版 16)

75 は瓦質の坏蓋で、推定口径 14cm である。天井部と口縁部の境界には凹線状の凹みが巡り、口縁端部は丸く仕上げる。76 は完形の須恵器坏身で、たちあがり径 12.7cm、器高 4.3cm である。たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部は水平にのび、受部端に沈線状の凹みが巡る。77 は灰白色の須恵器高坏で、脚裾部は下外方へ屈曲し、脚端面には沈線状の凹みが巡る。78 は土師器の甕。内湾口縁で、口縁中位は膨らみを持ち、口頸部内面にはヘラケズリによる明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴より古墳時代後期後半、6 世紀後半と考えられる。

SD 4 (第 40 図)

1 区中央部東寄り B7 区で検出した北東-南西方向の短い溝で、2 基の柱穴 (SP62・136) に一部削平されている。調査壁の土層観察により、溝上面は第Ⅲ層が覆う。規模は検出長 1.88 m、幅 12~54 cm、深さ 4cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は難しいが、埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

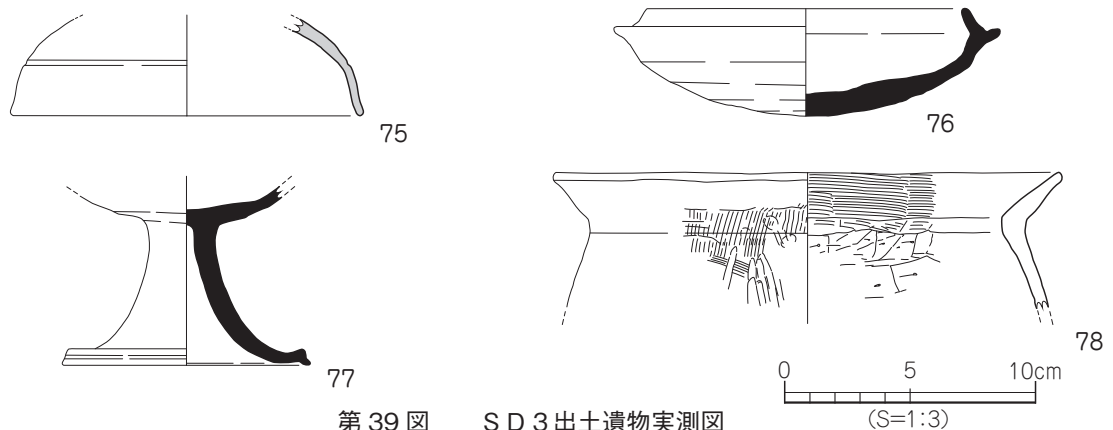
SD 5 (第 40 図)

1 区中央部 B・C6 区で検出した北西-南東方向の溝で、北西端は近現代坑に削平され、南東部は掘立 4 柱穴に一部削平されている。溝上面は、第Ⅲ層が覆う。規模は検出長 5.5 m、幅 74~154cm、深さ 2~6cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝からは、遺物の出土はない。

時期：埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

SD 6 (第 40 図)

1 区南東部 C6・7 区で検出した北東-南西方向の溝で、溝上面は第Ⅴ層が覆う。規模は検出長 8.0 m、



第 39 図

SD 3 出土遺物実測図

(S=1:3)

幅 24～44cm、深さ 3～12cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。遺物は埋土中より少量の土師器や須恵器の小片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：第 V 層が溝を覆うことや埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

SD 7 (第 40 図)

1 区南東部 C7 区で検出した北東-南西方向の溝で、溝上面は第 V 層が覆う。規模は検出長 3.7 m、幅 32～74cm、深さ 4～9cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：第 V 層が溝を覆うことや埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

SD 8 (第 40 図)

1 区南東部 C6 区で検出した北東-南西方向の短い溝で、溝上面は第 V 層が覆う。規模は検出長 2.14 m、幅 20～36cm、深さ 2～6cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝内からは、遺物の出土はない。

時期：第 V 層が溝を覆うことや埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

SD 9 (第 40 図)

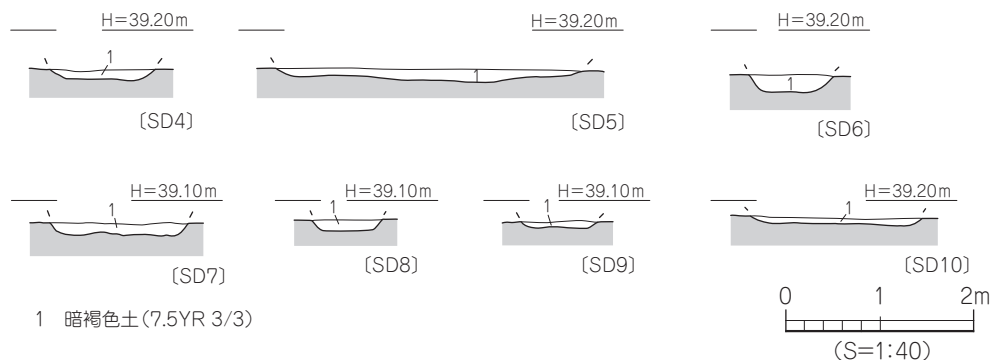
1 区南東隅 C7 区で検出した東西方向の溝で、溝上面は第 V 層が覆う。規模は検出長 0.82 m、幅 32～38cm、深さ 2～3cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：第 V 層が溝を覆うことや、埋土が SD3 などと酷似することなどから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。

SD 10 (第 40 図)

1 区北西部 A5 区で検出した北西-南東方向の溝で、溝南側は掘立 3 柱穴に一部削平され、溝上面は第 IV ①層が覆う。規模は検出長 3.3 m、幅 62～90cm、深さ 2～4cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は暗褐色土 (7.5YR 3/3) 単層である。溝内から、遺物の出土はない。

時期：埋土が SD3 と酷似することから、概ね 6 世紀代の溝と考えられる。



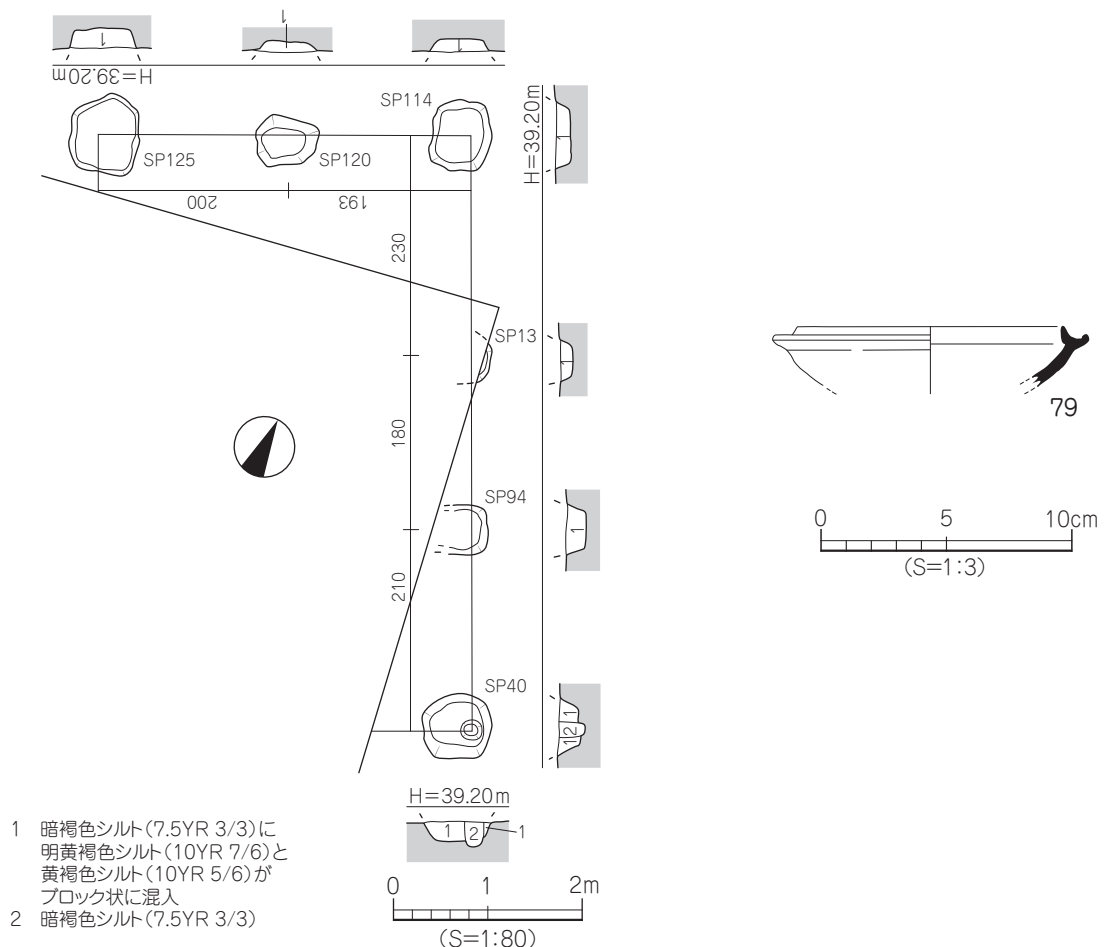
第 40 図 SD 4～10 断面図

3. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、掘立柱建物6棟を検出した。このうち、掘立3からは飛鳥時代前半、掘立6からは奈良時代前半に時期比定される土器片が出土した。これら以外の建物址からは弥生土器や土師器、須恵器の細片が数点出土したのみであり、時期特定は困難である。ただし、建物を構成する柱穴の規模や埋土から判断すると、掘立1・4の柱穴埋土は掘立3柱穴と酷似しており、さらに掘立2と5の柱穴埋土は掘立6と酷似することから、掘立1・3・4は飛鳥時代（7世紀代）、掘立2・5・6は奈良時代（8世紀代）の建物址と考えられる。

掘立3（第41図、図版14）

1区中央部A5～B6区に位置する建物址で、建物柱穴SP94はSD3、SP125はSD10と2基の柱穴（SP72・156）を一部削平している。調査壁の土層観察により、建物上面は第IV①層が覆う。南北3間、東西2間以上の東西棟で、6基の柱穴（SP13・40・94・114・120・125）を検出した。建物規模は東西検出長3.8m、南北長6.22m、柱穴間隔は1.72～2.4mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、掘り方規模は径20～76cm、深さ5～28cmである。掘り方埋土は、暗褐色シルト（7.5YR 3/3）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）と黄褐色シルト（10YR 5/6）がブロック状に混入するものである。柱痕はSP40で検出され、柱痕径19cm、深さ28cmである。柱痕埋土は、暗褐色シルト（7.5YR 3/3）



第41図 掘立3測量図・出土遺物実測図

単層である。遺物は4基の柱穴（SP13・114・120・125）の掘り方埋土中より、少量の土師器片や須恵器片のほか石器が出土した。

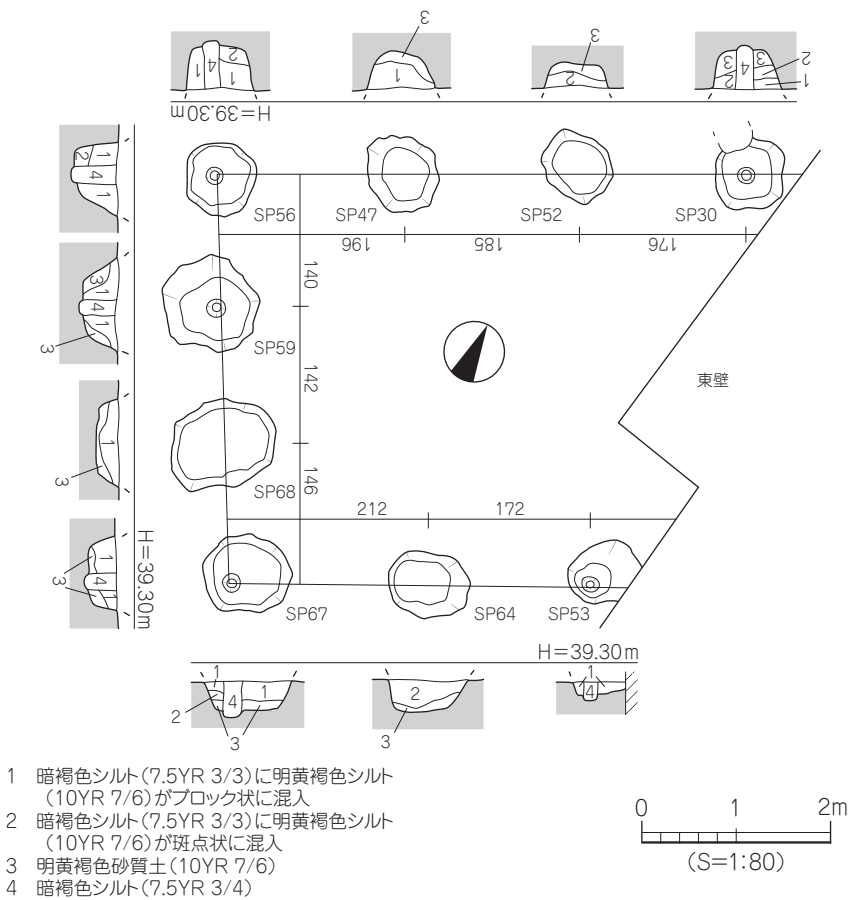
出土遺物

79は須恵器坏身片で、たちあがり径は10.5cmである。たちあがり短く内傾し、たちあがり端部は丸く仕上げ、受部は上方にひねり出されている。

時期：出土遺物の特徴より飛鳥時代前半、7世紀前半の建物と考えられる。

掘立1（第42図、図版13・15）

1区北東部A6～B7区に位置する建物址で、調査壁の土層観察により建物上面は第V層が覆う。南北3間、東西3間以上の東西棟で、9基の柱穴（SP30・47・52・53・56・59・64・67・68）を検出した。建物規模は東西検出長5.6m、南北長4.39m、柱穴間隔は1.46～2.00mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、掘り方規模は径60～98cm、深さ13～50cmである。掘り方埋土は3種類あり、1層暗褐色シルト（7.5YR 3/3）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）がブロック状に混入、2層暗褐色シルト（7.5YR 3/3）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）が斑点状に混入、3層明黄褐色砂質土（10YR 7/6）である。柱痕は5基の柱穴（SP30・53・56・59・67）で検出され、柱痕径15～28cm、深さ18～55cmである。柱痕埋土は掘り方埋土より色調のやや明るい暗褐色シルト（7.5YR 3/4）である。遺物は3基の柱穴（SP30・47・56）の掘り方埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。



第42図 掘立1測量図

時期：時期特定しうる遺物の出土はないが、柱穴埋土が掘立3と類似することなどから、概ね7世紀代の建物と考えられる。

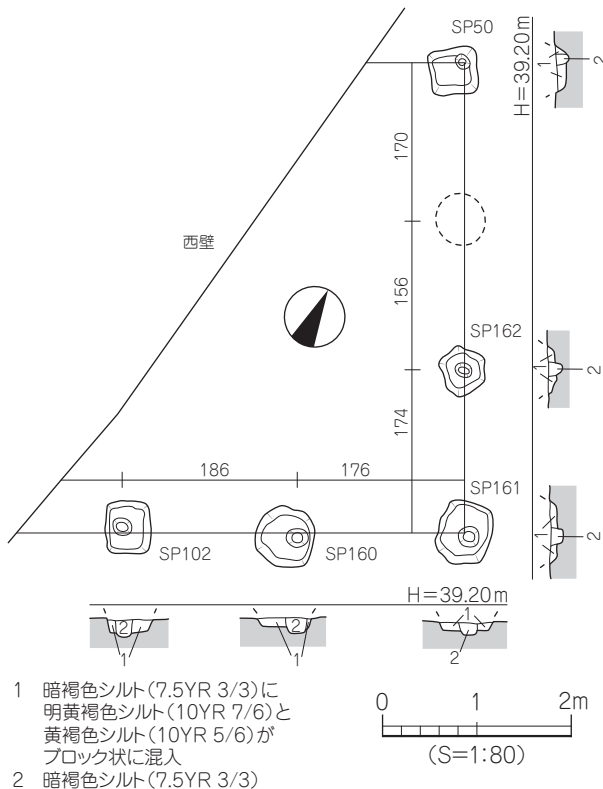
掘立4（第43図、図版14）

1区中央部B・C6区に位置する建物址で、溝SD5より後出する。調査壁の土層観察により、建物上面は第IV①層が覆う。南北3間、東西2間以上の南北棟で、5基の柱穴（SP50・102・160・161・162）を検出した。建物規模は東西検出長3.48m、南北長5.00m、柱穴間隔は1.56～1.86mである。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、掘り方規模は径46～62cm、深さ7～15cmである。掘り方埋土は暗褐色シルト（7.5YR 3/3）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）がブロック状に混入するものである。柱痕はすべての柱穴で検出され、柱痕径13～25cm、深さ13～18cmである。柱痕埋土は、暗褐色シルト（7.5YR 3/3）である。遺物は2基の柱穴（SP160・162）の掘り方埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

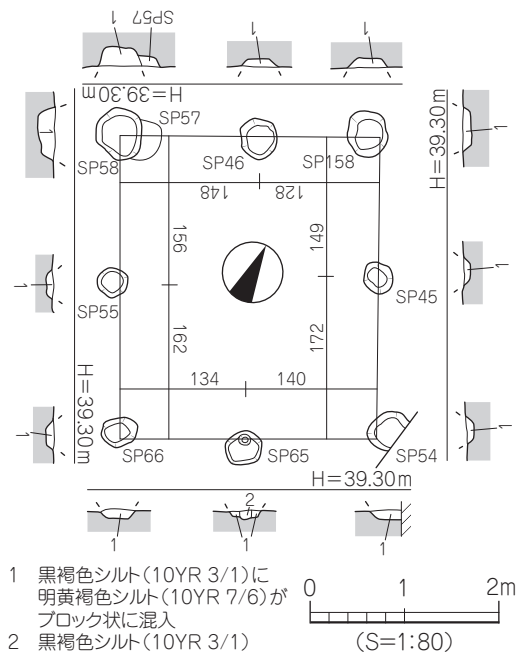
時期：柱穴埋土や建物方位等が掘立1と類似することなどから、概ね7世紀代の建物と考えられる。

掘立2（第44図、図版13）

1区北東部B6・7区に位置する建物址で、調査壁の土層観察により建物上面は第V層が覆う。南北2間、東西2間の南北棟で、8基の柱穴（SP45・46・54・55・58・65・66・158）で構成される。建物規模は東西長2.60m、南北長3.20m、柱穴間隔は1.10～1.65mである。各柱の平面形態は円形または楕円形をなし、掘り方規模は径28～48cm、深さ3～20cmである。掘り方埋土は黒褐色シルト（10YR



第43図 掘立4測量図



第44図 掘立2測量図

3/1) に明黄褐色シルト (10YR 7/6) がブロック状に混入するものである。柱痕は SP65 で検出され、柱痕径 12cm である。柱痕埋土は、黒褐色シルト (10YR 3/1) である。遺物は SP58 の掘り方埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：柱穴埋土が掘立 3 と酷似することなどから、概ね 8 世紀代の建物と考えられる。

掘立 6 (第 45 図)

1 区中央部北寄り A5 ~ B6 区に位置する建物址で、調査壁の土層観察により建物上面は第 IV①層が覆う。南北 2 間、東西 2 間以上の南北棟で、6 基の柱穴 (SP7・22・36・115・118・151) を検出した。建物規模は東西検出長 3.30 m、南北長 3.62 m、柱穴間隔は 1.30 ~ 1.84 m である。各柱穴の平面形態は円形または楕円形をなし、掘り方規模は径 18 ~ 34cm、深さ 7 ~ 34cm である。掘り方埋土は黒褐色シルト (10YR 3/1) に明黄褐色シルト (10YR 7/6) がブロック状に混入するものである。柱痕は、検出されなかった。遺物は 4 基の柱穴 (SP7・22・36・115) の掘り方埋土中より、少量の土師器片と須恵器片が出土した。

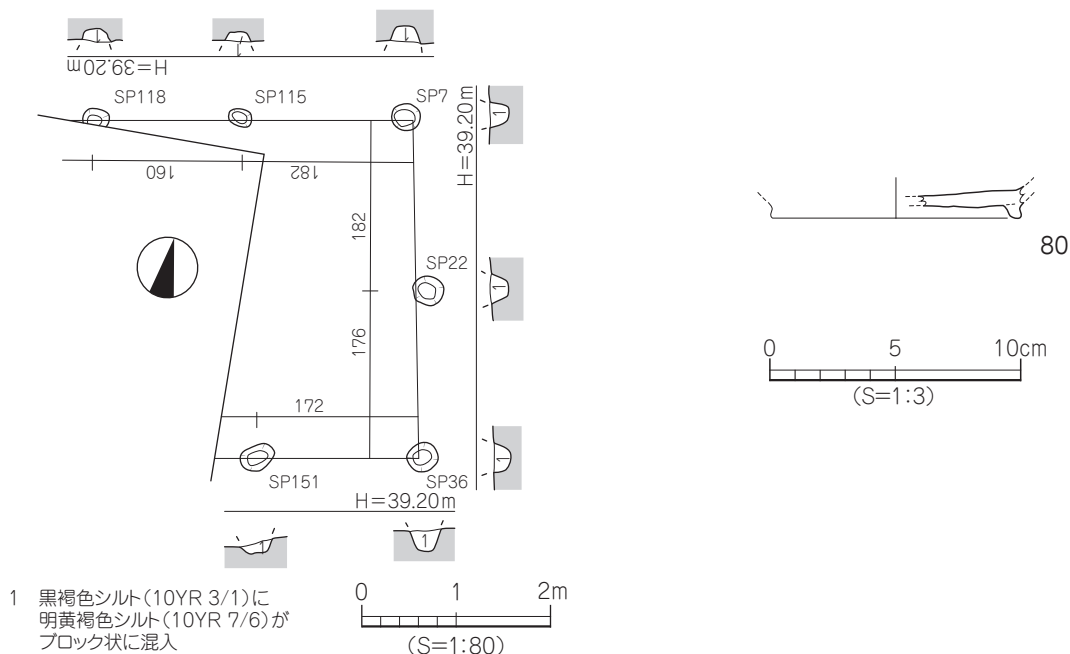
出土遺物

80 は SP36 出土の土師器坏で、「ハ」の字状に開く高台が付く。底部外面には回転ヘラケズリが施され、器表面には赤色塗彩が施されている。

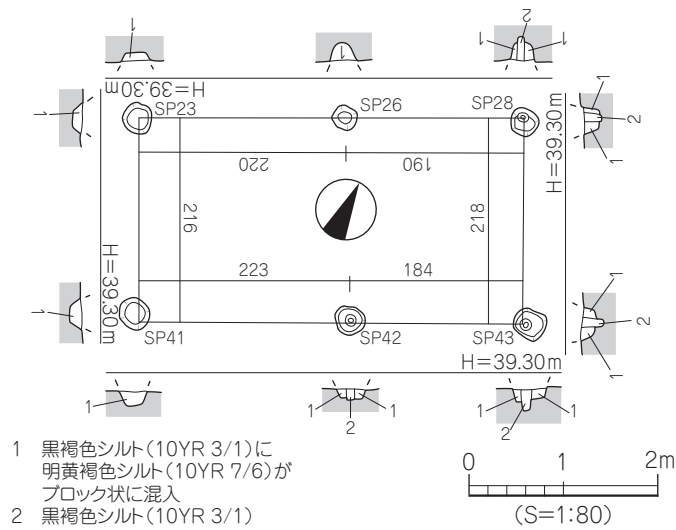
時期：出土遺物の特徴より奈良時代前半、8 世紀前半の建物と考えられる。

掘立 5 (第 46 図、図版 14・15)

1 区中央部北寄り A・B6 区に位置する建物址で、調査壁の土層観察により建物上面は第 IV①層が覆う。東西 2 間、南北 1 間の東西棟で、6 基の柱穴 (SP23・26・28・41・42・43) で構成される。建物規模は東西長 4.09 m、南北長 2.16 m、柱穴間隔は 1.86 ~ 2.22 m である。各柱の平面形態は円形



第 45 図 掘立 6 測量図・出土遺物実測図



第 46 図 掘立 5 測量図

をなし、掘り方規模は径 26 ～ 32cm、深さ 10 ～ 23cmである。掘り方埋土は、黒褐色シルト（10YR 3/1）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）がブロック状に混入するものである。柱痕は 3 基の柱穴（SP28・42・43）で検出され、柱痕径 10 ～ 13cm、深さ 14 ～ 25cmである。柱痕埋土は、黒褐色シルト（10YR 3/1）である。遺物は 2 基の柱穴（SP26・42）の掘り方埋土中より少量の土師器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：柱穴埋土や建物方位が掘立 6 と酷似することから、概ね 8 世紀代の建物と考えられる。

4. 近世の遺構と遺物

近世の遺構は、溝 2 条を検出した。

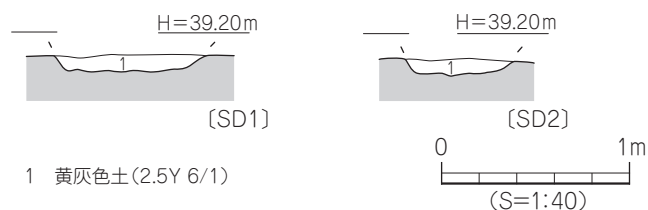
S D 1（第 47 図）

1 区北側 A・B6 区で検出した南北方向の溝で、溝北側は調査区外へ続く。調査壁の土層観察により、溝上面は第Ⅱ②層が覆う。規模は検出長 6.3 m、幅 58 ～ 80cm、深さ 4 ～ 11cmである。断面形態は皿状をなし、埋土は黄灰色土（2.5Y 6/1）単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片や陶磁器片が出土したが、図化しうるものはない。

時期：検出層位や出土遺物より、近世の溝と考えられる。

S D 2（第 47 図）

1 区北東部 A・B6 区で検出した南北方向の溝で、溝上面は第Ⅱ②層が覆う。規模は検出長 7.50 m、



第 47 図 S D 1・2 断面図

幅 36 ～ 58cm、深さ 2 ～ 8cm である。断面形態は皿状をなし、埋土は黄灰色土 (2.5Y 6/1) 単層である。遺物は埋土中より少量の土師器片や陶磁器片が出土したが、凶化しうるものはない。

時期：検出層位や出土遺物より、近世の溝と考えられる。

5. その他の遺構と遺物

調査では、掘立柱建物柱穴 40 基を含む 167 基の柱穴を検出した。このほか、第 V 層中からは古墳時代から古代の遺物が出土した。

(1) 柱 穴

調査で検出した 167 基の柱穴のうち、掘立柱建物柱穴 40 基を除く 127 基の柱穴は、掘り方埋土で分類すると以下の 3 種類となる。

A 類 - 暗褐色土 (7/5YR 3/3) : 53 基

[SP1・2・10・12・16・24・25・29・33・35・48・49・57・63・71・73 ～ 75・88・91・95・100・103・107・109 ～ 112・126 ～ 135・137・138・140・141・154・156・163・167 ～ 174]

B 類 - 暗褐色土 (7.5YR 3/3) に明黄褐色土 (10YR 7/6) がブロック状に混入 : 69 基

[SP3 ～ 6・8・9・11・14・15・17 ～ 21・27・31・32・34・37・38・44・51・61・62・70・72・76 ～ 87・89・90・92・93・96 ～ 99・101・104 ～ 108・116・117・119・121・122・124・136・148・150・152・153・157・159・164・165・166・175]

C 類 - 灰褐色土 (7.5YR 5/2) : 5 基

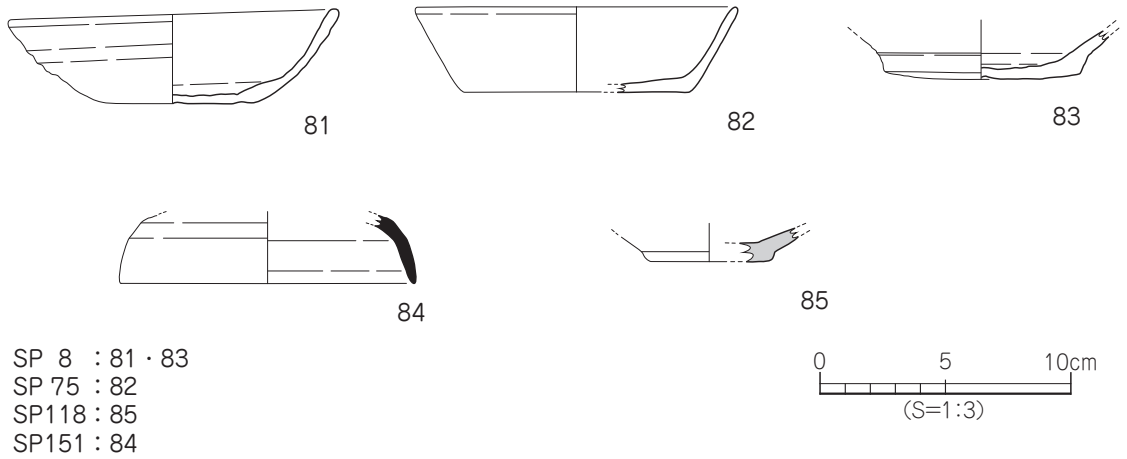
[SP39・113・143・144・155]

出土遺物 (第 48 図、図版 16)

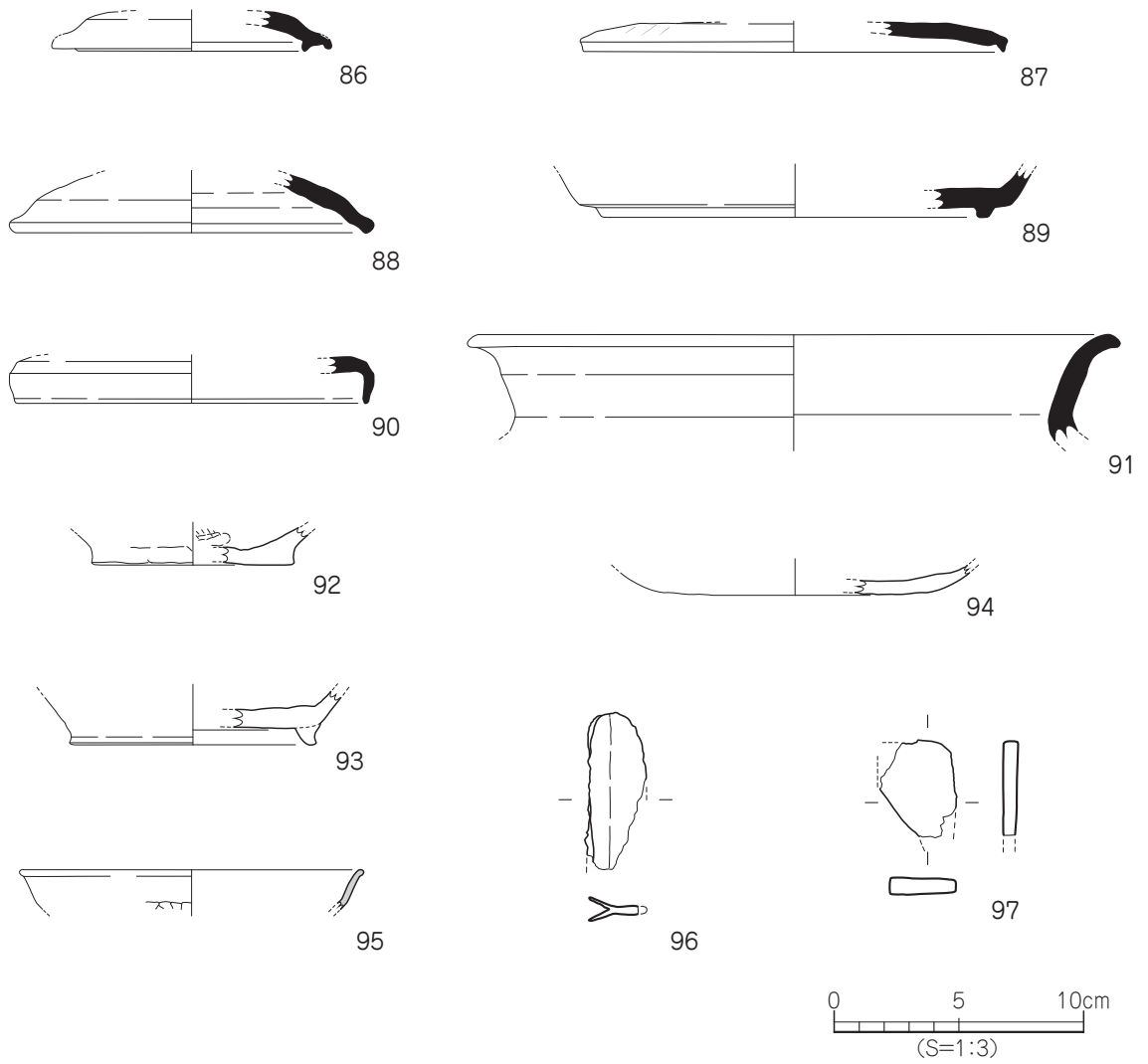
81・83 は SP8、82 は SP75、84 は SP151、85 は SP118 出土品。81 ～ 83 は土師器坏。81 の体部は内湾し、底部外面には回転ヘラ切り痕を残す。82 は体部が直線的に立ち上がり、底部の切り離しは磨滅により不明である。83 は円盤高台状の底部で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。11 世紀。84 は須恵器坏蓋。丸味のある天井部で、口縁端部は尖り気味に仕上げる。7 世紀前半。85 は緑釉陶器の碗。土師質で、胎土は黄白色をなし、濃緑色の釉が掛けられている。10 世紀後半。

(2) 第 V 層出土遺物 (第 49 図、図版 16)

86 ～ 88 は須恵器坏蓋。86 のかえりは短く内傾し、端部は尖り気味である。87 の口縁部は下方に屈曲し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。88 の口縁部はくちばし状に屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。89 は須恵器坏の底部小片で、高台は体底部境界より内側に付き、ほぼ直立する。90 は須恵器短頸壺の蓋。口縁部は下内方に屈曲し、口縁端部は尖る。91 は須恵器甕の口縁部片で、口縁端部は下外方に肥厚する。92・93 は土師器坏の底部。92 は中央部がやや凹み、底部の切り離しは磨滅が著しく不明である。93 は体底部境界付近に高台が付き、高台は「ハ」の字状に開く。94 は土師器皿で、内外面には赤色塗彩が施されている。95 は須恵質の緑釉陶器碗で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。胎土は灰色をなし、濃緑色の釉薬が全面に施されている。96・97 は鉄製品。96 は「U」字形鋤先で、長さ 6.3cm、幅 2.4cm、厚さ 0.4cm である。97 は鋳造品であるが、用途は不明である。



第 48 図 柱穴出土遺物実測図



第 49 図 第V層出土遺物実測図

第 4 節 小 結

桑原東稲葉遺跡 2 次調査は、弥生時代から古墳時代の集落範囲の確認や構造解明を主目的として実施した。調査の結果、弥生時代から古代と近世の遺構や遺物を確認した。以下、時代別に説明する。

(1) 弥生時代

弥生時代では、中期後半に時期比定される竪穴建物 1 棟 (SB2) を検出した。推定径 6 m 以上の円形建物で、建物内からは周壁溝を検出している。

(2) 古墳時代

古墳時代では、竪穴建物 3 棟と溝 8 条を検出した。3 棟の竪穴建物は重複しており、SB4 → SB3 → SB1 の順に構築されていることが判明した。このうち、SB1 と SB3 の関係は建て替えによるものと考えられる。また、SB4 からはカマドの痕跡と思われる焼土を検出した。一方、溝であるが、SD3 は人為的に掘削された溝で、その形状より、水田や畑耕作に伴う水路的な役割を持つ溝と推測される。調査地北東部には、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター）により、平成 20 年度に発掘調査が行われた桑原東稲葉遺跡 1 次調査地がある。さらに、調査地南西部には同埋蔵文化財センターにより、平成 2 年度に調査が行われた桑原西稲葉遺跡 2 次調査地が所在する。両遺跡からは、本調査検出の溝 SD3 の延長部と考えられる溝が、それぞれ検出されている。

(3) 古 代

古代の遺構は、掘立柱建物 6 棟を検出した。内訳は、飛鳥時代前半に時期比定される建物 3 棟 (掘立 1・3・4) と、奈良時代に時期比定される建物 3 棟 (掘立 2・5・6) である。なお、古代の掘立柱建物の検出は桑原地区においては稀薄であり、今後、調査地近隣の調査状況を合わせ、建物の検出は桑原地区における古代集落の様相解明において貴重な資料といえる。このほか、柱穴 (SP118) と出土地点は不明であるが、平安時代の緑釉陶器片が 2 点出土している。

(4) 近 世

近世では、溝 2 条を検出した。SD1・2 からは、江戸時代後期に時期比定される土師器片や陶磁器片が少量出土した。

今回の調査では、弥生時代中期後半から古墳時代、古代、及び近世の遺構を検出した。とりわけ、古墳時代後期に時期比定される 3 棟の竪穴建物は重複関係が認められることから、当該期に、調査地や周辺地域では継続的に集落が営まれていたものと推測される。また、古代においては飛鳥時代や奈良時代の掘立柱建物が検出されており、これらは調査地や近隣地域に古代集落が存在することを示す資料といえよう。今後、桑原地区における弥生時代から古代の集落範囲や様相を解明するうえで、貴重な成果を得ることができたと考えられる。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
 規模欄 () : 検出値を示す。
 埋土欄 複数の土層がある場合→「黒色土 他」と記載。
 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
 例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 () : 復元推定値を示す。
 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
 例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、頸→頸部、胴→胴部、底→底部
 胎土欄 胎土欄には混和剤を略記した。
 例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
 例) 石・長 (1～4) → 「1～4mm大の石英・長石を含む」である。
 焼成欄 焼成欄の略記について
 ◎→良好

表 21 竪穴建物一覧

竪穴 (S B)	区	地区	平面形	規模 長さ×幅×壁高 (m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	1	A4・5	(方形)	6.00 × (3.80) × 0.10	暗褐色土	周壁溝	土師・須恵	6世紀後半	
2	2	A2・3	(円形)	(5.65) × (1.00) × 0.25	黒色土 他	周壁溝	弥生	弥生中期後半	
3	1	A4・5	(方形)	5.50 × (3.70) × 0.04	暗褐色土	周壁溝	土師・須恵	6世紀後半	
4	1	A5	(長方形)	(4.20) × (1.90) × 0.10	暗褐色土			6世紀後半以前	

表 22 掘立柱建物一覧

掘立	区	規模 (間)	方向	桁行長 (m)	梁行長 (m)	床面積 (㎡)	時期	備考
1	1	3 × (3)	東西	(5.60)	4.39	24.58	7世紀代	
2	1	2 × 2	南北	3.20	2.60	8.32	8世紀代	
3	1	3 × (2)	東西	(3.80)	6.22	23.64	7世紀前半	
4	1	3 × (2)	南北	5.00	(3.48)	17.40	7世紀代	
5	1	2 × 1	東西	4.09	2.16	8.83	8世紀代	
6	1	2 × (2)	南北	(3.30)	3.62	13.10	8世紀前半	

表 23 溝一覧

(1)

溝 (S D)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	1	A・B6	皿状	(6.30) × 0.80 × 0.11	黄灰色土	土師・陶磁	近世	
2	1	A・B6	皿状	(7.50) × 0.58 × 0.08	黄灰色土	土師・陶磁	近世	

溝一覧

(2)

溝 (SD)	区	地区	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
3	1	A6～B6	舟底状	(8.60) × 0.80 × 0.52	暗褐色土 他	土師・須恵・石	6世紀後半	
4	1	B7	皿状	(1.88) × 0.54 × 0.04	暗褐色土		6世紀代	
5	1	B・C6	皿状	(5.50) × 1.54 × 0.06	暗褐色土		6世紀代	
6	1	C6・7	皿状	(8.00) × 0.44 × 0.12	暗褐色土		6世紀代	
7	1	C7	皿状	(3.70) × 0.74 × 0.09	暗褐色土		6世紀代	
8	1	C6	皿状	(2.14) × 0.36 × 0.06	暗褐色土		6世紀代	
9	1	C7	皿状	(0.82) × 0.38 × 0.03	暗褐色土		6世紀代	
10	1	A5	皿状	(3.30) × 0.90 × 0.04	暗褐色土		6世紀代	

表 24 S B 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	甕	口径 (16.5) 残高 3.1	口縁部は上方に拡張させ、口縁端面に凹線文4条を施す。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ハケ	㊸マメツ ㊹ナデ	灰褐色 橙色	石・長 (1～2) 赤色酸化土粒 ◎		16
68	甕	底径 (6.2) 残高 3.1	中央部が凹む上げ底。1/2の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 褐色	石・長 (1～2) 金 ◎	黒斑	16
69	壺	口径 (9.7) 残高 5.0	口縁部は上方に拡張させ、口縁端面に凹線文3条を施す。小片。	㊶ヨコナデ ㊷ヘラミガキ	㊸ヨコナデ ㊹マメツ	褐色 褐色	石・長 (1) 金 ◎		16
70	壺	底径 (8.1) 残高 6.9	平底。内外面共に指頭痕が顕著に残る。1/4の残存。	ハケ	ナデ ナデアゲ	黒色 黒褐色	石・長 (1～4) ◎	黒斑	

表 25 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
71	高坏	残高 5.3	脚部片。中空。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
72	壺	残高 8.7	特殊扁壺。凹線2条が二重に巡り、凹線間に刺突文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		16

表 26 S B 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
73	蓋	つまみ径 (2.4) 残高 2.2	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は突出する。	回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
74	甕	口径 (14.1) 残高 2.2	内湾口縁。口縁部は内方に肥厚する。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1～3) ◎		

表 27 S D 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
75	坏蓋	口径 (14.0) 残高 3.8	瓦質。天井部と口縁部の境界は凹線状の凹みが巡る。口縁端部は丸い。1/5の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
76	坏身	口径 (12.7) 器高 4.3	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。3/4の残存。	㊶回転ナデ ㊷回転ヘラケズリ (1/2)	回転ナデ ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
77	高坏	底径 (9.8) 残高 7.1	脚裾部は下外方へ屈曲し、脚裾端面には沈線状の凹みが巡る。1/3の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		16
78	甕	口径 (20.2) 残高 5.3	内湾口縁。口頸部内面には明瞭な稜をもち、口頸部境界内面までヘラケズリを施す。	ハケ(5～6本/cm) →ヘラミガキ	㊸ハケ(5～6本/cm) ㊹ヘラケズリ	黄橙色 灰白色	長 (1) ◎		

遺物観察表

表 28 掘立出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
79	坏身	口径 (10.5) 残高 2.3	たちあがりは短く内傾し、端部は丸い。受部は上方にひねり出されている。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	掘立 3	
80	坏	底径 (9.8) 残高 1.3	高台は「ハ」の字状に開き、外端面で接地する。小片。赤色塗彩土器。	回転ヘラケズリ	マメツ	橙色 橙色	密 ◎	掘立 6	

表 29 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
81	坏	口径 13.1 底径 6.0 器高 3.7	体部は内湾し、口縁端部は丸い。底部外面に回転ヘラ切り痕が残る。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎	SP8	16
82	坏	口径 (12.8) 底径 (9.0) 器高 3.4	体部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味。底部の切り離しは不明。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	SP75	
83	坏	底径 7.9 残高 1.6	円盤高台状の底部。内面に成形時の粘土紐巻き上げ痕を残す。底部切り離しは回転ヘラ切り技法。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	長 (1) ◎	SP8	16
84	坏蓋	口径 (11.8) 残高 2.7	口縁部片。口縁端部は尖り気味。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP151	
85	椀	底径 (5.2) 残高 1.3	緑釉陶器。土師質で、濃緑色の釉薬が掛けられている。	マメツ	マメツ	黄灰色 黄灰色	密 ◎	SP118	

表 30 第V層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
86	坏蓋	口径 (9.0) 残高 1.6	かえりは短く内傾し、端部は尖り気味に仕上げる。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
87	坏蓋	口径 (16.7) 残高 1.2	口縁部は下方に屈曲し、端部は尖る。小片。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
88	坏蓋	口径 (14.0) 残高 2.3	丸味のある天井部。口縁部は下方に屈曲する。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
89	坏	底径 (15.3) 残高 1.8	高台は体底部境界より内側に付き、直立する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
90	蓋	口径 (14.0) 残高 1.9	短頸壺の蓋。口縁部は下方へ屈曲し、口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
91	甕	口径 (26.0) 残高 4.2	外反口縁。口縁部は下外方へ屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
92	坏	底径 (7.8) 残高 1.5	中央部が凹む底部。1/4の残存。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	密 ◎		
93	坏	底径 (9.8) 残高 2.1	高台は体底部境界に付き、「ハ」の字状に開く。	ナデ	ナデ	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長 (1~2) ◎		
94	皿	底径 (12.2) 残高 1.2	平底。赤色塗彩土器。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
95	碗	口径 (13.6) 残高 1.6	緑釉陶器。口縁部は短く外反し、端部は丸い。濃緑色の釉薬が全面に掛けられている。小片。	回転ナデ	回転ナデ	濃緑色 濃緑色	密 (灰色) ◎		16

表 31 第V層出土遺物観察表 金属製品

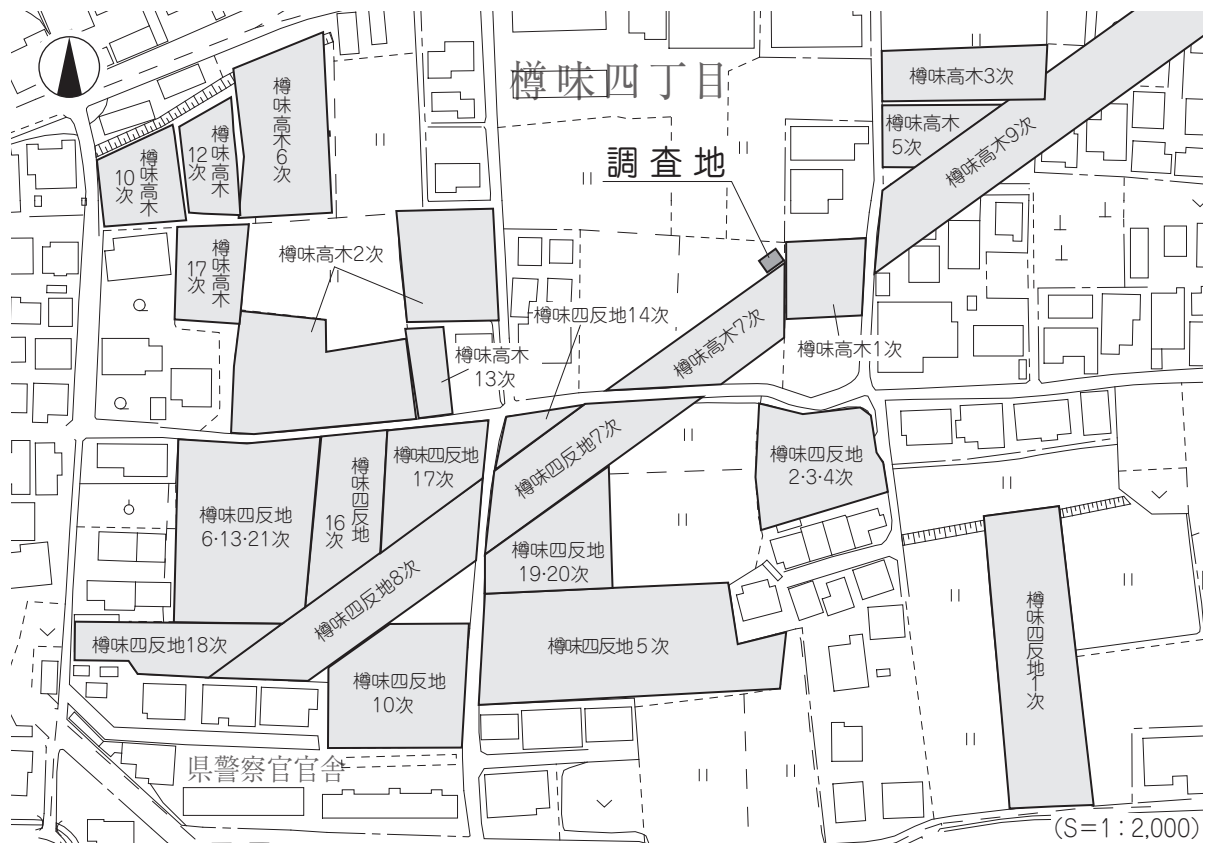
番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
96	鋤先		鉄	6.3	2.4	0.4	17.7		16
97	不明	—	鉄	3.9	3.0	0.7	13.4	铸造品	16

第5章 樽味高木遺跡 16次調査

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2008（平成20）年11月21日、株式会社村上水軍〇〇〇（以下、申請者という。）より松山市樽味四丁目265番1の一部における広告塔設置を目的とする埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。確認願が提出された申請地は、埋蔵文化財包蔵地の『No.81 樽味遺物包含地』内にあたり周知の遺跡として知られている。申請地周辺では、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）により、数多くの発掘調査が実施されている。申請地に隣接して、樽味高木遺跡1次調査（昭和63年度調査）や、同7次調査（平成15年度調査）が実施され、1次調査からは古墳時代中期の竪穴建物が検出され、7次調査からは弥生時代中期後半の円形竪穴建物や古墳時代中期の竪穴建物が数多く発見されている。とりわけ、7次調査では竪穴建物内より韓式系土器や打ち欠き土器などが出土している。このほか、9次調査（平成15・16年度）からは弥生時代後期後半の竪穴建物や掘立柱建物のほか、古墳時代中期や後期の竪穴建物が検出されている。なお、3次調査からは船が描かれた土器なども出土している（第50図）。



第50図 調査地周辺の遺跡分布図

これらのことから、2007（平成 19）年 5 月に店舗用地造成に伴う試掘調査が実施されたが、既に埋蔵文化財の存在が確認されており、申請地を含めた数筆は遺跡に影響を及ぼす開発行為が生じた場合、発掘調査が必要と判断されている。

今回の申請により、広告塔基礎部分の掘削が遺跡の存在するレベルよりも深くなることから、この部分について発掘調査が必要と判断された。このため、文化財課と申請者との間で遺跡の取り扱いについて協議が行われ、その後、2009（平成 21）年 1 月 21 日より、埋文センターが主体となり発掘調査を実施することになった。

2. 調査組織

所在地：松山市樽味四丁目 265 番 1 の一部

調査期間：2009（平成 21）年 1 月 21 日～同年 1 月 27 日

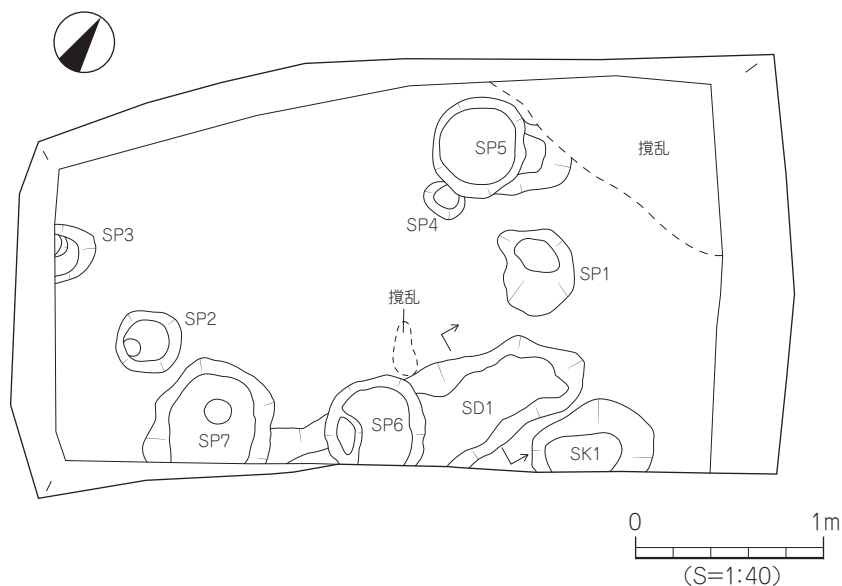
調査面積：11.6m²

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター 栗田 茂敏

第 2 節 層 位

調査地は、調査以前には店舗駐車場として利用されており、その一角を掘削して広告塔を設置することになっている。現況の標高は、41.3 m 前後である。調査地の基本層位は、以下の 4 層（I～IV 層）である（第 52 図、図版 17）。



第 51 図 遺構配置図

層位

第Ⅰ層：駐車場建設に伴う造成土や碎石で、4層に分層される。

第Ⅰ①層－駐車場舗装にかかるアスファルトで、層厚5cmである。

第Ⅰ②層－碎石で調査地全域にみられ、層厚32～38cmである。

第Ⅰ③層－造成土で調査地全域にみられ、層厚20～40cmである。

第Ⅰ④層－碎石で調査地南東部にみられ、層厚30cmである。

第Ⅱ層：農耕に伴う耕土で、3層に分層される。

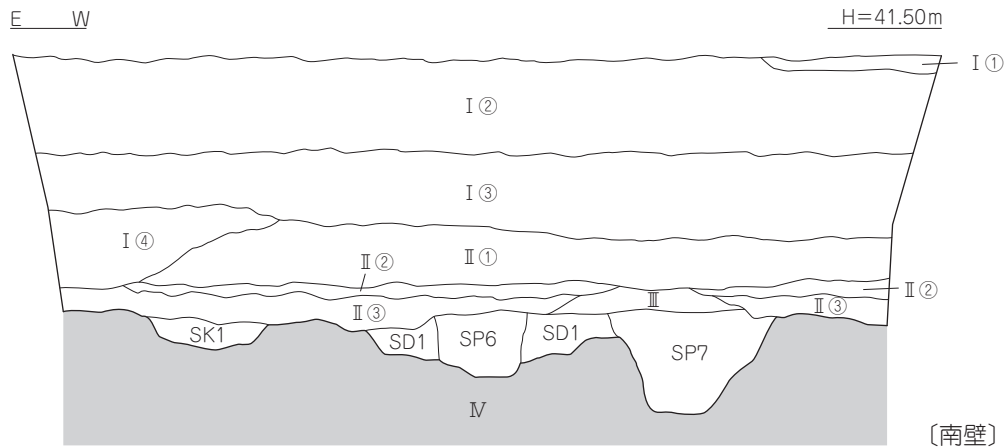
第Ⅱ①層－耕作土〔オリーブ灰色土(10Y 6/2)〕で、層厚20～25cmである。

第Ⅱ②層－床土〔黄色土(2.5Y 7/8)〕で、層厚3～5cmである。

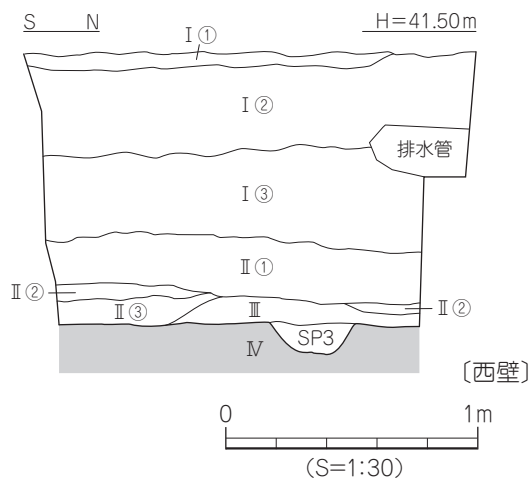
第Ⅱ③層－第Ⅱ①層に黒色土(5Y 2/1)がブロック状に混入するもので、層厚3～12cmである。

第Ⅲ層：黒褐色土(2.5Y 3/1)に赤褐色土(5YR 4/8)がブロック状に混入するもので、層厚8～11cmである。本層中からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。

第Ⅳ層：赤褐色土(5YR 4/8)で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。



- I① アスファルト
- I② 碎石1
- I③ 造成土
- I④ 碎石2
- II① オリーブ灰色土(10Y 6/2)
- II② 黄色土(2.5Y 7/8)
- II③ オリーブ灰色土(10Y 6/2)に
黒色土(5Y 2/1)がブロック状に混入
- II 黒褐色土(2.5Y 3/1)に
赤褐色土(5YR 4/8)がブロック状に混入
- IV 赤褐色土(5YR 4/8)



第 52 図 南壁・西壁土層図

第 3 節 遺構と遺物

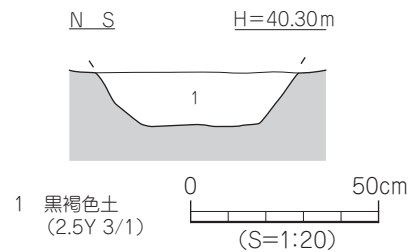
調査では溝 1 条、土坑 1 基、柱穴 7 基を検出した（第 51 図、図版 17）。すべて、第 IV 層上面での検出である。

1. 溝

S D 1（第 53 図）

調査地南半部に位置する北東－南西方向の溝で、溝西側は調査区外に続く。なお、溝中央部と西端は柱穴 SP6〔暗灰褐色土（2.5Y 5/2）〕と SP7〔黒褐色土（2.5Y 3/1）に赤褐色土（7.5YR 5/2）がブロック状に混入〕に一部削平されている。規模は検出長 1.75 m、最大幅 0.58 m、深さは 13cm である。断面形態はレンズ状をなし、埋土は黒褐色土（2.5Y 3/1）単層である。溝内から、遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、遺構検出段階で溝上面付近より弥生時代中期後半から後期の土器片が出土していることから、これらの遺物が示す時期、つまり弥生時代中期後半から後期段階の溝と考えられる。



第 53 図 S D 1 断面図

2. 土 坑

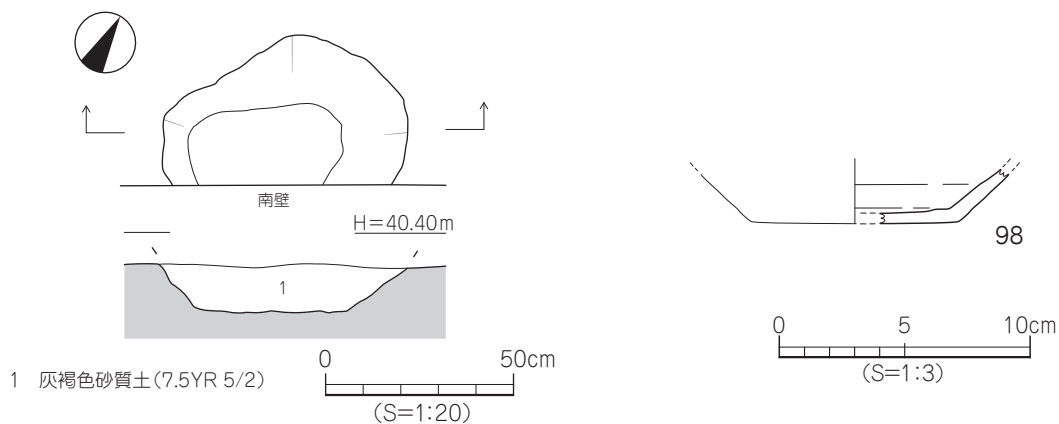
S K 1（第 54 図、図版 18）

調査地南東部に位置する土坑で、南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形をなし、規模は東西長 0.62 m、南北検出長 0.39 m、深さ 13cm である。断面形態は逆台形状をなし、埋土は灰褐色砂質土（7.5YR 5/2）単層である。遺物は、埋土中より土師器片が数点出土した。

出土遺物（図版 19）

98 は推定底径 8.2cm の土師器杯。平底で、底部の切離しは回転糸切り技法による。色調は、内外面共に灰黄色で、胎土中には少量の赤色酸化土粒を含む。

時期：出土遺物の特徴より中世、13～14 世紀代の遺構と考えられる。



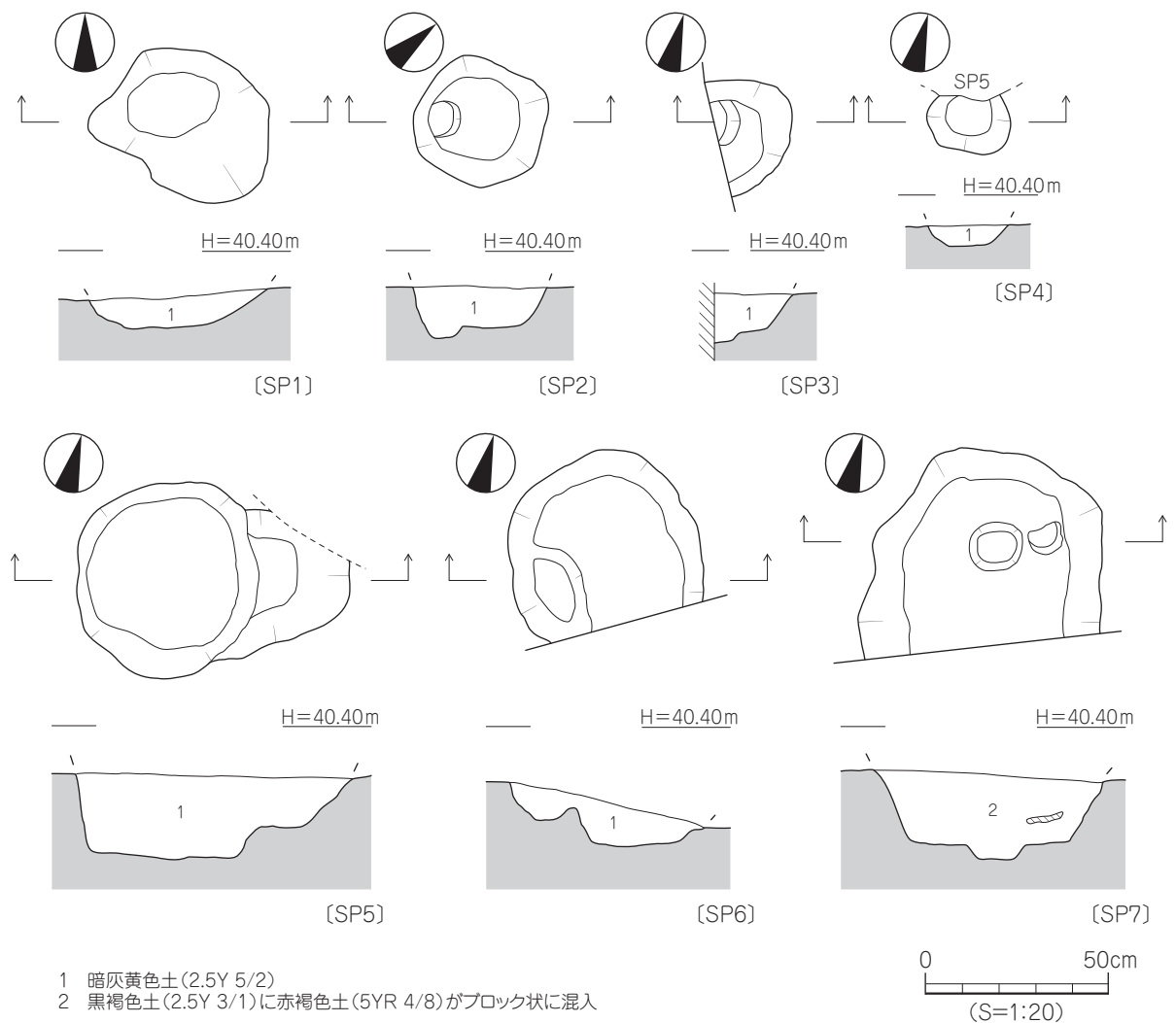
第 54 図 S K 1 測量図・出土遺物実測図

3. 柱 穴 (第 55 図、図版 18・19)

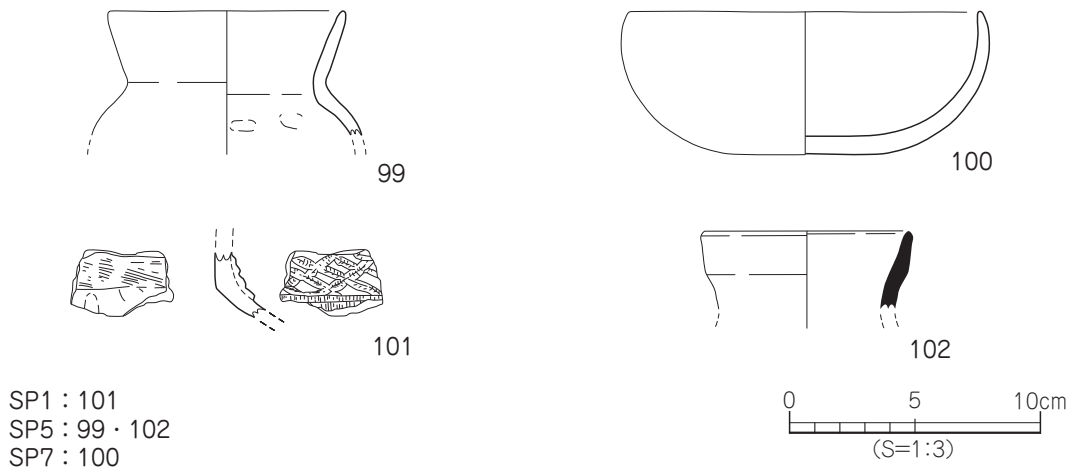
調査では7基の柱穴を検出したが、狭小範囲の調査であったため、建物を復元するには至らなかった。柱穴掘り方は、円形または楕円形をなす。柱穴掘り方埋土は2種類あり、SP1～6は暗灰黄色土(2.5Y 5/2)、SP7は黒褐色土(2.5Y 3/1)に赤褐色土(5YR 4/8)がブロック状に混入するものである。なお、SP2・3・7では柱痕を検出した。また、SP7からは土師器椀(半截品)が正位置で埋置されており、建物構築に伴う祭祀儀礼に用いられた遺物の可能性がある。

出土遺物 (第 56 図、図版 19)

99・102はSP5、100はSP7、101はSP1出土品。99は土師器の小型丸底壺。推定口径9.2cmで、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。1/5の残存。100は土師器椀。口径14cm、器高5.6cmで、口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。色調は、内外面共に橙色である。101は弥生時代後期の壺形土器。頸部片で、凸帯上に斜格子目文を施す。102は須恵器平瓶の口縁部片。口縁部中位に稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸い。色調は、内外面共に灰色である。



第 55 図 柱穴測量図



SP1 : 101
 SP5 : 99・102
 SP7 : 100

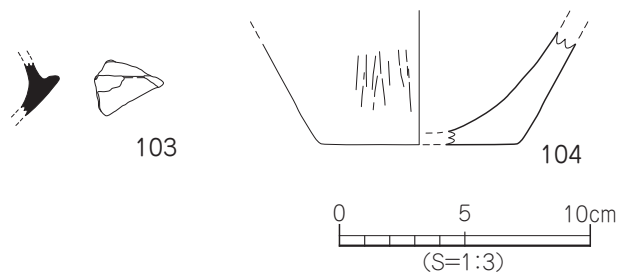
第 56 図 柱穴出土遺物実測図

4. その他の遺構と遺物

調査では、第Ⅲ層掘削中に弥生土器や土師器、須恵器の破片が少量出土した。図化する遺物を 2 点掲載した。

第Ⅲ層出土遺物（第 57 図、図版 19）

103 は須恵器坏身の小片で、受部は短く外方にのびる。色調は、内外面共に灰色である。104 は弥生時代後期の甕形土器。平底で、外面にヘラミガキ調整を施す。



第 57 図 第Ⅲ層出土遺物実測図

第 4 節 小 結

樽味高木遺跡 16 次調査は、調査面積 11.6㎡という狭小範囲での調査であったにもかかわらず、弥生時代から中世までの遺構や遺物を確認することができた。弥生時代では中期後半から後期段階の溝、中世では土坑を検出した。また建物復元には至らなかったが、小型丸底壺や椀、須恵器平瓶などが出土したことから、検出した柱穴は 7 世紀前半を上限とする遺構群と考えられる。このような状況は調査地南方にある樽味高木遺跡 1 次調査地や 7 次調査地をはじめ樽味地区における既往の調査成果と同様である。1 次調査では古墳時代中期の竪穴住居址や弥生時代の包含層、7 次調査からは弥生時代中期後半の大型竪穴住居址や古墳時代中期前半の住居址群などが検出されており、本調査地もこれら集落の一角に相当することが確認された。また、調査地南東に位置する 3 棟の超大型掘立柱建物と同時期の遺構は、前述の 2 遺跡を含め本調査地内でも検出されておらず、これらの建物が他の施設を隔絶して建築された特別な施設であったことを、さらに裏付ける結果となった。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

規模欄 () : 検出値を示す。

出土遺物欄 遺物名称を略記した。

例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

法量欄 () : 復元推定値を示す。

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 肩→肩部、底→底部

胎土欄 胎土欄には混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ

() 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) → 「1~4mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について

◎→良好、○→良

表 32 溝一覧

溝 (SD)	断面形	規模 長さ×幅×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	レンズ状	1.75 × 0.58 × 0.13	黒褐色土		弥生中期後半	

表 33 土坑一覧

土坑 (SK)	平面形	断面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	楕円形	逆台形状	0.62 × (0.39) × 0.13	灰褐色砂質土	土師	鎌倉時代	

表 34 柱穴一覧

柱穴 (SP)	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
1	不整楕円形	0.49 × 0.37 × 0.11	暗灰黄色土	弥生	
2	不整円形	0.35 × 0.33 × 0.10	暗灰黄色土		柱痕
3	(円形)	0.33 × (0.22) × 0.10	暗灰黄色土		柱痕
4	円形	0.23 × (0.18) × 0.05	暗灰黄色土		
5	不整楕円形	0.74 × 0.56 × 0.23	暗灰黄色土	土師・須恵	
6	(円形)	0.57 × 0.52 × 0.16	暗灰黄色土		
7	(楕円形)	0.63 × (0.72) × 0.19	黒褐色土 (赤褐色土混)	土師・須恵	柱痕

樽味高木遺跡 16 次調査

表 35 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	坏	底径 (8.2) 残高 2.2	平底。底部の切り離しは回転糸切り技法。	回転ナデ	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長 (1) 赤色酸化土粒 ◎		19

表 36 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
99	壺	口径 (9.2) 残高 5.0	口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸い。1/5の残存。	マメツ	マメツ ◎指頭痕	灰黄色 灰黄色	石 (1) ◎	SP5	19
100	椀	口径 14.0 器高 5.6	口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ○	SP7	19
101	壺	残高 2.6	頸部片。凸帯上に斜格子目文を施す。	ハケ	ハケ 指頭痕	暗褐色 暗褐色	石 (1) 金 赤色酸化土粒 ◎	SP1	19
102	平瓶	口径 (8.1) 残高 3.1	口縁部中位に稜をもち、口縁端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP5	19

表 37 第三層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
103	坏身	残高 2.1	受部は短く外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		19
104	甕	底径 (7.7) 残高 4.4	平底。	ハラミガキ ◎ナデ	ナデ	暗茶色 灰茶色	石・長 (1~3) ◎	黒斑	19

第6章 樽味高木遺跡 17 次調査

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

2010（平成22）年1月、株式会社穴吹建設松山支店 代表取締役 森田哲夫氏（以下、申請者という。）より松山市樽味四丁目233番1地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財確認申込書が松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。申請地は、埋蔵文化財包蔵地の『No.81 樽味遺物包含地』内にあたり周知の遺跡として知られている。申請地周辺では、松山市教育委員会や財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）により、数々の発掘調査が実施されている。

申請地北方にある樽味高木遺跡10次調査（平成16年度調査）や申請地東方にある樽味高木遺跡6次調査（平成14年度調査）からは、弥生時代後期や古墳時代中・後期の竪穴建物のほか、古墳時代の掘立柱建物址や古代の遺構が検出されている。また、申請地南方では樽味高木遺跡2次調査（平成3年度調査）が実施され、弥生時代中期後半や古墳時代中期後半の竪穴建物のほか、近世の礫積塚などが発見されている。なお、愛媛県教育委員会からの本格調査通知では、申請地の一部について発掘調査が必要と判断されている。

このことから、埋文センターと申請者との間で協議が行われ、発掘調査に伴う委託契約が両者の間で結ばれた。発掘調査は申請地内における弥生時代や古墳時代の集落構造解明を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり、2010（平成22）年2月8日より開始した。

2. 調査組織

所在地：松山市樽味四丁目233番1の一部

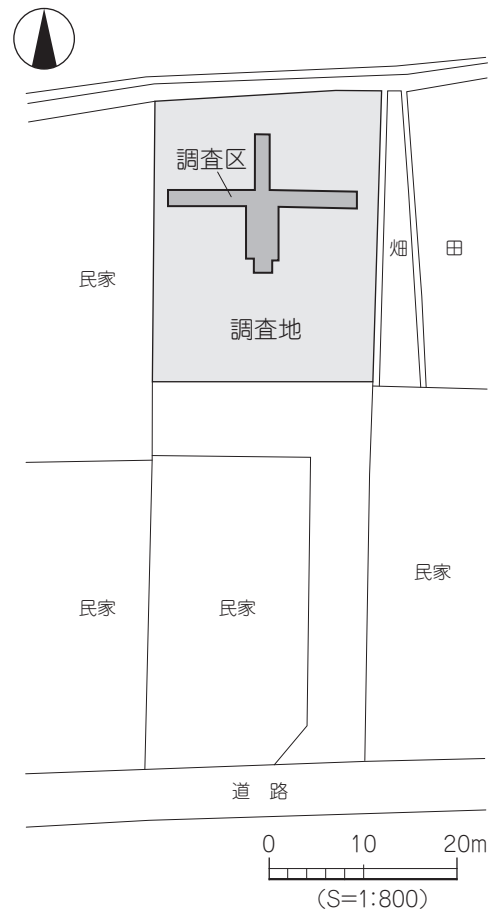
調査期間：2010（平成22）年2月8日～同年3月31日

調査面積：約45㎡

契約者：株式会社穴吹建設 代表取締役 森田 哲夫

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当：埋蔵文化財センター調査員 宮内 慎一



第58図 調査地測量図

第 2 節 層 位

調査地は、石手川左岸に広がる扇状地の扇央付近、標高 39.2 m 前後に立地する。調査地は、調査以前には水田として利用されていた。調査地の基本層位は、以下の 6 層（Ⅰ～Ⅵ層）である（第 59 図）。

第Ⅰ層：近現代の農耕に伴う耕土で、土色・土質の違いにより 2 層に分層される。

第Ⅰ①層－耕作土で、色調はオリーブ灰色（5GY 6/1）である。層厚は、8～35cm である。

第Ⅰ②層－旧耕作土で、色調は明オリーブ灰色（2.5GY 7/1）である。層厚は、2～8cm である。

第Ⅱ層：近現代の農耕に伴う床土で、明黄褐色（10YR 6/6）をなす砂質土である。層厚は、4～14cm である。

第Ⅲ層－古墳時代から古代の遺物を含む包含層で、土色・土質の違いにより 2 層に分層される。

第Ⅲ①層－褐灰色（10YR 4/1）をなす硬質のシルト層で調査地全域にあり、層厚 2～14cm である。本層中からは、土師器片や須恵器片が少量出土した。

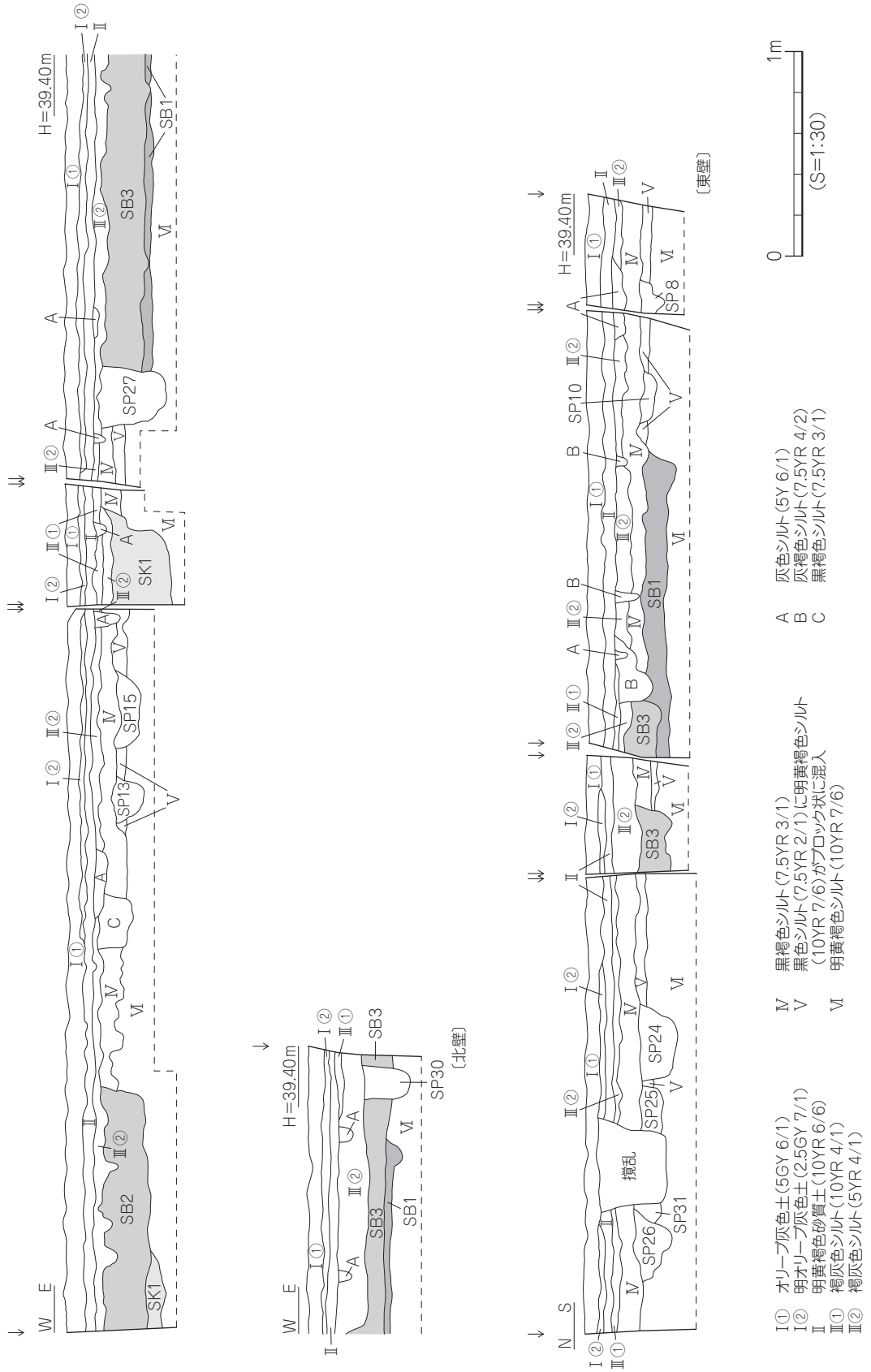
第Ⅲ②層－褐灰色シルト（5YR 4/1）で調査地全域にあり、層厚 4～24cm である。本層中からは古墳時代から古代の土師器片や須恵器片が少量出土した。

第Ⅳ層：黒褐色シルト（7.5YR 3/1）で調査地全域にあり、層厚 6～38cm である。本層中からは、弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。調査壁の土層観察により、古墳時代の遺構は本層上面から掘削されていることを確認した。なお、調査地中央部の土層観察では、本層上面付近に焼土ブロックと基本層位とは異なる土層（A・B・C 層）を検出したことから、これらは竪穴建物に付随するカマドやカマドに関係する土層が推測される。このことから、調査地内には平面検出の竪穴建物以外に、古墳期の建物が少なくとも 2 棟以上存在した可能性が考えられる。

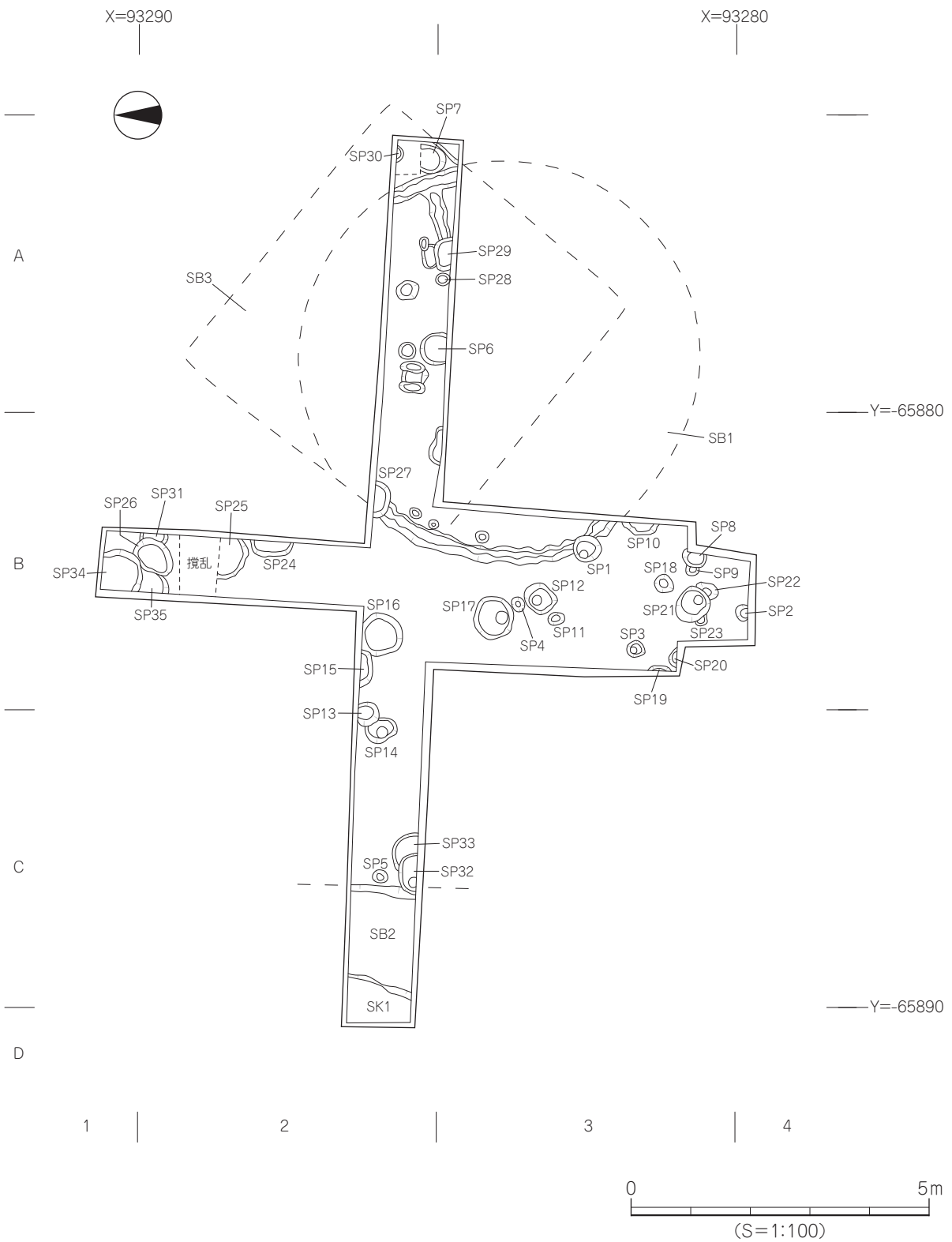
第Ⅴ層：黒色シルト（7.5YR 2/1）に明黄褐色（10YR 7/6）がブロック状に混入するもので、調査地全域にあり、層厚 6～22cm である。本層中からは、弥生土器片や石器が出土した。なお、調査で検出した弥生時代の竪穴建物は本層を掘りこんで構築されていることを確認した。

第Ⅵ層：明黄褐色シルト（10YR 7/6）で、本層上面が調査における最終遺構検出面である。本層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、漸次、南西部に向けて緩やかな傾斜をます（比高差 8cm）。本層中から、遺物の出土はない。

検出遺構や出土遺物より、第Ⅴ層は弥生時代、第Ⅳ層は古墳時代、第Ⅲ層は古代までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内を 5 m 四方のグリッドに分けた（第 60 図）。グリッドは東から西へ A・B・C・D、北から南へ 1・2・3・4 とし、A1・A2・……・D4 としたグリッド名を付した。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に利用した。



第 59 図 北壁・東壁土層図



第 60 図 遺構配置図

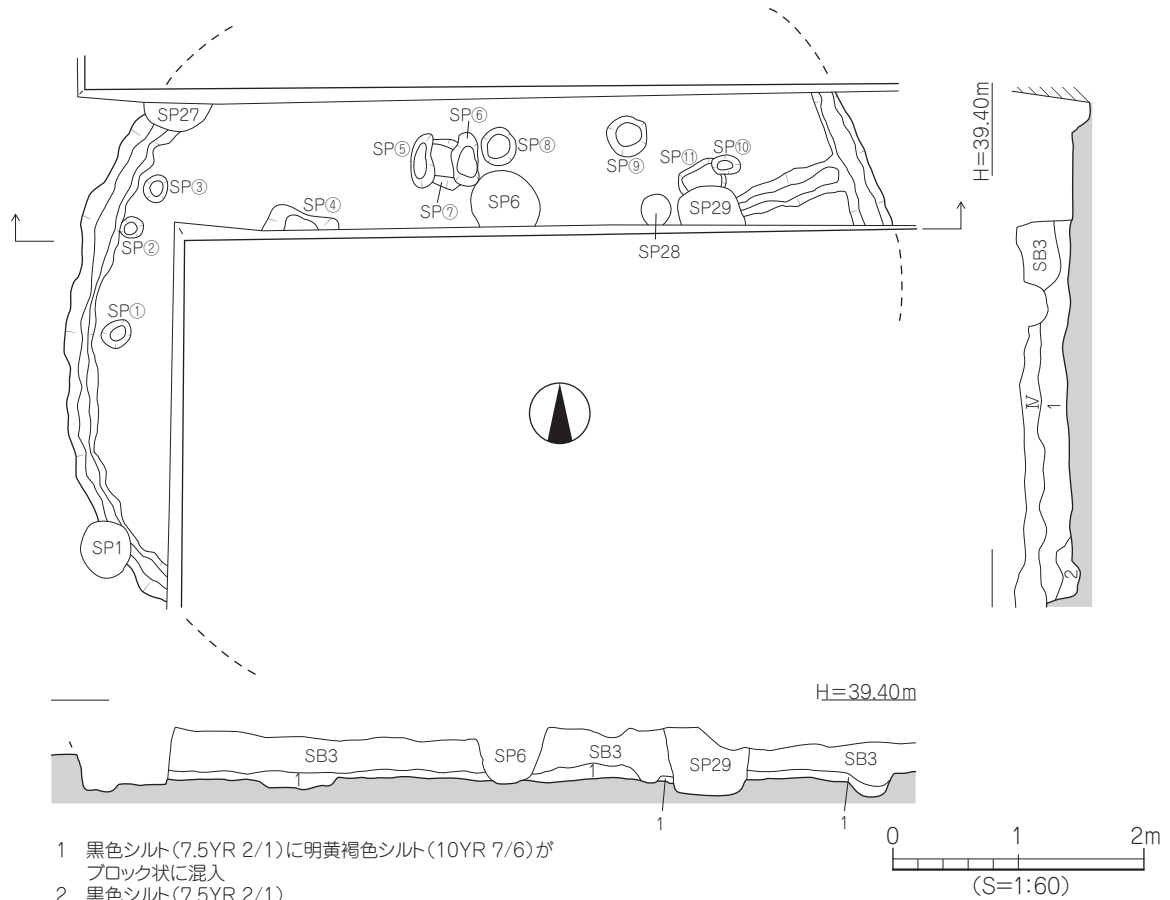
第3節 遺構と遺物

調査では、竪穴建物3棟と柱穴35基を検出した（第60図）。ここでは、遺構別に内容を説明する。

1. 竪穴建物

SB1（第61図、図版21）

調査地中央部東寄りA2～B3区に位置する竪穴建物で、建物東側と西側で壁体の一部を検出した。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第Ⅴ層上面から掘削された遺構である。なお、建物上面はSB3（古墳時代）や第Ⅳ層が覆う。検出した建物の形状より、平面形態は概ね円形をなすものと思われ、規模は推定径6.3m、壁高は48cmである。建物埋土は、黒色シルト（7.5YR 2/1）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）がブロック状に少量混入するものである。建物床面にて、大小11基の柱穴（SP①～⑪）を検出した。このうち、SP⑦は直径34cm、深さ26cmの柱穴で、建物の構造から屋根を支えた支柱穴のひとつと考えられる。また、床面中央部付近には炭化物や焼土が30×30cmの範囲に検出されたことから、建物内で火を使用した何らかの行為が行われたものと推測される。このほか、建物壁体沿いには周壁溝があり、杭や板の痕跡が幅10～15cm、深さ6～12cmほどの溝状の凹みとして残されていた。建物内からは、弥生時代中期後半に時期比定される土器が出土したが、完形品は見られなかった。



出土遺物（第 62 図、図版 23）

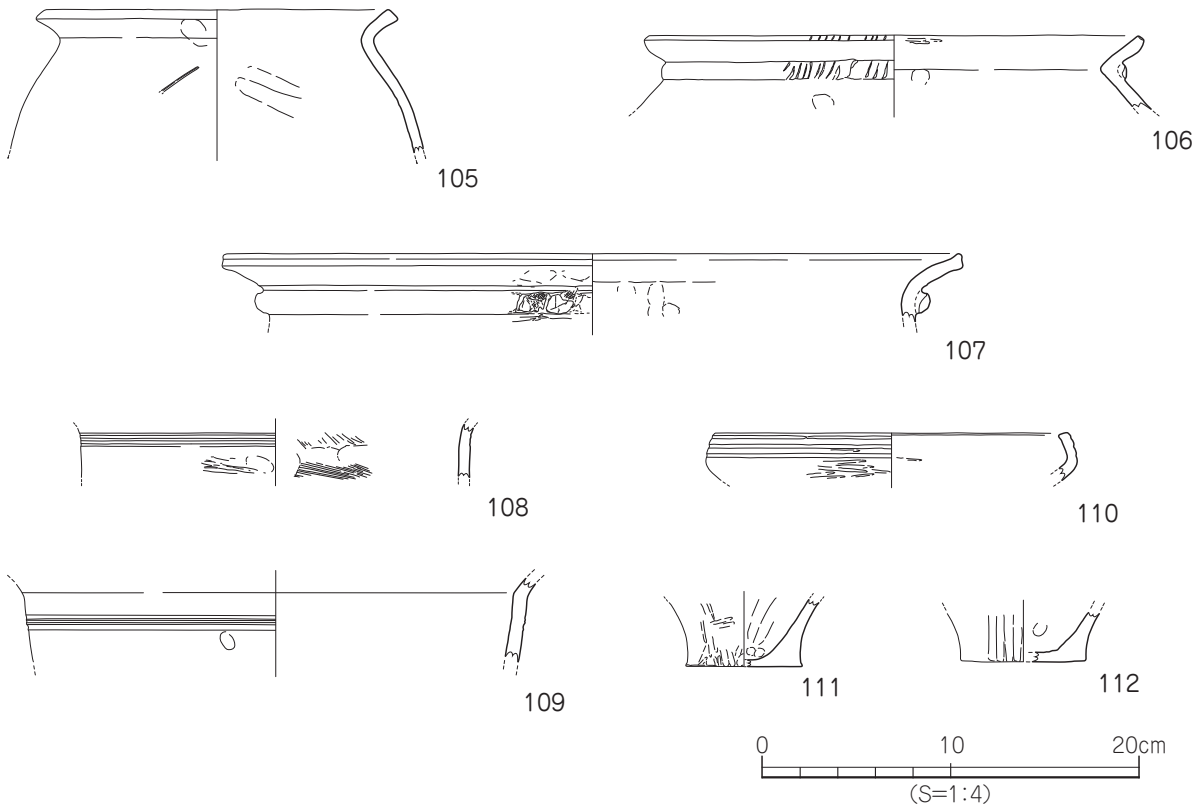
105～109 は甕形土器。105～107 は口縁部が外反し、105 の胴部上位には「ノ」の字状文を施す。106・107 は頸部に凸帯を貼り付け、106 は凸帯上と口縁端部に刻目を施す。107 は凸帯上に押圧を加え、布目痕が残る。108・109 は弥生時代前期末の甕形土器の胴部片。108 は櫛描き沈線文、109 にはヘラ描き沈線文が描かれている。110 は高坏形土器の坏部。口縁部に凹線文 3 条を施し、口縁端部は内傾する。111・112 は甕形土器の底部。平底で、外面にはタテ方向の丁寧なヘラミガキを施す。

時期：出土遺物の特徴より、SB1 の廃棄・埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SB2（第 63 図、図版 21）

調査地西側 C・D2 区に位置する竪穴建物で、建物東側壁体の一部を検出した。第 VI 層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第 IV 層上面から掘削された遺構である。検出状況より、平面形態は方形をなすものと思われる。規模は東西検出長 2.32 m、南北検出長 1.22 m、壁高は 34cm である。建物埋土は黒褐色シルト（10YR 2/3）に明黄褐色シルト（10YR 7/6）がブロック状に混入するものであるが、埋土中には焼土や炭化物が多く点在している。建物西側床面にて、土坑（SK ①）を検出した。土坑埋土は、暗褐色シルト（10YR 3/3）単層である。土坑内からは、弥生土器や土師器、須恵器の破片が混在して出土した。

建物埋土中からは古墳時代中期の土師器や須恵器のほか、弥生時代中期や後期の土器片が数多く出土した。堆積状況や遺物の出土状況から、SB2 は人為的に埋め戻された建物と考えられる。なお、建

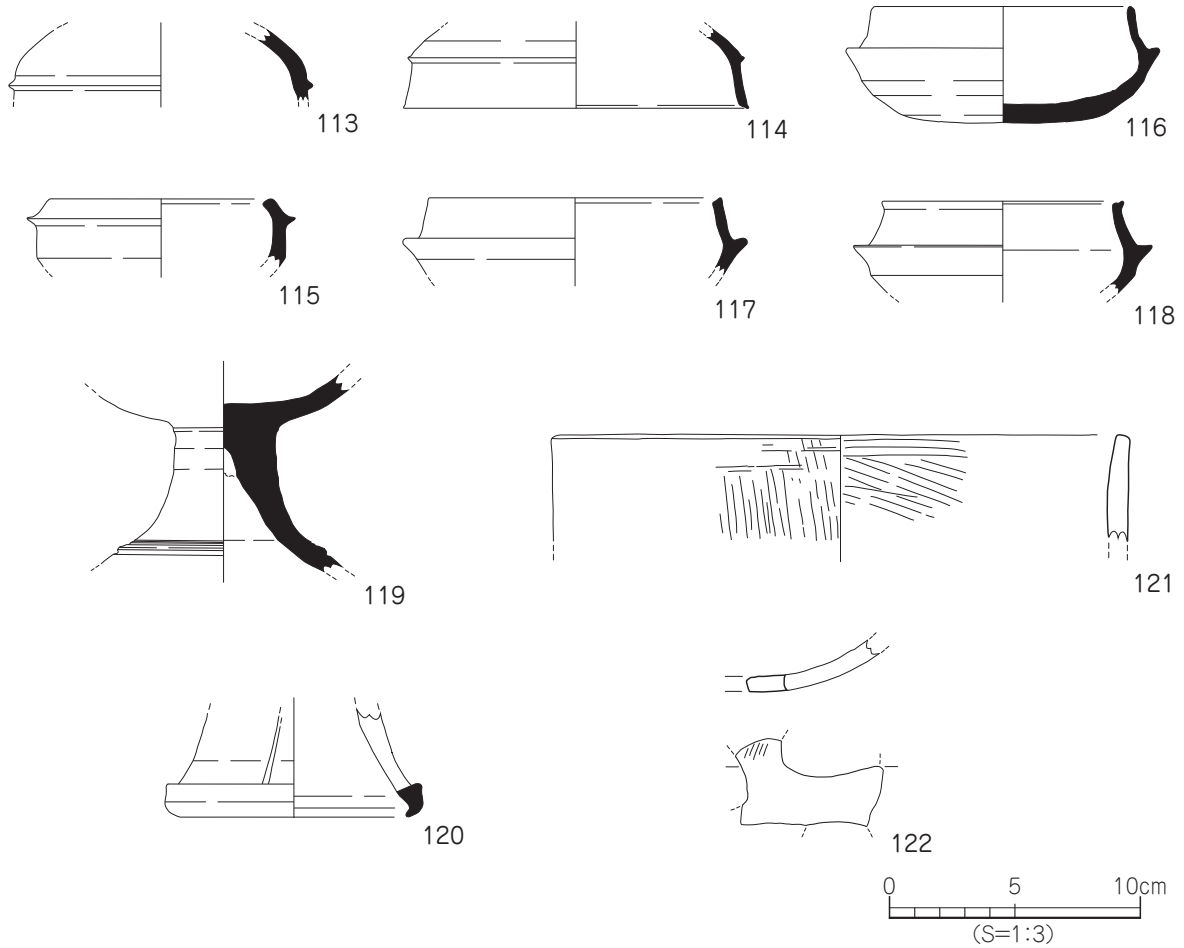
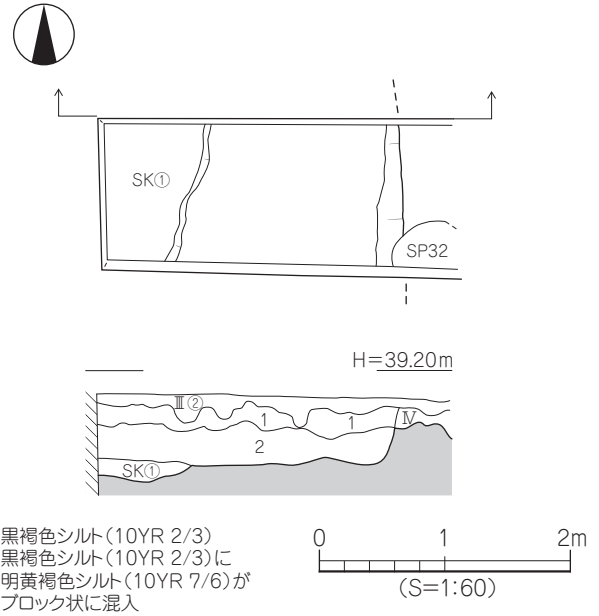


第 62 図 SB1 出土遺物実測図

物内からは樽味地区では検出事例の極めて少ない古墳時代中期前葉から中葉に時期比定される須恵器坏身や高坏のほか、土師器の甑片などが出土している。

出土遺物（図版 23）

113・114 は須恵器坏蓋で、断面三角形の鋭い稜をもつ。115～118 は須恵器坏身。115 のたちあがりは太く内傾し、端部は面をなす（陶邑編年 I 形式 1 段階に相当）。116 のたちあがりは長く、端部は丸い。底部外面 2/3 の範囲に回転ヘラケズリ調整を加える（陶邑編年 I 形式 2 段階に相当）。117・118 のたちあがり端部は内傾し、受部は上外方にのびる。119 のたちあがり端部は内傾し、受部は上外方にのびる。



第 63 図 S B 2 測量図・出土遺物実測図

119・120 は須恵器高坏。119 の脚裾部には凸線が 1 条巡り、柱基部は太い。120 の柱部には、長方形の透かしをもつ。121・122 は土師器甕。121 は口縁部片で、端部は外傾する面をなす。122 は底部片で、楕円形状の孔が三箇所に見られる。

時期：出土遺物には時期幅が認められるが、SB2 の廃棄・埋没時期は概ね古墳時代中期後半、5 世紀後半と考えられる。

SB3 (第 64 図、図版 22)

調査地中央部東寄り A2～B3 区に位置する竪穴建物で、建物東側と西側壁体の一部を検出した。第 VI 層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により、本来は第 IV 層上面より掘削された遺構である。SB3 は前述の SB1 と一部重複しており、調査当初は SB3 の存在を認識できず、SB1 として調査を進めたが、途中段階で、SB3 が SB1 の上面に存在していることを確認した。検出状況より平面形態は方形をなすものと思われ、規模は推定で一辺 5.4 m、壁高は 40cm である。建物埋土は 2 種類あり、上層は黒褐色シルト (10YR 2/3)、下層は上層にくらべ黒味の強い黒褐色シルト (10YR 2/2) である。建物内からは土師器片や須恵器片のほか、弥生土器片や石器等が混在して出土した。なお、建物西側の下層及び底面付近より、白玉 7 点がまとまって出土した。遺物の出土状況より、SB3 は SB2 と同様、人為的に埋め戻された建物と考えられ、建物廃絶時に白玉を使用した祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。

出土遺物 (図版 23)

123 は須恵器坏蓋。断面三角形の鋭い稜をもち、口縁端部は内傾する。124 のたちあがり欠損するが、受部径 14.8cm である。125 は土師器甕。口縁部は内湾し、口縁中位に稜をもつ。口縁端部は、内傾する面をもつ。126 は土師器高坏。椀形の坏部で、口縁部は外反する。127～133 は滑石製の白玉。127～131 は完存品で、色調は暗緑色であり、直径 3.9～4.8cm、厚さ 1.0～3.0cm である。

時期：出土遺物には時期幅が認められるが、検出層位や出土遺物より、SB3 の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半、5 世紀後半と考えられる。

2. 柱 穴

調査では、35 基の柱穴を検出した。平面形態は円形または楕円形をなし、規模は径 0.18～0.80 m、深さ 4～47cm である。柱穴掘り方埋土は、以下の 6 種類 (A 類～F 類) である。

A 類 - 灰色土 (5Y 6/1) : 5 基

[SP1～5]

B 類 - 灰黄色砂質土 (2.5Y 7/2) に暗褐色土 (10YR 3/3) がブロック状に混入 : 1 基

[SP6]

C 類 - 灰褐色土 (7.5YR 4/2) : 1 基

[SP13]

D 類 - 暗褐色土 (10YR 3/3) : 9 基

[SP7～12・20・34・35]

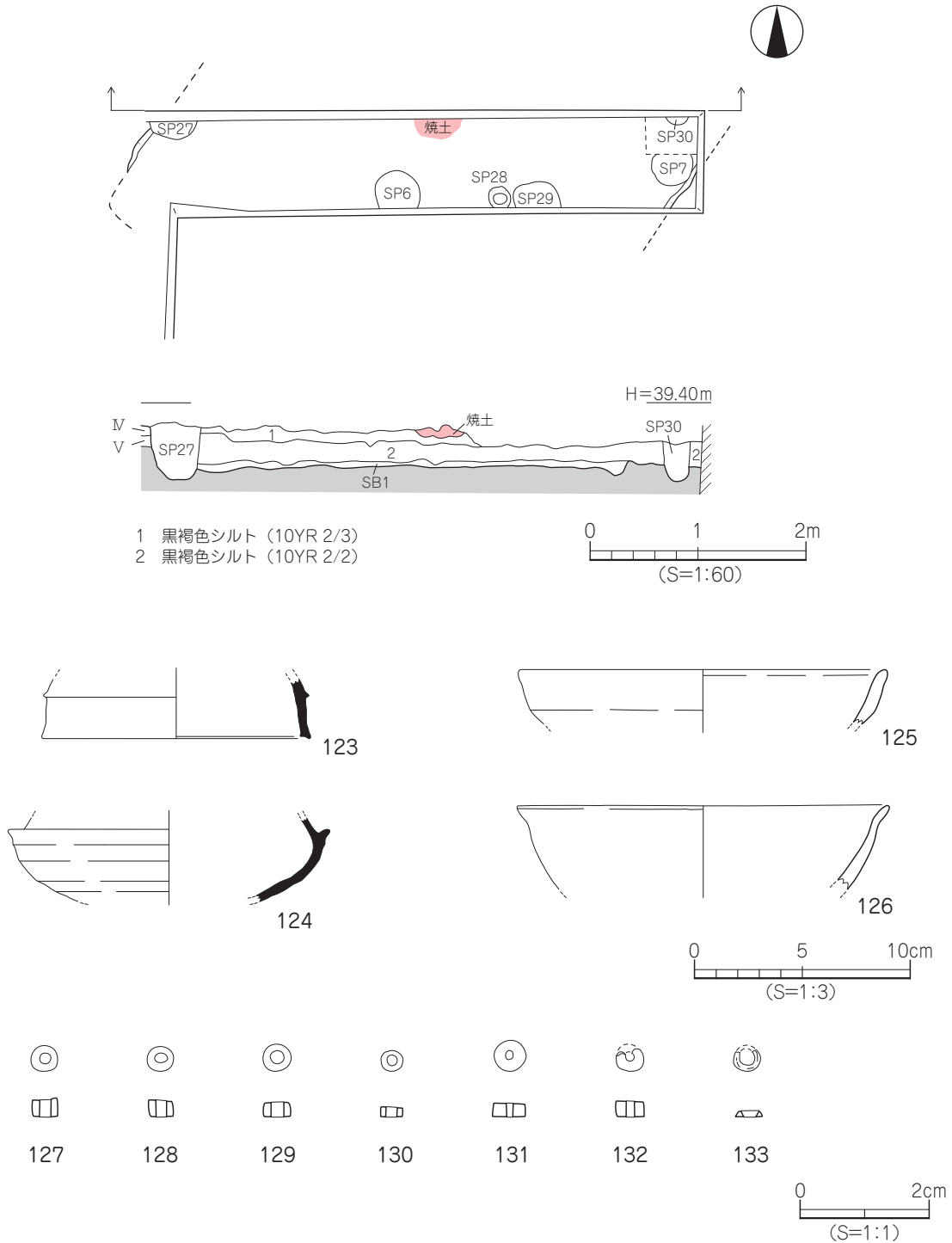
E 類 - 黒褐色シルト (7.5YR 3/1) に明黄褐色シルト (10YR 7/6) がブロック状に混入 : 16 基

[SP14 ~ 19・21・24 ~ 32]

F 類 - 黒褐色シルト (7.5YR 3/1) : 3 基

[SP22・23・33]

柱穴内からは弥生土器や土師器、須恵器のほか完形の石庖丁 (SP6) などが出土した。このうち、B 類と C 類の柱穴からは平安時代の土師器椀や高坏、D 類・E 類の柱穴からは弥生時代後期から古



第 64 図 S B 3 測量図・出土遺物実測図

墳時代後期までの土器片が出土した。なお、10 基の柱穴からは柱痕が確認され、柱痕径 12 ～ 15cm である。調査からは掘立柱建物は未検出であるが、今回検出した柱穴の中には本来、建物を構成する柱穴である可能性が高いものもあり、出土遺物などから B 類や C 類の柱穴は主に平安時代後期、D 類や E 類の柱穴は古墳時代後期頃に存在した建物を構成する柱穴の可能性はある。なお、各柱穴の詳細は表 39 に記す。

出土遺物（第 65 図、図版 23）

134 は SP26 出土の須恵器坏蓋。断面三角形状の丸味のある稜をもち、口縁端部は内傾する。135 は SP12 出土の土師器甕。口縁部は内湾し、口縁端部は内方に肥厚する。なお、口縁中位には沈線状の凹みが巡る。136 は SP6 出土の石庖丁。完存品で、径 0.7cm 大の孔を穿つ。結晶片岩製。

3. その他の遺構と遺物

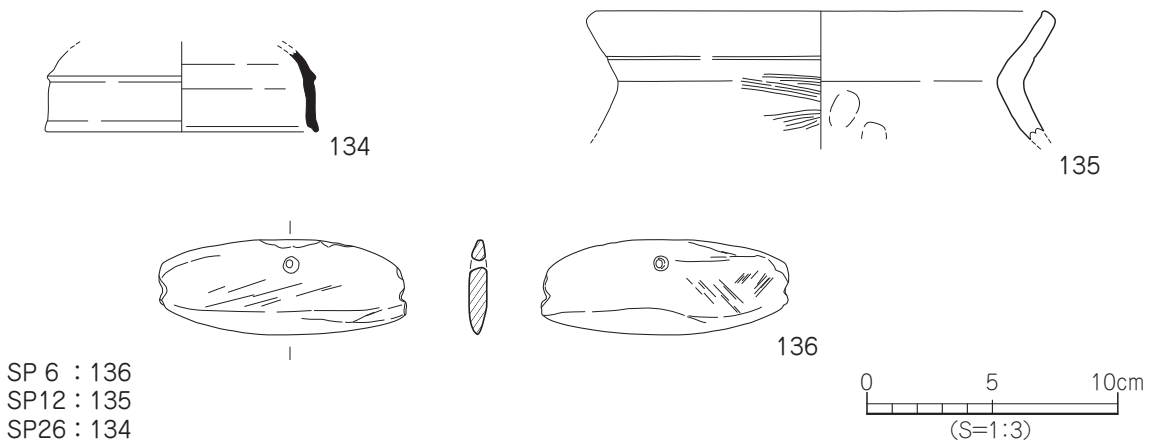
調査では、第Ⅲ層や第Ⅳ層掘り下げ時に遺物が出土した。第Ⅲ層中からは古墳時代から平安時代までの土師器や須恵器が出土し、第Ⅳ層中からは弥生土器（中期～後期）のほか、古墳時代の土師器や須恵器のほか石器が出土した。また、重機による表土掘削時に遺物が出土したが、層位や地点が不明であるため、ここでは「地点不明遺物」として実測図を掲載している。

第Ⅳ層出土遺物（第 66 図、図版 23）

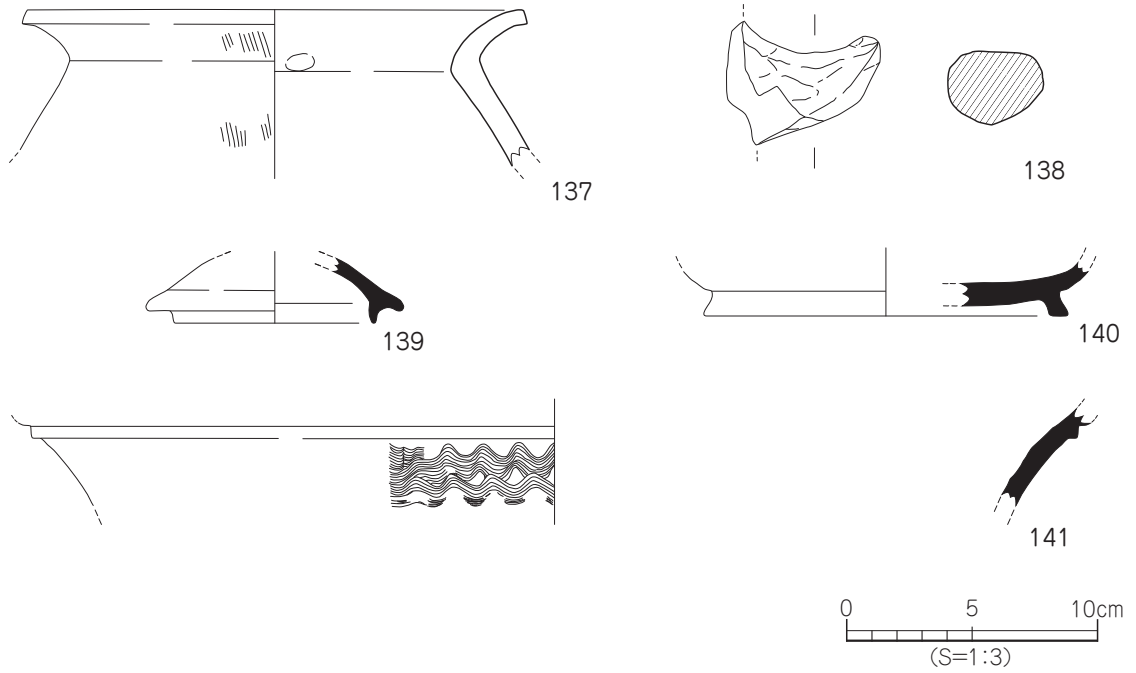
137 は土師器甕。外反口縁で、口縁端部は「コ」字状に仕上げる。138 は土師器甕の把手部で、断面形態は楕円形をなす。139 は須恵器坏蓋。かえりは下方に垂下し、端部は尖る。140 は須恵器坏。高台は比較的太く、「ハ」の字状に開く。141 は大型の須恵器甕。頸部片で、凸線と波状文を施す。

地点不明出土遺物（第 67 図、図版 23）

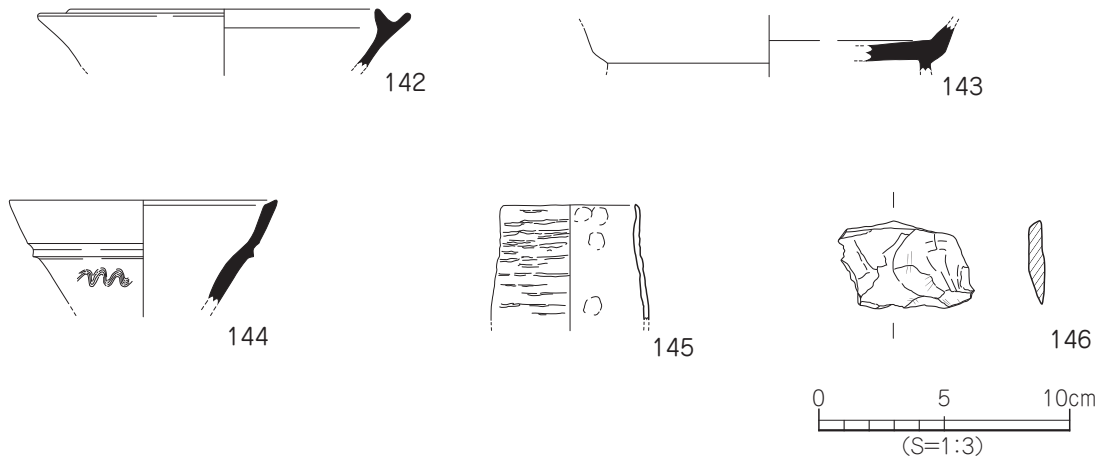
142 は須恵器坏身。たちあがり短く内傾し、端部は尖る。143 は須恵器坏で、高台は細く直立する。144 は須恵器甕。口縁端部は内傾し、頸部に凸線 1 条と波状文を施す。145 は土師器の製塩土器。器壁は薄く、外面にはタタキ痕が顕著に残る。146 はサヌカイト製のスクレイパーで、重量 14.069 g である。



第 65 図 柱穴出土遺物実測図



第 66 図 第IV層出土遺物実測図



第 67 図 地点不明出土遺物実測図

第 4 節 小 結

樽味高木遺跡 17 次調査では、弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認することができた。弥生時代では、中期後半の竪穴建物 1 棟 (SB1) を検出した。部分的な検出ではあるが、推定直径 6 m の円形建物と考えられる。樽味地区における該期の建物は検出事例が少なく、今回検出した SB1 の情報は、樽味地区における該期の集落様相や広がり を 解 明 する うえ で、 貴 重 な 資 料 と い える。

古墳時代では、竪穴建物 2 棟 (SB2・3) を検出した。両者共に古墳時代中期後半、5 世紀後半期の建物であるが、狭小範囲の調査であったため、建物の形態や規模等は不明確である。しかしながら、

埋土や遺物の出土状況などから、両者は自然埋没ではなく、人為的に埋め戻された建物であることがわかる。遺物の出土状況から、建物廃絶時には白玉を使用した祭祀儀礼が執り行われた様子が伺われるなど、2棟の建物からは数多くのデータを収集することができた。なお、前述したとおり、調査地壁面の土層観察により、カマドと思われる焼土の広がり確認されており、本来は、SB2・3以外にも古墳時代の竪穴建物が存在していた可能性が高い。

一方、遺物ではSB2より古墳時代中期前半、陶邑編年Ⅰ形式第1段階や第2段階と思われる須恵器蓋杯や高杯が出土している。松山平野における該期の遺物は出土事例が極めて少なく、平野内における須恵器の導入時期を考えるうえで、大変貴重な遺物といえる。

近年、樽味地区では古墳時代初頭の超大型建物3棟（樽味四反地遺跡6・8・13次調査）が発見されるなど、松山平野内において重要な遺跡地帯であったことが明らかになっている。今回の調査では大型建物に直接関係する遺構などは検出されなかったが、現在、遺跡の変遷や動態などの調査・研究が進められており、今回の調査成果は今後の作業に大いに役立つものである。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。記載内容は、以下のとおりである。

(1) 遺構一覧表

- 地区欄 グリッド名を記載。
- 規模欄 ()：検出値を示す。
- 埋土欄 複数の土層がある場合→「黒褐色シルト 他」と記載。
- 出土遺物欄 遺物名称を略記した。
例) 弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器

(2) 遺物観察表

- 法量欄 ()：復元推定値を示す。
- 調整欄 土器の各部位名称を略記した。
例) 天→天井部、口→口縁部、た→たちあがり、胴→胴部、底→底部
- 胎土欄 胎土欄には混和剤を略記した。
例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ
()の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
例) 石・長(1～4) → 「1～4mm大の石英・長石を含む」である。
- 焼成欄 焼成欄の略記について
◎→良好

表 38 竪穴建物一覧

竪穴 (SB)	地区	平面形	規模 長径×短径×壁高 (m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	A2～B3	(円形)	(6.30) × (6.30) × 0.48	黒色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生	弥生中期後半	
2	C・D2	(方形)	(2.32) × (1.10) × 0.34	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師・須恵	古墳中期後半	
3	A2～B3	(方形)	(5.40) × (5.40) × 0.40	黒褐色シルト 他	土師・須恵・玉	古墳中期後半	

遺構一覽

表 39 柱穴一覽

(1)

柱穴 (SP)	地 区	平 面 形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
1	B3	円形	0.47 × 0.43 × 0.06	灰色土	土師	柱痕
2	B4	円形	0.24 × (0.18) × 0.11	灰色土	弥生・土師	
3	B3	円形	0.29 × 0.24 × 0.38	灰色土	弥生・土師・須恵	柱痕
4	B3	円形	0.21 × 0.18 × 0.12	灰色土		
5	C2	円形	0.24 × 0.18 × 0.14	灰色土	土師	
6	A2・3	円形	0.44 × (0.43) × 0.18	灰黄色砂質土 (暗褐色土混)		
7	A2	円形	0.51 × (0.41) × 0.16	暗褐色土	弥生・土師・須恵	
8	B3	円形	0.36 × (0.24) × 0.45	暗褐色土	土師・須恵	柱痕
9	B3	不整円形	0.18 × (0.12) × 0.05	暗褐色土		
10	B3	円形	0.56 × (0.21) × 0.21	暗褐色土	土師	柱痕
11	B3	楕円形	0.28 × 0.21 × 0.08	暗褐色土		
12	B3	円形	0.54 × 0.53 × 0.41	暗褐色土	弥生・土師・須恵	柱痕
13	B・C2	楕円形	0.38 × (0.32) × 0.14	灰褐色土	土師	
14	C2	楕円形	0.49 × 0.42 × 0.47	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師	柱痕
15	B2	円形	0.66 × (0.24) × 0.15	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師・須恵	
16	B2	円形	0.68 × 0.66 × 0.21	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師・須恵	
17	B3	円形	0.69 × 0.67 × 0.24	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師	柱痕
18	B3	円形	0.26 × 0.24 × 0.22	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)		
19	B3	円形	0.41 × (0.06) × 0.04	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)		
20	B3	円形	0.38 × (0.08) × 0.21	暗褐色土		
21	B3	楕円形	0.61 × 0.54 × 0.26	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師	柱痕
22	B3	円形	0.31 × (0.16) × 0.11	黒褐色シルト		柱痕
23	B3	円形	0.18 × (0.11) × 0.08	黒褐色シルト		
24	B2	円形	0.71 × (0.31) × 0.31	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師・須恵	
25	B2	円形	0.61 × (0.47) × 0.11	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師・石	
26	B1・2	不整円形	0.68 × (0.55) × 0.16	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師	
27	B2	円形	0.54 × (0.21) × 0.16	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師・須恵	
28	A2・3	楕円形	0.23 × (0.23) × 0.14	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)		

柱穴一覧

(2)

柱穴 (SP)	地区	平面形	規模 長径×短径×深さ (m)	埋土	出土遺物	備考
29	A2・3	円形	0.54 × (0.28) × 0.18	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師	
30	A2	円形	0.29 × (0.14) × 0.18	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)		
31	B1・2	不整円形	0.68 × (0.18) × 0.28	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	土師・須恵・石	
32	C2	楕円形	0.60 × (0.40) × 0.26	黒褐色シルト (明黄褐色シルト混)	弥生・土師・須恵	柱痕
33	C2	円形	0.48 × (0.32) × 0.06	黒褐色シルト		
34	B1	円形	0.72 × (0.68) × 0.46	暗褐色土	弥生・土師・須恵	
35	B1・2	楕円形	0.80 × (0.72) × 0.44	暗褐色土	弥生・土師・須恵	

表 40 S B 1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
105	甕	口径 (18.0) 残高 7.6	外反口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。胴上部に「ノ」の字状文あり。小片。	マメツ	マメツ	明赤褐色 橙色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	23
106	甕	口径 (25.8) 残高 4.0	口縁部はやや内湾し、口縁端部に刻目、頸部に凸帯を貼付け、凸帯上に刻目を施す。小片。	ナデ	◎ヨコナデ ◎ナデ	橙色 橙色	石・長 (1~3) ◎		23
107	甕	口径 (38.6) 残高 3.6	大型品。口縁部を上方に拡張し、頸部に押圧凸帯文を貼付ける。小片。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎	黒斑	23
108	甕	残高 2.8	胴部小片。櫛描き沈線文 3 条あり。	ミガキ	ハケ・ナデ	赤褐色 黒色	石・長 (1) ◎		
109	甕	残高 4.5	胴部小片。ヘラ描き沈線文 3 条あり。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 黒色	密 ◎		
110	高坏	口径 (18.6) 残高 2.5	内湾口縁。口縁端部は内傾。凹線文 3 条あり。小片。	ヘラミガキ	ナデ (ミガキ)	黒褐色 にぶい橙色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	
111	甕	底径 (6.0) 残高 3.6	平底。1/4 の残存。	ヘラミガキ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長 (1) 金 ◎	黒斑	23
112	甕	底径 (6.6) 残高 2.6	平底。1/4 の残存。	ヘラミガキ	ナデ	褐色 橙色	石・長 (1~2) 金 ◎		23

表 41 S B 2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
113	坏蓋	残高 2.8	断面三角形の鋭い稜あり。小片。	◎回転ヘラケズリ ◎回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黄色	密 ◎		
114	坏蓋	口径 (13.5) 残高 3.1	断面三角形の鋭い稜あり。口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
115	坏身	たちあがり 残高 (8.8) 2.7	たちあがりは内傾し、端部は内傾する。受部は短く水平にのびる。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	23
116	坏身	たちあがり 器高 (10.2) 4.6	たちあがり端部は尖り気味に丸い。受部は短く外上方にのびる。1/4 の残存。	◎回転ナデ ◎回転ヘラケズリ (2/3)	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		23
117	坏身	たちあがり 残高 (11.6) 3.1	たちあがり端部は内傾する。1/4 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
118	坏身	たちあがり 残高 (9.6) 3.7	たちあがり端部は面をもち、凹線状の凹みをもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
119	高坏	残高 6.4	裾部に凸線が巡り、柱基部は太い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		23
120	高坏	底径 (9.0) 残高 4.3	長方形の透かしを看取。1/6 の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

遺物観察表

S B 2 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
121	甌	口径 (22.0) 残高 4.2	口縁部は直立し、端部は外傾する面をもつ。小片。	ハケ(4~5本/cm)	ハケ (4本/cm)	黄褐色 黄褐色	石・長 (1~2) 金◎		
122	甌	残高 2.0	楕円形状の孔を3ヶ所に看取する。小片。	ハケ	ナデ	橙色 浅黄色	石・長 (1~2) 金◎		23

表 42 S B 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
123	坏蓋	口径 (12.3) 残高 2.7	断面三角形の鋭い稜あり。口縁端部は内傾する凹面をなす。小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	
124	坏身	残高 3.9	受部は短く上外方にのびる。小片。	㊸回転ナデ ㊹回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
125	甕	口径 (16.8) 残高 2.5	内湾口縁。口縁端部は内傾する面をもつ。小片。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1~2) ◎		23
126	高坏	口径 (17.0) 残高 3.9	口縁部は外反し、端部は丸い。小片。	ヨコナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長 (1) ◎		23

表 43 S B 3 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径 (cm)	高さ (cm)	重さ (g)		
127	白玉	完存	滑石	暗緑色	4.00	3.00	0.056		23
128	白玉	完存	滑石	暗緑色	3.90	2.80	0.047		23
129	白玉	完存	滑石	暗緑色	4.00	2.20	0.045		23
130	白玉	完存	滑石	暗緑色	3.20	1.60	0.025		23
131	白玉	完存	滑石	暗緑色	4.80	2.00	0.074		23
132	白玉	3/4	滑石	暗緑色	(4.20)	2.70	0.060		23
133	白玉	3/4	滑石	暗緑色	(4.10)	1.00	0.008		23

表 44 柱穴出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
134	坏蓋	口径 (10.7) 残高 3.2	断面三角形の丸味のある稜をもち、口縁端部は内傾する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP26	
135	甕	口径 (17.8) 残高 5.1	口縁部は内方に肥厚し、口縁中位に稜をもつ。	㊸ナデ ㊹ハケ(8本/cm)	㊸ナデ ㊹ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) 金◎	SP12	

表 45 柱穴出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
136	石庖丁	完存	結晶片岩	9.8	3.8	0.7	43.08	SP6	23

表 46 第IV層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	甕	口径 (19.6) 残高 6.2	外反口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げる。小片。	ナデ (ハケメ)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 (1~2) 金◎		23
138	甌	残高 4.9	甌の把手部。断面楕円形。	ナデ	-	橙色	石・長 (1) ◎		23

第IV層出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
139	坏蓋	口径 (7.8) 残高 2.6	かえりは下方に垂下し、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
140	坏	底径 (14.4) 残高 2.1	高台は太く「ハ」の字状に開く。1/6の残存。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		23
141	甕	残高 3.8	頸部片で、凸線と波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		23

表 47 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
142	坏身	口径 (12.1) 残高 2.3	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
143	坏	残高 1.8	高台は細く、直立する。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
144	甕	口径 (10.5) 残高 4.2	口縁端部は内傾。頸部に凸線1条と波状文あり。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
145	製塩土器	口径 (5.2) 残高 4.6	外面にタタキ痕あり。1/5の残存。	タタキ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長 (1) ◎		23

表 48 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
146	スクレイパー	完形	サヌカイト	5.3	3.5	0.6	14.06		23

第7章 三町遺跡

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

本調査は、松山市の埋蔵文化財包蔵地『No.85 三島神社古墳跡』内における宅地造成に伴う事前調査である。2008（平成20）年6月13日、松山市三町一丁目412番1、413番1における埋蔵文化財の確認申込書が、松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課という。）に提出された。文化財課では、確認申込書が提出された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を把握するために、試掘調査を実施することになった。試掘調査は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターという。）が2008（平成20）年8月11日（月）に実施した。調査の結果、申請地の西側～南側にかけて弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認された。この結果を受け、文化財課と申請者は、発掘調査についての協議を行い、開発により遺跡が破壊される箇所のみを対象とする発掘調査を実施することになった。発掘調査は、申請者と埋文センターとの間で委託契約を締結し開発地内における弥生時代と中世の集落様相解明を主目的とし、2008（平成20）年11月25日より開始した。



第68図 調査地位置図

2. 調査組織

所在地：松山市三町一丁目 412 番 1 の一部

調査面積：55m²

契約者：中田 弼弘 氏

調査主体：財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(現 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター)

調査担当：埋蔵文化財センター主任 相原 浩二

第2節 層位

調査地は、松山平野東部の微高地上の標高 32.40 m に立地する。調査地の現況は、耕作地である。調査地の基本層位は、以下の 7 層である (第 70 図)。なお、調査箇所は 3 カ所のため、1～3 区に分けて調査を行った。

第 I 層：灰色土 (5Y 3/1) で、すべての区でみられる。層厚 18～20cm を測る。

第 II 層：橙色土 (7.5YR 7/6) で、すべての区でみられる。層厚 1～3cm を測る。

第 III 層：灰黄褐色土 (10YR 6/2) で、すべての区でみられる。層厚 8～18cm を測る。

第 IV 層：褐灰色土 (7.5YR 4/1) で、2・

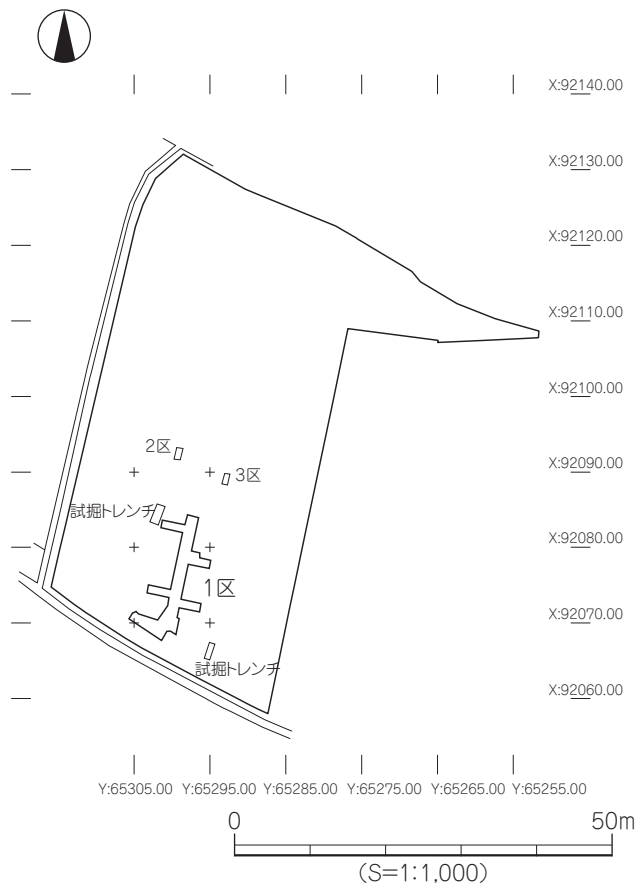
3 区ではみられない。1 区の遺構埋土で中世の遺物を包含する。層厚 4～14cm を測る。

第 V 層：褐灰色土 (10YR 4/1) で、1 区の南側に堆積する。弥生時代～古代の遺物を包含する。層厚 8～20cm を測る。

第 VI 層：褐灰色粘質土 (10YR 6/1) で、1 区の南側に堆積する。遺物は出土していない。層厚 1～12cm を測る。

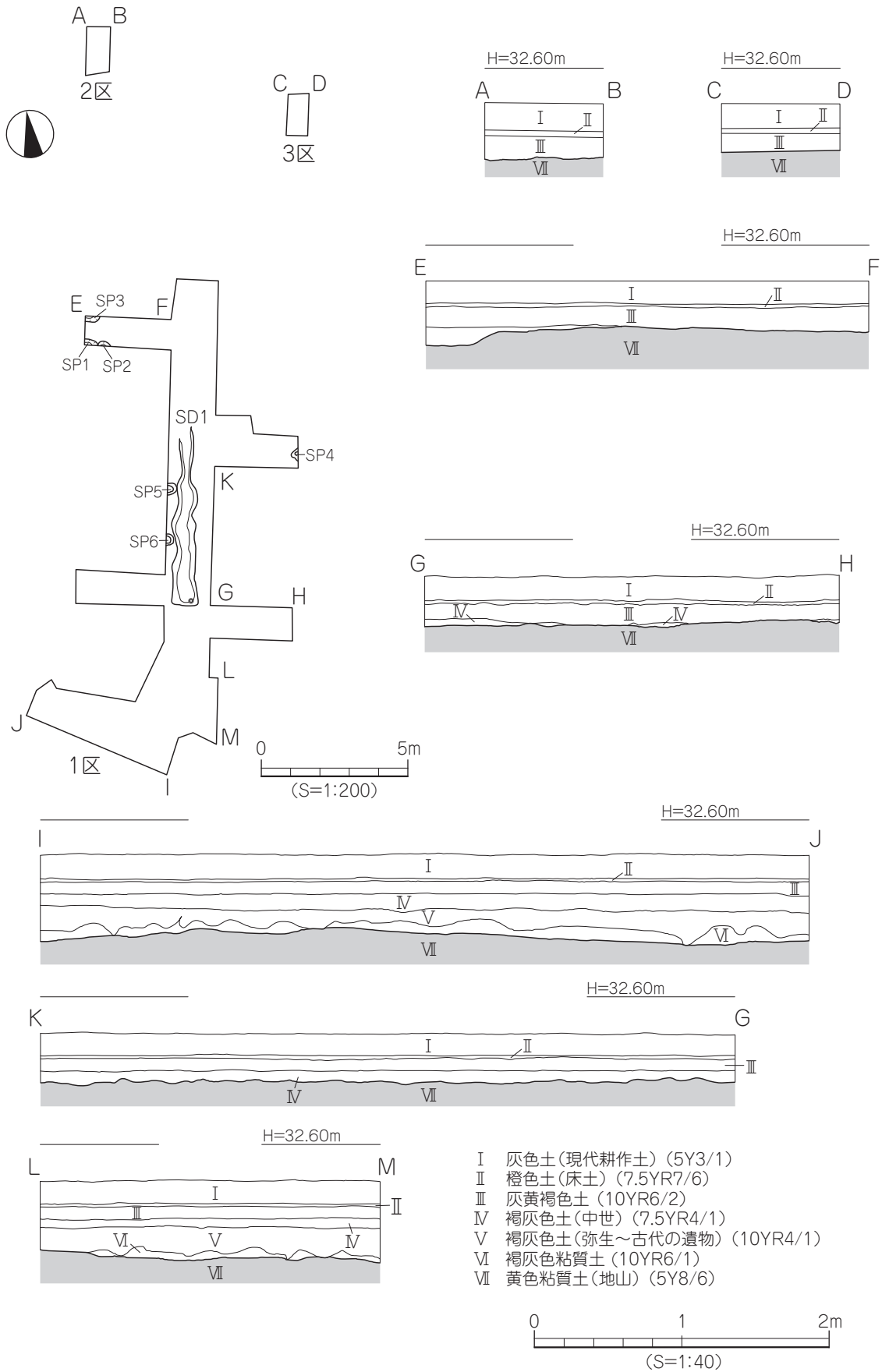
第 VII 層：黄色粘質土 (5Y 8/6) で、本層上面が遺構検出面となり地山と呼ばれる層である。南方向へ緩やかに傾斜する。

遺物の出土状況より、第 IV 層は中世、第 V 層は弥生時代までに堆積したものと考えられる。遺物の出土量は第 IV 層、第 V 層とも少ない。遺構の確認は、第 VII 層上面で行った。



第 69 図 調査区位置図

層位



第 70 図 土層図

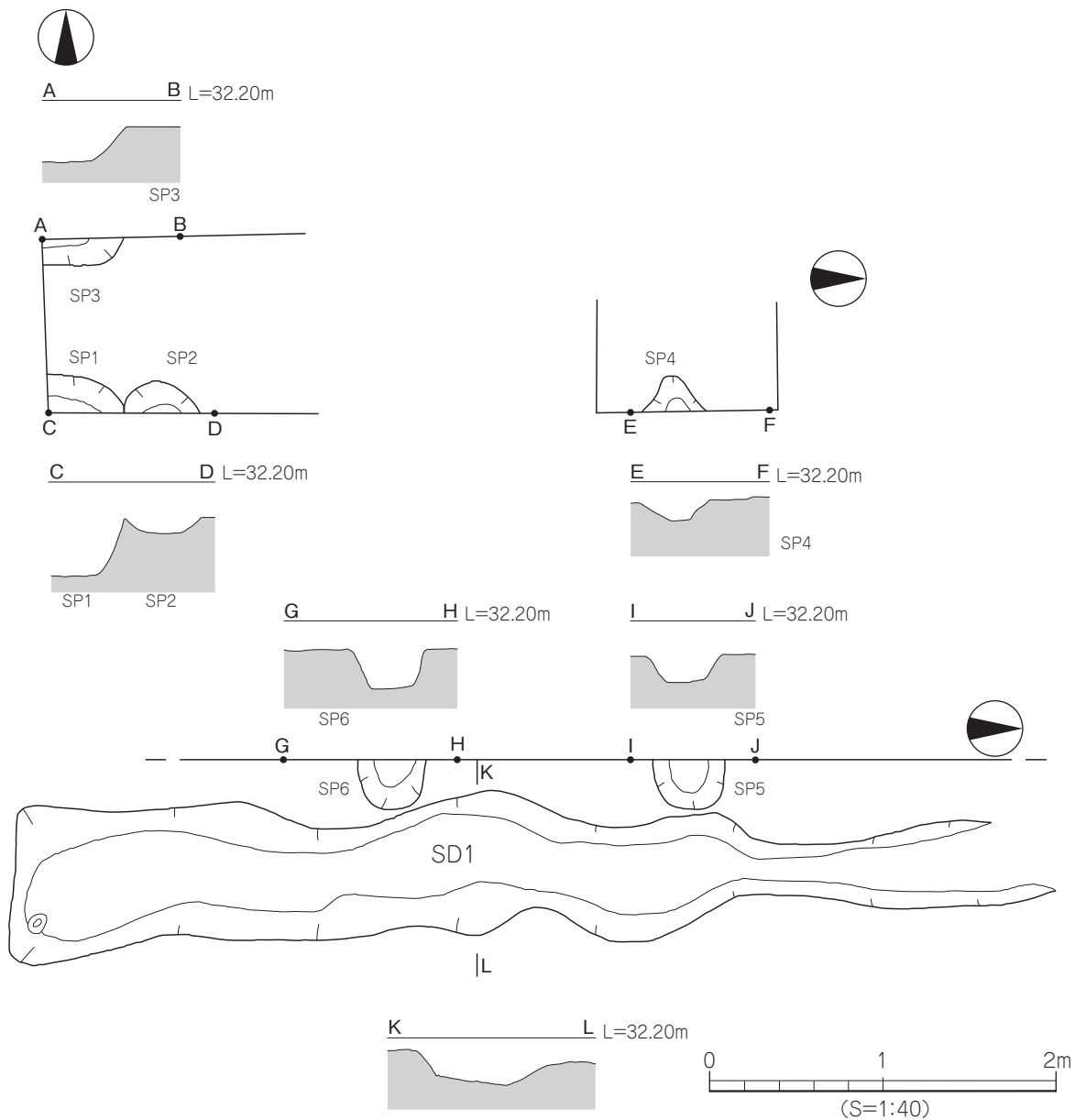
第3節 遺構と遺物

1区で検出した主な遺構は柱穴（SP）6基、溝（SD）1条である。2区、3区では遺構・遺物ともに検出していない。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器が出土している。以下、1区の遺構について記述する。

1. 柱穴（SP）

SP1（第71図、図版24・25）

調査区の北西部で検出した。南側の一部分が調査区外となり、全容は不明である。柱痕跡は、検出し



第71図 SP1～6・SD1 測量図

ていない。検出規模は長軸 0.46 m、短軸 0.17 m、深さ 0.19 m を測る。遺構埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、出土していない。

S P 2 (第 71 図、図版 24・25)

調査区の北西部で検出した。南側の一部が調査区外となり、全容は不明である。柱痕跡は、検出していない。検出規模は長軸 0.42 m、短軸 0.20 m、深さ 0.09 m を測る。遺構埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、出土していない。

S P 3 (第 71 図、図版 24・25)

調査区の北西部で検出した。北側の一部が調査区外となり、全容は不明である。柱痕跡は、検出していない。検出規模は長軸 0.43 m、短軸 0.20 m、深さ 0.07 m を測る。遺構埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、出土していない。

S P 4 (第 71 図)

調査区の北東部で検出したが、東側の一部は調査区外となる。柱痕跡は、検出していない。検出規模は長軸 0.48 m、短軸 0.22 m、深さ 0.04 m を測る。埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、瓦器が出土している。

出土遺物 (第 72 図 147、図版 26)

147 は瓦器の体部～口縁部の破片。口縁端部は丸くおさめられ、内面には横方向のヘラミガキが施される。外面には、指頭痕を残す。

時期：出土遺物より、13 世紀後半と考える。

S P 5 (第 71 図)

調査区中央部で検出したが、西側の一部は調査区外となる。柱痕跡は、検出していない。検出規模は長軸 0.40 m、短軸 0.32 m、深さ 0.25 m を測る。埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、出土していない。

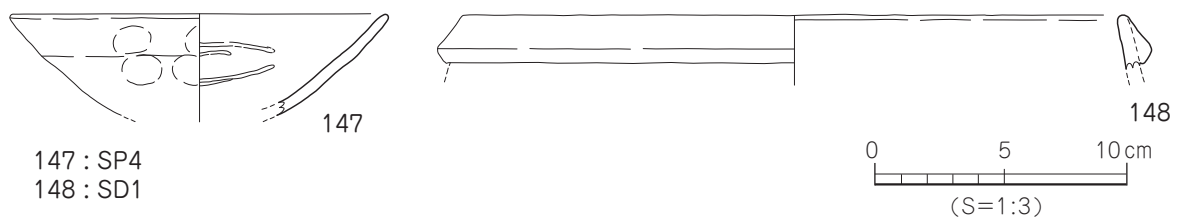
S P 6 (第 71 図)

調査区中央部で検出したが、西側の一部は調査区外となる。柱痕跡は、検出していない。検出規模は長軸 0.40 m、短軸 0.27 m、深さ 0.23 m を測る。埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、出土していない。

2. 溝 (S D)

S D 1 (第 71 図)

調査区中央部で検出した南北方向の溝で、検出規模は長さ 5.96 m、幅 0.30～0.93 m、深さ 0.01～0.11 m を測る。埋土は、褐灰色土 (7.5YR 4/1) である。遺物は、土師器が出土している。



147 : SP4
148 : SD1

第 72 図 S P 4・S D 1 出土遺物実測図

出土遺物（第72図148、図版26）

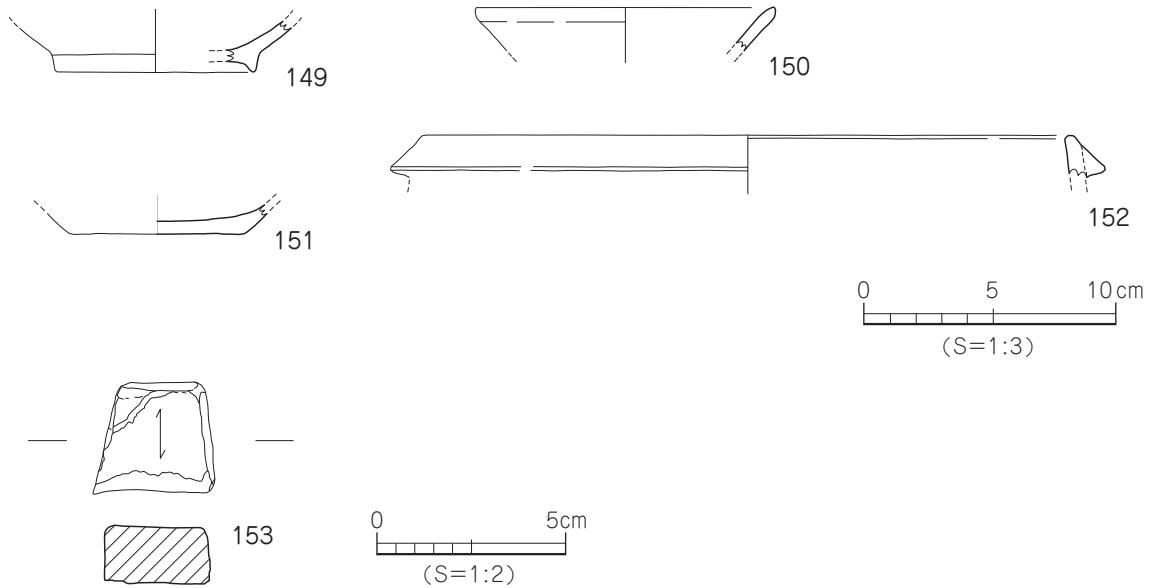
148は羽釜の口縁部片。口縁部外面直下に、貼付突帯を施す。

時期：出土遺物より、13世紀以降と考える。

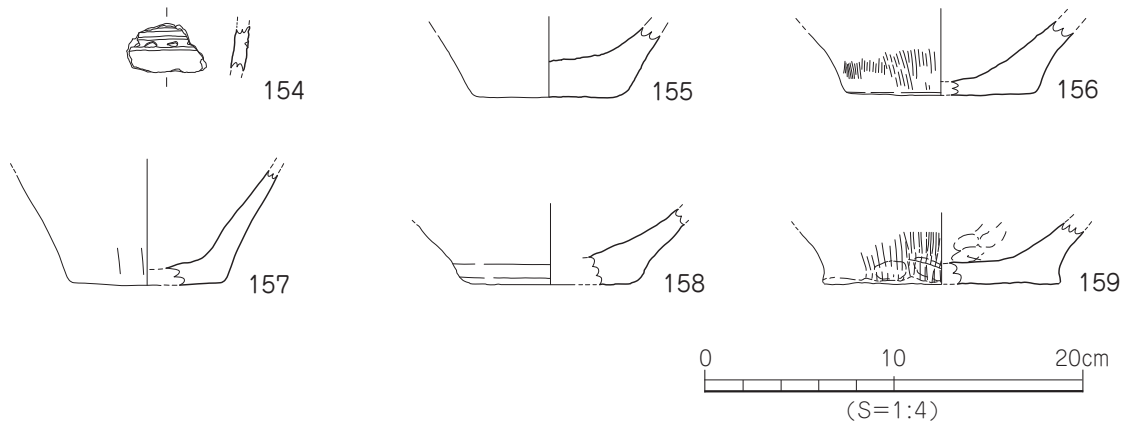
3. その他の出土遺物

第IV層出土遺物（第73図、図版26）

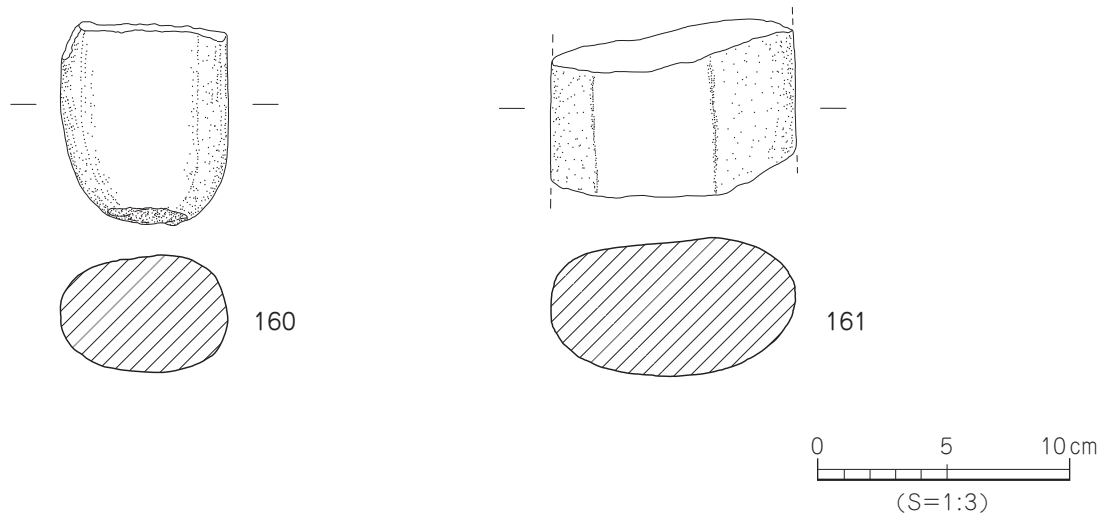
149は土師器杯の底部片。底部の切り離しは、回転糸切りである。150は土鍋の口縁部片、151は土師器杯の底部片である。152は羽釜の口縁部片、153は砥石である。



第73図 第IV層出土遺物実測図



第74図 第V層出土遺物実測図（1）



第 75 図 第 V 層出土遺物実測図 (2)

第 V 層出土遺物 (第 74・75 図、図版 26)

154 は甕の胴部片で、刺突列点文と沈線が施される。155～159 は甕ないし壺形土器の底部片。160 は敲き石、161 は磨石の破片と思われる。出土した土器の時期は、弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

第 4 節 小 結

調査地は、埋蔵文化財包蔵地『No.85 三島神社古墳跡』に所在する。1971 年に調査された三島神社古墳は全長 45.20 m の 6 世紀前半とされる前方後円墳である。現在は消滅している三島神社古墳から西方約 200 m には、全長 48.5 m の 5 世紀末とされる前方後円墳の経石山古墳がある。調査地は、これら 2 つの古墳がある台地から南方約 200 m の平地部に位置している。このため、古墳時代中期から後期にかけての集落関連の遺構・遺物の検出や出土が期待されたが、この時期の遺構は見つからなかった。今回の調査では調査範囲の制限もあり、弥生時代に時期比定される少量の遺物と数少ない中世の遺構・遺物を検出したのみであった。

弥生時代では明確な遺構は検出しなかったものの、第 V 層より弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土した。第 V 層は、1 区の南側の土層状況からさらに南側に広がるものと思われ、このことから調査地の南側には、この時期の遺構が遺存するものと考えられる。

中世では、柱穴や溝などを検出した。建物跡については、柱穴など一部の検出にとどまり全容を把握できなかった。遺構の検出状況からは、調査区の西側に建物跡などの集落関連遺構が広がるものと考えられる。

松山市三町内では、これまでに調査例がなく遺跡の様相が不明な地域であった。今回の調査では、調査面積の狭さもあり遺構の全容を明らかにすることはできなかったが、調査地南側には弥生時代、西側には中世の遺跡が広がるものと考えられ、三町における遺跡内容の一端を確認できたことは大きな成果であった。

遺構一覧・遺物観察表 — 凡例 —

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

平面形 () : 推定

(2) 遺物観察表の各掲載について。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 土製品の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、胴→胴部、底→底部。

胎土欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ。

() の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長(1~2) → 「1~2mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄 焼成欄の略記について。◎→良好。

表 49 柱穴一覧

柱穴 (S P)	地区	平面形	断面形	規 模 長径×短径×深さ (m)	埋 土	備 考
1	1区	(円形)	-	0.46 × (0.17) × 0.19	褐灰色土	
2	1区	(円形)	レンズ状	0.42 × (0.20) × 0.09	褐灰色土	
3	1区	(円形)	-	0.43 × (0.20) × 0.07	褐灰色土	
4	1区	(円形)	舟底状	0.48 × (0.22) × 0.04	褐灰色土	瓦器
5	1区	(円形)	逆台形状	0.40 × (0.32) × 0.25	褐灰色土	
6	1区	(円形)	逆台形状	0.40 × (0.27) × 0.23	褐灰色土	

表 50 溝一覧

溝 (SD)	地 区	方 向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	備 考
1	1区	北→南	逆台形状	5.96 × (0.30 ~ 0.93) × 0.01 ~ 0.11	褐灰色土	土師器

表 51 SP4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
147	椀	口径 (15.0) 残高 4.0	体部~口縁部の破片。口縁端部は丸くおさめる。	ナデ (指頭痕)	ヘラミガキ	淡黄色 灰白色	微砂粒 ◎		26

表 52 SD1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形 態・施 文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
148	羽釜	口径 (26.3) 残高 2.2	口縁部の外面直下に突帯を施す。	㊦ヨコナデ	㊦ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1~5) ◎	煤付着	26

遺物観察表

表 53 第Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
149	高台付 椀	底径 (8.0) 残高 2.0	高台は短く外に開く。端部は短くおさめる。	ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎		26
150	坏	口径 (11.9) 残高 1.7	口縁部片。端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	◎		26
151	坏	底径 (6.9) 残高 1.2	底部片。体部は外上方に立ち上がる。	ヨコナデ ㊦回転糸切り	ヨコナデ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	微砂粒 ◎		26
152	羽釜	口径 (25.4) 残高 1.65	口縁部の外面直下に突帯を施す。	㊧ヨコナデ	㊧ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙明赤褐色	石・長 (1) ◎	黒斑	26

表 54 第Ⅳ層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
153	砥石	欠損	凝灰岩	3.0	3.2	1.6	17.19		26

表 55 第Ⅴ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
154	甕	残高 2.4	刺突列点文と沈線が施される。	マメツ	マメツ	灰褐色・にぶい橙色 灰褐色	石・長 (1) 石金 ◎		26
155	壺	底径 8.0 残高 3.7	平底で安定する底部。 体部は外上方に立ち上がる。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長 (1～5) ○		26
156	甕	底径 (10.0) 残高 3.9	平底の底部。	㊦ハケ (5本/cm) →ナデ ㊦マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 灰黄褐色	石・長 (1～2) 石金 ◎		26
157	甕	底径 (8.4) 残高 6.1	平底の底部。	㊦ナデ (工具痕) ㊦ナデ	マメツ	にぶい黄褐色 灰白色	石・長 (1～4) ◎		26
158	壺	底径 (9.6) 残高 4.0	平底の底部。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1～4.5) ◎	黒斑	26
159	壺 or 甕	底径 (12.6) 残高 3.2	平底の底部。	㊦ハケ (4本/cm) ㊦ナデ (指頭痕・ 工具痕)	ナデ (工具痕)	灰黄褐色・褐灰色 灰白色	石・長 (1～2) ◎		26

表 56 第Ⅴ層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
160	敲き石	欠損	砂岩	8.1	6.6	4.7	399.8		26
161	磨石	欠損	砂岩系	6.9	9.7	5.4	517.3		26

第8章 調査の成果と課題

本書に掲載した6件の発掘調査では、主に弥生時代から古代までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代別にまとめを行う。

1. 遺跡の変遷

(1) 弥生時代

前期では時期の異なる遺構であるが、樽味高木遺跡17次調査検出の竪穴建物(SB1)より、前期末に時期比定される土器片が出土している。また、三町遺跡からも、包含層資料ではあるが、該期の土器片が出土した。中期は前半の資料はなく、後半に限られる。桑原東稲葉遺跡2次調査検出のSB2と樽味高木遺跡17次調査検出のSB1は中期後半の竪穴建物で、両者共に推定直径6mの円形建物である。また、樽味高木遺跡16次調査からは、中期後半から後期の溝を検出している。後期では桑原遺跡6次調査において、推定直径6mの円形竪穴建物1棟(SB1)を検出した。建物に付随する炉址からは、後期後半に時期比定される土器が出土した。

(2) 古墳時代

古墳時代は前期の資料はなく、中・後期の遺構や遺物を確認した。中期では桑原東稲葉遺跡1次調査より、一辺8mの大型竪穴建物を検出した。SB1は長方形建物で、床面からは建物内を区切るための仕切り溝を検出した。なお、床面検出の土坑SK1からは完形の壺のほか、滑石製の勾玉や白玉、土製の丸玉などが出土している。また、樽味高木遺跡17次調査では、2棟の竪穴建物(SB2・3)を検出した。このうち、SB3からは白玉7点が出土しており、SB3では玉類を使用した建物の廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。これら3棟の建物の廃棄・埋没時期は、すべて古墳時代中期後半、5世紀後半である。なお、樽味高木遺跡17次調査検出のSB2は、人為的に埋め戻された建物で、建物内から弥生時代中期段階の土器が混在して出土している。また、遺物の中には、陶器編年I型式第1段階や第2段階、いわゆる初期須恵器が含まれている。松山平野内における初期須恵器の出土事例は極めて少なく、これらの須恵器は、平野内への須恵器導入時期を考えるうえで貴重な資料といえよう。

後期では桑原東稲葉遺跡1次調査にて、後期後半の竪穴建物1棟を検出した。SB2は一辺5.6～5.75mの方形建物で、建物内からは装飾が施された滑石製の紡錘車が1点出土している。また、同2次調査からは、3棟の竪穴建物を検出した。SB1・3・4は重複する方形建物で、すべて古墳時代後期後半期のものである。なお、SB1とSB3は検出状況より建て替えが施された建物である。

このほか、桑原東稲葉遺跡1・2次調査からは、北東-南西方向の溝を検出したが、位置や断面形態、出土遺物等より、両者は同一の溝と考えられる。溝内には水流が認められたことから、水田や畑耕作に伴う水路的な役割を果たしていたものと推測される。なお、遺物では樽味高木遺跡17次調査において、出土地点は不明であるが製塩土器の破片が1点出土している。

(3) 古 代

古代の遺構は、桑原東稲葉遺跡1・2次調査で確認した。1次調査では、溝SD4を検出した。部分的な検出の為、規模や形状は定かではないが、溝内からは奈良時代に時期比定される遺物が出土している。また、同2次調査では6棟の掘立柱建物を検出した。出土遺物等より、掘立1・3・4は飛鳥時代前半、掘立2・5・6は奈良時代の建物と考えられる。桑原地区では、溝や自然流路などの遺構は数多く発見されているが、建物址などは検出事例が少なく、古代集落の様相は不明な点が多い。発掘調査では、調査地壁面の土層観察等により、褐色や灰褐色を埋土とする古代の遺構は多数確認されているが、開発等に伴う緊急調査が多く、これらの遺構は平面調査を実施する機会が非常に少ない。しかしながら、今回報告する桑原東稲葉遺跡1次調査では、包含層資料ではあるが平安時代中期の土器の出土があり、さらには、同2次調査検出の柱穴や包含層中より緑釉陶器の破片が各1点出土するなど、これまでも数多くの遺物が発見されている。今後は、桑原地区における古代集落の様相解明が急務となろう。

(4) 中・近世

中世では、三町遺跡において溝と柱穴を検出した。溝SD1からは13世紀以降に時期比定される土師器羽釜などが出土している。狭小範囲の調査ではあるが、柱穴の検出は調査地周辺に掘立柱建物など中世集落が展開していることを示唆するものといえよう。なお、本調査は、三町内における初例の発掘調査であり、遺跡の様相を知るうえで重要な資料を得ることができた。

近世では、桑原東稲葉遺跡2次調査において溝を検出した。おそらく、水田や畑耕作に伴う遺構と考えられる。

2. 出土遺物について

今回報告する6件の調査では、弥生時代から近世までの様々な遺物が出土した。ここでは、出土事例の少ない遺物を中心に、説明を行う。

まず、土器では4点の須恵器を取り上げる。桑原東稲葉遺跡2次調査検出の竪穴建物SB1からは、特殊な形態の壺(72)(本編では、特殊扁壺と呼称)が出土した。5×8cm大の破片で、内側に向けて僅かに湾曲している。外面には弧状に描かれた凹線が二重に巡り、凹線間には連続する刺突文が施されている。色調は灰色で、厚さは6～8mmである。次に、樽味高木遺跡17次調査からは、初期須恵器が出土した。古墳時代中期後半に廃棄・埋没した竪穴建物SB2から、弥生土器や土師器に混じって、3点の初期須恵器が出土している。坏身(115)は、推定たちあがり径8.8cmの破片で、たちあがりは太く内傾し、たちあがり端部は内傾する面をなす。受部は短く水平にのび、体部は俵形をなす。次に、坏身(116)は推定たちあがり径10.2cmで、たちあがりは比較的長く、たちあがり端部は丸く仕上げている。受部は短く上外方にのび、底部は平底である。底部1/2の範囲に右回りの回転ヘラケズリ調整を施している。色調は、内外面共に灰色である。高坏(119)は坏下部から脚部にかけての破片で、柱部は太く、脚裾部には凸線1条が巡る。この高坏は、伊予市にある市場南組窯跡から出土する初期須恵器と同タイプのものである。器形の特徴より、115は陶邑編年I型式1段階(TK73)、116はI型式2段階、(TK216)、119はI型式1段階もしくは2段階に相当するものと考えられる。

このほか、桑原東稲葉遺跡2次調査からは奈良時代や平安時代の土器が出土しているが、この中には赤色塗彩土器や緑釉陶器が含まれている。掘立6出土の土師器(80)は、「ハ」の字状に開く高台が付く坏Bで、底部推定径9.8cmである。小片ではあるが、底部外面には回転ヘラケズリが施されており、器表面には橙色の塗彩が施されている。器形の特徴より、奈良時代前半の土器と考えられる。また、緑釉陶器は、碗2点が出土している。柱穴SP118出土品(85)は土師質で、円盤高台状の底部をもつ。胎土は黄白色で、濃緑色の釉が部分的に残存している。出土地点不明品(95)は口縁部片で、緩やかに外反し、端部は丸く仕上げている。須恵質で、胎土は灰色をなし、濃緑色釉が器表面全体に施されている。

写真図版

写真図版 1 ～ 4：桑原遺跡 6 次調査

写真図版 5 ～ 10：桑原東稲葉遺跡 1 次調査

写真図版 11 ～ 16：桑原東稲葉遺跡 2 次調査

写真図版 17 ～ 19：樽味高木遺跡 16 次調査

写真図版 20 ～ 23：樽味高木遺跡 17 次調査

写真図版 24 ～ 26：三町遺跡

写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35mm判フィルムカメラ・デジタルカメラで補足している。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド 45A	レンズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28～85mm他
フィルム	白黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フィルム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 450MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製 版：写真図版 175 線
印 刷：オフセット印刷
用 紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』 vol.1～20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』 vol.1～6

[大西 朋子]



1. 調査前全景
(西より)



2. 1区遺構検出状況
(北東より)



3. 2区遺構検出状況
(東より)



1. 1区遺構完掘状況
(南東より)



2. 2区遺構完掘状況
(東より)



3. SB1検出状況
(南東より)



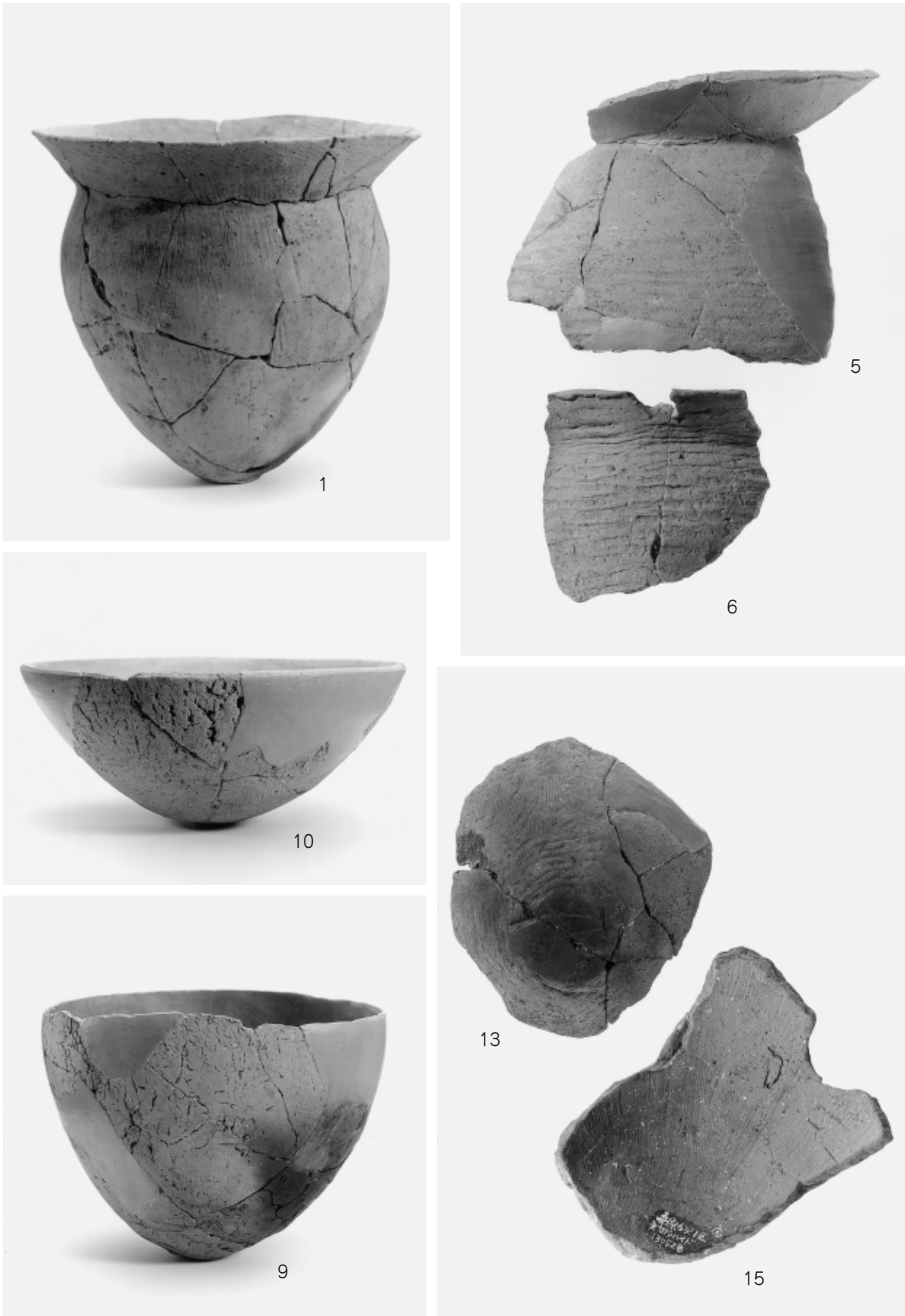
1. SB1 炉遺物出土
状況 (南東より)



2. SB1 炉完掘状況
(北西より)



3. SD1 検出状況
(南より)



1. 出土遺物 (SB1 : 1、第V層 : 5・6・9・10・13・15)



1. 調査地全景（西より）



1. 東半部遺構検出状況
(東より)



2. 西半部遺構検出状況
(北西より)



3. SB1・2・3完掘状況
(北西より)



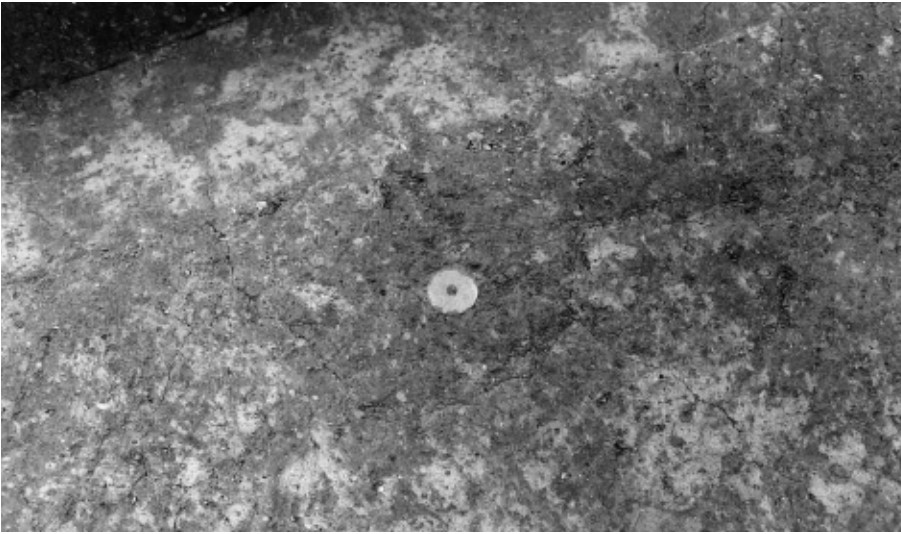
1. SB1完掘状況
(東より)



2. SB1遺物出土状況
(南より)



3. SK1遺物出土状況
(南より)



1. S B 2 紡錘車出土
状況 (東より)



2. S D 3 完掘状況
(北東より)

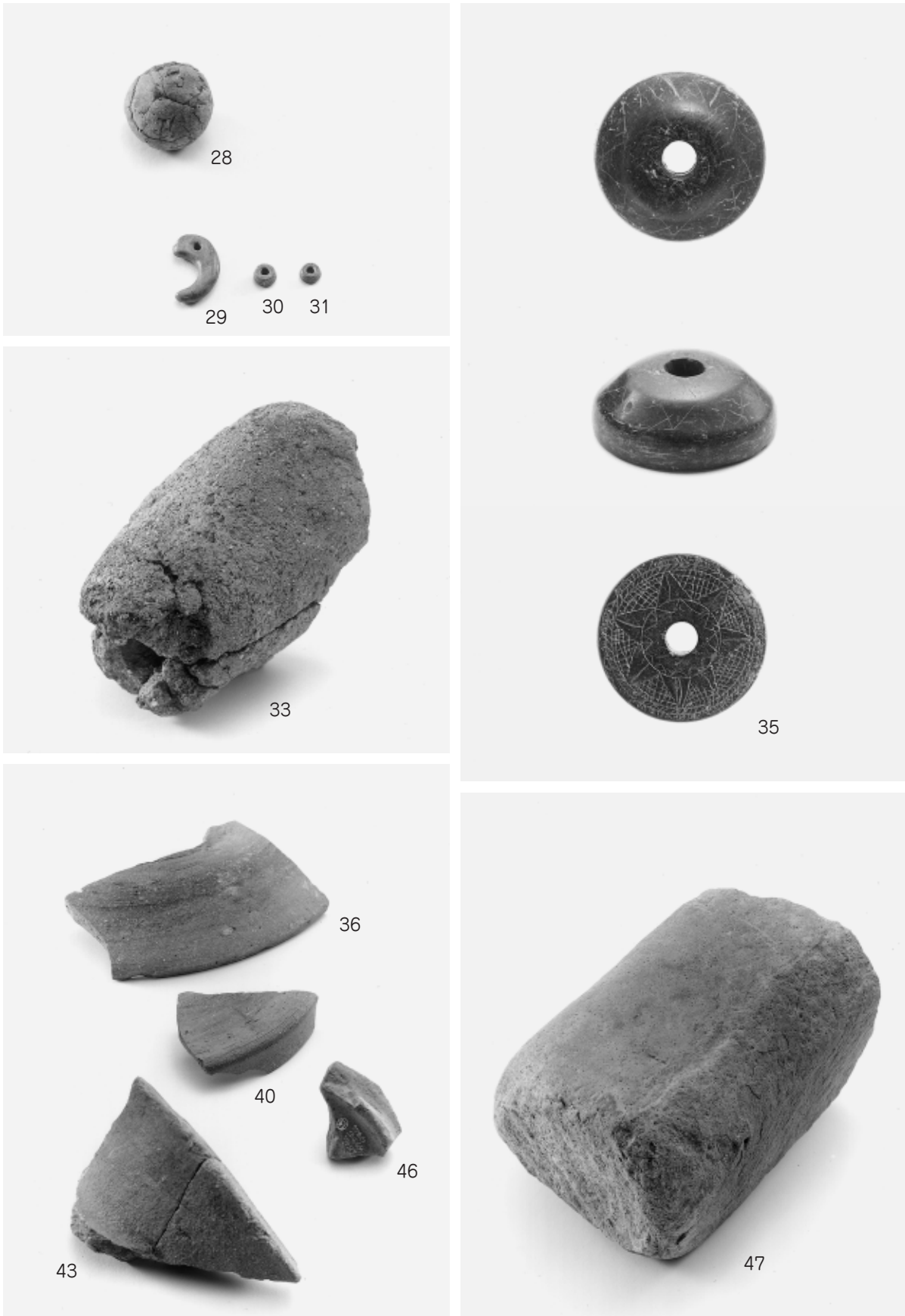


3. S D 4 完掘状況
(北西より)



1. 出土遺物 (SB1 : 17・18・22～25、SK1 : 26・27)

図
版
10



1. 出土遺物 (SK1 : 28 ~ 31、SB2 : 33・35、SD4 : 36・40・43・46・47)



1. 調査地全景 (西より)



2. 東半部完掘状況 (西より)



1. 西半部完掘状況（西より）



2. SB 2完掘状況（西より）



3. SB1・3・4完掘状況（南東より）



1. SD3遺物出土状況
(南西より)



2. SD3完掘状況
(南西より)



3. 掘立1・2検出状況
(南西より)



1. 掘立 4 検出状況
(北東より)



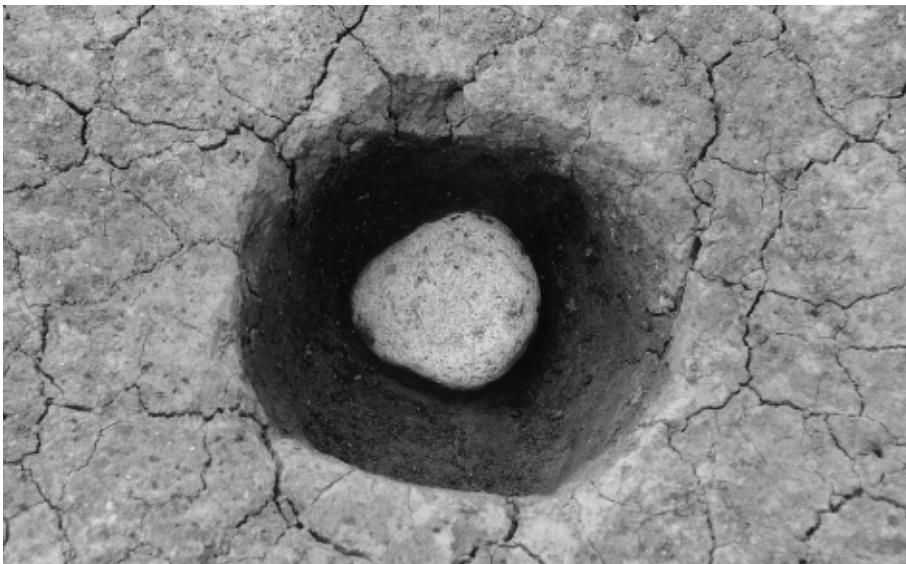
2. 掘立 5 検出状況
(東より)



3. 掘立 3 (SP125) 検出
状況 (南より)



1. 掘立1 (SP40) 検出
状況 (東より)



2. 掘立5 (SP28) 検出
状況 (南東より)



3. 現地説明会風景
(東より)



1. 出土遺物 (SB2 : 67 ~ 69、SB1 : 71・72、SD3 : 75 ~ 77、SP8 : 81・83、第V層 : 95 ~ 97)



1. 調査前全景
(南西より)



2. 遺構検出状況
(西より)



3. 東壁土層 (西より)



1. 遺構完掘状況
(東より)



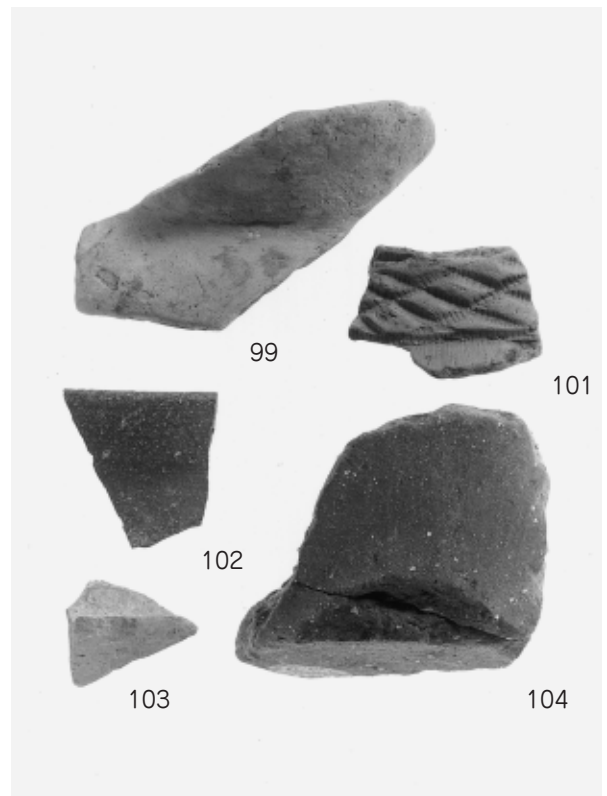
2. SK 1 完掘状況
(北より)



3. SP 7 遺物出土状況
(北より)



1. SP7完掘状況（北より）



2. 出土遺物（SK1：98、SP5：99・102、SP7：100、SP1：101、第三層：103・104）



1. 調査地全景 (南より)



1. 遺構検出状況
(南より)



2. SB1 検出状況
(西より)



3. SB2 検出状況
(南東より)



1. SB3遺物出土状況
(西より)



2. 遺構完掘状況
(南西より)



3. 現地説明会風景
(南より)



1. 出土遺物 (SB1 : 105 ~ 107・111・112、SB2 : 115・116・119・122、SB3 : 125 ~ 133、
SP6 : 136、第IV層 : 137・138・140・141、地点不明 : 145・146)



1. 調査地全景(南より)



2. 1区掘削状況
(南より)



3. SP1・2・3検出状況
(東より)



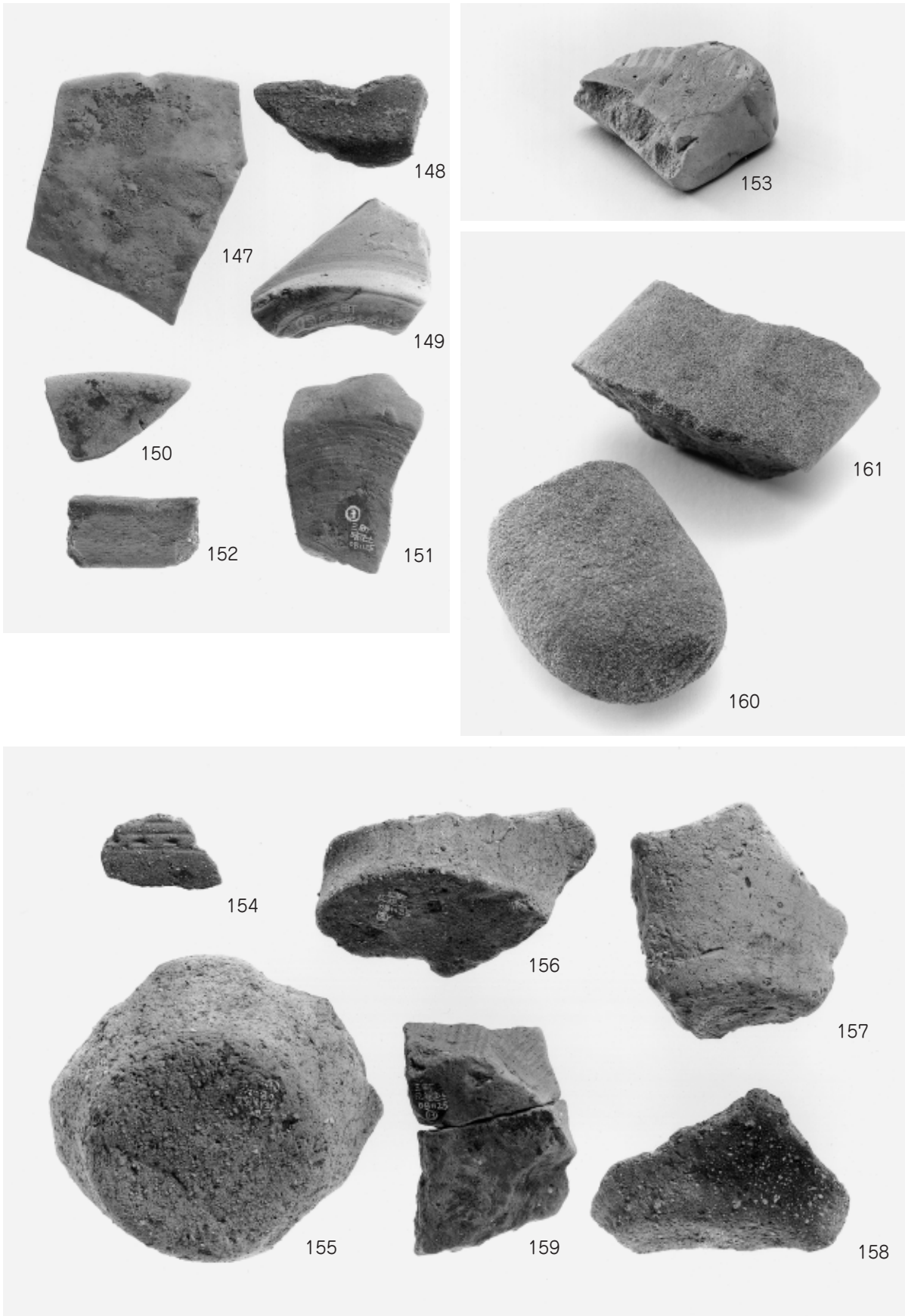
1. 調査作業状況
(南より)



2. SP1・2・3検出状況
(東より)



3. 1区完掘状況(南より)



1. 出土遺物 (SP4 : 147、SD1 : 148、第IV層 : 149 ~ 153、第V層 : 154 ~ 161)

報 告 書 抄 録

ふりがな	くわばらちく いせき
書名	桑原地区の遺跡Ⅴ
副書名	桑原6次・桑原東稲葉1次・桑原東稲葉2次・樽味高木16次・樽味高木17次・三町
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第181集
編著者名	宮内 慎一・相原 浩二・水本 完児・大西 朋子
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒791-8032 愛媛県松山市南斎院町乙67番地6 TEL 089-923-6363
発行年月日	西暦2016(平成28)年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査要因
		市町村	遺跡番号					
くわばら 桑原遺跡 6次調査	まつやましくわばら 松山市桑原一丁目	38201	565	33° 50' 13"	132° 47' 24"	20130507 } 20130607	116.15	住宅建築
くわばらひがしいなば 桑原東稲葉遺跡 1次調査	まつやましくわばら 松山市桑原二丁目	38201	521	33° 50' 14"	132° 47' 28"	20081201 } 20090130	188.00	宅地造成
くわばらひがしいなば 桑原東稲葉遺跡 2次調査	まつやましくわばら 松山市桑原二丁目	38201	550	33° 50' 14"	132° 47' 28"	20110422 } 20110704	約619.00	住宅建築
たるみたかぎ 樽味高木遺跡 16次調査	まつやましたるみ 松山市樽味四丁目	38201	523	33° 50' 20"	132° 47' 20"	20090121 } 20090127	11.60	広告塔設置
たるみたかぎ 樽味高木遺跡 17次調査	まつやましたるみ 松山市樽味四丁目	38201	537	33° 50' 19"	132° 47' 17"	20100208 } 20100331	約45.00	共同住宅建築
さんちょう 三町遺跡	まつやましさんちょう 松山市三町一丁目	38201	520	33° 49' 42.348"	132° 47' 40.446"	20081125 } 20081205	約55.00	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桑原遺跡 6次調査	集落	弥生 古墳 中世	竪穴建物 溝 溝		弥生			
桑原東稲葉遺跡 1次調査	集落	古墳 古代	竪穴・溝 溝		土師・須恵・石・勾玉・白玉・紡錘車 土師・須恵・石		建物廃絶に伴う祭祀	
桑原東稲葉遺跡 2次調査	集落	弥生 古墳 古代 近世	竪穴 竪穴・溝 掘立 溝		弥生 土師・須恵 土師・須恵・緑釉 陶磁		古代の掘立柱建物を検出	
樽味高木遺跡 16次調査	集落	弥生 中世	溝 土坑		弥生 土師・須恵			
樽味高木遺跡 17次調査	集落	弥生 古墳	竪穴 竪穴		弥生・石 土師・須恵・白玉		初期須恵器の出土	
三町遺跡	集落	弥生 中世	溝		弥生・石 土師・須恵・瓦器・石			
要 約	<p>本書掲載の遺跡からは、弥生時代から近世までの遺構や遺物を確認した。弥生時代では桑原遺跡6次調査や桑原東稲葉遺跡2次調査、樽味高木遺跡17次調査にて中期後半や後期後半の竪穴建物を検出した。古墳時代になると、桑原東稲葉遺跡1次・2次調査や樽味高木遺跡17次調査において中期や後期の竪穴建物や溝を検出した。検出した竪穴建物内からは土器のほか白玉や勾玉、石製紡錘車などが出土し、建物廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。また、樽味高木遺跡17次調査検出の竪穴建物からは、松山平野内では出土例の極めて少ない初期須恵器が出土し、平野内への須恵器導入時期を解明するうえで貴重な資料を得ることができた。また、桑原東稲葉遺跡1次・2次調査からは、古代の建物址や溝を検出した。特に、2次調査では飛鳥時代前半と奈良時代の建物が各3棟確認されており、桑原地区における古代集落様相が知れる重要な成果といえる。</p>							

松山市文化財調査報告書 第181集

桑原地区の遺跡 V

桑原6次・桑原東稲葉1次

桑原東稲葉2次・樽味高木16次

樽味高木17次・三町

平成28年3月25日 発行

編集 公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
発行 埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL (089) 923-6363

松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町六丁目6番地1
TEL (089) 948-6605

印刷 原印刷株式会社
〒799-1594 今治市喜田村1丁目2-1
TEL (0898) 48-5511
